香川日独協会会報

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

KAGAWA

第１４号

November 2008

目　　次

「若者の会」発足によせて —その後の歩み— ---------- 中村敏子　3

駐日ドイツ大使との茶話会 --------- Junge Gemeinschaft Kagawa(若者の会)　5

イザローンでの奮闘記
—振り返ること、書き記すことの大切さ— ---------- 長澤あい　9

思いがけない友人達との再会 ---------- 川田敦子　24

私のドイツ語との出会い ---------- 綾井泰徳　28

日独戦争と第九
—映画『バルトの楽園』の背景など— ---------- 小阪清行　29

ドイツ訪問記（2008 Sommer） ---------- 大坂靖彦　50

ドイツ語スピーチコンテスト ---------- 53

----- 特集 ワーグナー没後125周年 -----
余はいかにしてワグネリアンとなりしか
－運命の女神ノルンのつむぐ綱は未だ切れず、筆者とつながっている－------ 近藤昌紀　57

父称についての考察
－アラビア語圏、ロシア語圏にまたがる氏名の法則性－---------- 近藤昌紀　66

ベルリン・フィル創立１２５周年によせて ---------- 68

独日協会ボン創立３０周年によせて ---------- 71

旧友の涙 ---------- 中村敏子　76

平成18年度香川日独協会事業報告 ---------- 78

平成19年度香川日独協会事業報告 ---------- 82

「若者の会」発足によせて ―その後の歩み―

香川日独協会 会長　中村敏子

２００７年４月群馬県草津で行われた全国日独協会連合会総会の主題は「日本の若者をいかにしてドイツに関心をむけるか」ということにつきた。
はじめての試みとして別枠で各地日独協会から若い会員が出席し今の彼らをとりまく情勢と日独友好をめざして何ができるかなどについて討論がなされたと聞く。多くの若者の目線がアメリカとアジア（中国）に向けられている今は、香川でも同様に外国語講座の受講生の動向とよく似た様相を呈している。
ともあれ友好交流は地道な人と人との信頼関係が積み重なって友情の絆となり又若者をも引き付ける魅力の一つになるのではないだろうか。
駐日デア独大使からはこれからの日独両国の若者をいかにしてお互いの国、文化、学術、芸術などに関心を向けさせるかが課題であるとの喚起があった。
香川日独協会からも若者代表として長澤あい会員、中尾友紀会員の２名が参加した。彼女たちによるとはじめての取り組みは今後に大きな課題を残して終了したものの、大使ご自身の言葉で「若者を育てることが最大の目標」とのスピーチに感動したようであった。きっと大きな希望と責任を感じたことであろう。

こうした流れの中で香川日独協会では会発足以来、学生会員としての登録をしてきた若者たちの間に熟年層と同じ行事で同時開催となると経済的、行事内容など様々なところにひずみが生じるということがわかり、最近では若者たちのいらだちのようなものが手にとるように伝わってきた。ここで別スタイルのグループ作りの必要性を痛感していた。そして群馬での若者会議を契機にこの変化をどこかいい形でジャンプさせなければならないとまわりの方々と相談しその機をさぐってもいた。

そんな矢先７月、駐日ドイツ大使ご夫妻　駐日フランス大使ご夫妻が同時に来県という素晴らしい機会にめぐまれた。
だが、香川での両大使ご一行の滞在時間は１泊を含めて１７時間という非常にタイトなスケジュールが大使館から発表された。徳島経由で香川を訪問され、翌早朝、高知へ発たれるという極めて短い滞在であった。
ＥＵの中心をになうドイツ、フランス両大使のご訪問は真鍋香川県知事、大西高松市長の表敬からはじまり各地の視察と香川独・仏両協会合同のレセプションなど暑い最中のさぬき路をかけるには余りにも厳しいものであった。
なにはともあれこの好機を逃しては若者たちが意気消沈するとの想いと彼らの熱意を訴えて大使館側とのやりとりで細かい時間調整が続き、あとは大使ご自身のご判断をお待ちすることとなった。

間髪をいれず大使からのありがたいご指示と強いご要望により１９日夕刻、宿泊ホテルでの茶話会３０分という貴重な時間を若者たちにいただいた。
これで彼らの望んでいた駐日独大使ご臨席のもと「若者の会」発足という大きな願いに一歩近づくこととなった。
今振り返ると、独在住の友人を通じてのアレクサ独大使夫人との信頼関係がこの度のご配慮におよびご夫人に負うところも大であったと感謝いたしている。
勢いづいた若者たちはあれよあれよという間に２０名ちかく集まり各自役割分担し試行錯誤しながらこの日のための計画表を見せてくれるまでになった。
すでに各自の得意分野を上手く拾い上げこのまま会に移行しても機能する陣容に目をみはり、逞しいエネルギーにも驚かされた。
当日は分刻みの短い茶話会の場であったが、直接ドイツ大使に励ましと勇気をいただいたということは何よりも彼らの意気を掻き立て震えるような魂を頂いたことであろう。
「若者の会」JG Kagawa の立ち上げ発足については別項でメンバーが素直な感想を記述しているのでご参照いただきたい。この時の感動を忘れず 7 月 19 日を彼らの記念日として胸に収めてほしいと思う。
発足と同時に JG Kagawa の目標を記した申し合わせ事項もできあがった。
その後の活動については自主運営ということで香川日独協会本体は干渉せず、ただ尋ねられ相談をされればそれに応じて報告を待つということにしている。

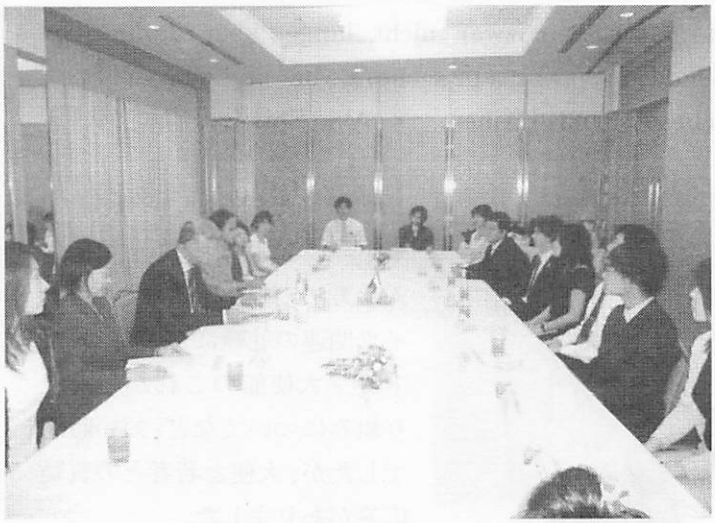
2008 年 3 月「ドイツの社会福祉史展」をアイパル香川で開催した時には若者の会のメンバーの助けで３週間という長期開催を成し遂げることができた。また、展示にあたりドイツ大使館から広報担当部長クラウス・フィーツェ氏が来県され会員と一緒に汗を拭きながら作業された様子に触発され、開会式には大勢の方の参加と手伝いを申し出てくださった。この時も僅かの空き時間をいただいてフィーツェ部長と若者たちとの話し合いの会がもたれ部長からはご家族の話にまでおよぶ和やかな時間を過ごしたようである。
「若者の会」の活動はＨＰの立ち上げ、国際交流の行事には積極的に参加、月１回のシュタムティッシュを持ち時に応じた楽しむ会も開催、Web 上での交流などなどの報告を受けている。会運営の基本は会員全員に公平に周知し事にあたることをモットーにしているという。メンバー達が力を合わせ全国的に注目される「若者の会」として育ってくれているのはこの上ない喜びである。

JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa
JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa

駐日ドイツ大使との茶話会

Junge Gemeinschaft Kagawa(若者の会)

2007年7月19日(木)、全日空ホテルクレメント高松の20階マーレにて、駐日ドイツ大使との茶話会が開催されました。これを機に結成いたしました JGK(若者の会)のメンバーが茶話会を振り返ります。



◆茶話会には、ドイツ大使館からハンス=ヨアヒム・デア大使と通訳官の田口様にご臨席を賜り、17名の若者との懇談が行われました。写真撮影も若者によるものです。過密スケジュールにもかかわらず、私達の為に時間をとってくださいました。

香川日独協会会員として7年間ずっと願っていた、ドイツ好きの若者が集う会が今回のドイツ大使との茶話会をきっかけに発足した事は私にとってこの上ない喜びです。大使との話しは時間の関係でほとんど出来ずに残念でしたが、ざっくばらんに話しが出来、いつの日か大使館の若者！？を香川に派遣しましょう、との言葉も頂きました。その日を楽しみに仲間との交流を深めていきたいと思います。　JGK会計担当　川田　敦子

私にとって今回の茶話会はドイツ大使のお話が直接聞けるだけでなく、香川県在住のドイツに興味のある同世代の人達とも知り合えた、貴重な出会いの場となりましたとなりました。茶話会を通して、参加していたメンバーがみな「何らかの形でこれからもドイツと関わりを持っていきたい」と感じていることにとても共感し、茶話会によってＪＧＫという組織ができたことを大変嬉しく思いました。ＪＧＫの未来がとても楽しみです。

小林　由佳

JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa
JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa

JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa
JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa

ドイツにまだ一度も行ったことがなく言葉も初心者の私ですが、今回皆さんと一緒にこのような素晴らしい会に参加させて頂き、本当に嬉しく思います。ドイツ大使との茶話会、続いて夕食会と、私にとって忘れられない貴重な体験となりました。皆さんと一緒に楽しいひと時を過ごし、これまで遠く感じていたドイツが少し近くなったような気がしました。本当にありがとうございました。　　児玉　律子

Ich habe mich sehr gefreut, als ich zu dem Treffen mit dem deutschen Botschafter eingeladen wurde. Es war ein sehr interessanter Abend. Alles war perfekt organisiert. Die Unterhaltung mit dem Botschafter war zwar nicht lange, aber dafür sehr unterhaltsam. Auch das anschließende Essen war sehr schön. Es hat mir sehr viel Spaß gemacht und wird ein unvergessliches Erlebnis bleiben.　　Akio Shimizu(清水　秋男)

◆ドイツに関する情報やその入手方法、日独の経済関係とドイツ関連の就職について、また、ドイツ大使館のこれからの取り組みについてなど、短い時間でしたが、大使と若者との質疑応答がありました。

とても短い時間でしたが、ドイツ大使の日独交流に対する想いを直接伺うことができ、また良好な両国の関係をさらに深め、発展させたいという大使の気持ちが本当に伝わってきました。特に、若い世代にそれを望み、期待しているという話には嬉しく思いました。

実際に寸暇を惜しんで、自らの理念を体現している様子には心を揺さぶられる想いでした。終始、あまりのカッコ良さにシビレて何も質問出来なかったのは悔しかったです。

高田　陽光

大変お忙しい中、ドイツ大使が若者と少しでも話す機会を持ちたいと希望され、実際にお時間を頂戴できたことに対し、まず感謝の気持ちを表したいと思います。このような大使のお気持ちを理解し、私達自身が動き、ドイツとの交流の場を広く持たなければならないと、改めて感じました。まだ発足したばかりの JGK ですが、次にお会いできる時には、私達の成長した姿を見て頂きたいと思います。　　JGK-HP 担当　高橋　以知子

JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa
JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa

JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa
JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa

大使とはどんな職業なんでしょう。先日デアさんにお目にかかるまでそんな事全く考えた事が無かったです。例えば、Mr.スボックも大使らしいです、知ってますか？それから、マグマ大使ってのもいますけどアレは大使かどうかすら怪しいです。と、まあそんな感じの印象だったわけですが、彼がほんの数時間来県しただけで、幾らかの人達の意識をそれまでと少し変えてしまったようです。生活まで変わってしまった方もいるかもしれないです。ちなみに、僕が京都で自然観察の研修に参加した時などは、3日間いたにも関わらず集合時間に遅れて研修内容が変わってしまったぐらいです。未だに大使の仕事についてはよくわかんないままなのですが、今回茶話会に参加した方々が中心となり、JGKという日独交流を目的とした新しいグループがスタートしました。大使の仕事が分からなくてもJGKならわかります。JGKの活動内容の報告を中心にHPで情報交換を行っていますので、是非皆さんの参加をお待ちしていますね。　JGK-HP担当　増岡　秀樹

とにかく緊張した～！周りからも同じ様な緊張感がひしひしと伝わってくるほど。ですが、真っ先に質問をしようと心に決めていたので、思い切って挙手しました。今回の茶話会はドイツ大使と対面し、ドイツへの関心がさらに大きくなったのはもとより、JGKのメンバーの皆さんとお会いできて「ぼくもドイツ語を頑張らないと」と思えたことが何よりも大きな収穫でした。

これからもJGKの皆さんからいい刺激をたくさん受けたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いしまーす。　渡部　直人

今回の茶話会における準備からJGK結成と活動開始に至るまで、人の輪も広がり、学ぶ事がたくさんありました。ドイツ大使が若者と直接に向き合おうとされたように、人と人との交流は直接的なものが一番効果的である、とつくづく感じました。この機会をつくって頂いたことに大変感謝しております。　JGK庶務担当　長澤　あい

JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa
JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa

JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa

Junge Gemeinschaft Kagawa

JGK は、これからのドイツと日本の親善・友好を深めるために、香川日独協会の若い世代の会員を中心に、平成 19 年 7 月 19 日に結成されました。

JGK は、ドイツに興味を持った若者が集まり、お互いに情報・興味・関心を交換し合い、親睦を深め、香川在住また香川を訪れたドイツ人と積極的に交流をしようとする会です。

JGK は、主に、毎月 1 回 Stammtisch を開催し、Web 上での交流の場も創ります。

Die Junge Gemeinschaft Kagawa wurde am 19. Juli 2007 von den jungen Mitgliedern der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa und unter anderem gegründet, um die künftigen freundschaftlichen Beziehungen zwischen Deutschland und Japan zu fördern.

JGK ist tätig mit dem Ziel, sowohl die Freundschaft zwischen den jungen Leuten mit Interesse an Deutschland zu vertiefen und Informationen über Deutschland auszutauschen, als auch mit den Kagawa bewohnenden und besuchenden Deutschen aktiv auszutauschen.

JGK bemüht sich, nicht nur monatliches Treffen Stammtisch durchzuführen, sondern auch die Kommunikationsmöglichkeit auf der Webseite zu bieten.

◆JGK は、ドイツに興味を持つ若者を発掘し、広く交流ができる場を創りたいと考えております。よって、メンバー以外の方の Stammtisch へのご参加も大歓迎します。

◆なお、JGK のホームページは香川日独協会のホームページとも連結されており、その場でご覧頂くことが出来ます。Stammtisch に関する情報など今後も内容を発展させていく予定です。

【JGK-HP アドレス】http://jgk.jdg-kagawa.org/

JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa JGKagawa

イザローンでの奮闘記

～振り返ること、書き記すことの大切さ～

長澤　あい

2005年4月から12月まで、ノルトライン・ヴェストファーレン州のイザローン(Iserlohn)にある小学校(Grundschule Bleichstrasse)にてインターンシップをさせて頂きました。ここに紹介させて頂く記録は、イザローン滞在時から帰国後にわたり香川日独協会のホームページにて連載させて頂いたものです。

イザローンは、人口は約10万、場所は地図上で、ドルトムント(Dortmund)、ハーゲン(Hagen)またゾースト(Soest)などの近くにあり、北はルール地域、南はザウアーラント(Sauerland)という森が広がっております。イザローンの名前は、Iser＝Eisen(鉄)、Lohn＝Wald(森)、という由来があるそうで、「森にある石を積み重ね、火をおこしていたら、その火の熱で石がだんだんもろくなり、金属質の泥となって流れ出した。」これがここでの最初の鉄の発見で、特に針金の生産が盛んになり、近くを流れるバールバッハ川(Baarbach)の水力で機械を動かし、裁縫用針、騎士が着用していた鎖服、またタバコケースもここで製造され、スウェーデン、ロシアそしてイギリスなどへ輸出されたそうです。現在では、製薬業をはじめ100年以上の歴史をもつビールの醸造(Iserlohner Pilsener)などが主要産業となっています。また、スポーツにおいては、アイスホッケーが盛んで、小学校の授業にも取り入れられています。

◇2005年　イザローンより

①07月22日　「大変ご無沙汰致しております。」
②09月07日　「新学期を迎えて」
③10月17日　「野外活動、幼稚園そしてボンへ」
④11月14日　「木の葉もだんだんと、」
⑤12月07日　「クリスマスの装い」

◇2006年　事後報告・イザローンを振り返る

①02月26日　「子供達とのお別れ」
②03月12日　「やっぱりお寿司は人気」
③03月21日　「休み時間は必ず外へ」
④04月03日　「君はやっとドイツ語を話したね」
⑤04月19日　「老人会に紛れ込む」
⑥06月01日　「スポーツを楽しむ」
⑦06月14日　「剣は友を呼ぶ」
⑧07月09日　「夏休み」
⑨07月29日　「幼稚園児はなかなか手ごわい」
⑩09月10日　「幼稚園での日本週間」
⑪10月19日　「跳び箱の練習で学んだこと」
⑫01月15日　「色々なクリスマスカード」(2007年)

①2005年07月22日　イザローンより「大変ご無沙汰致しております。」

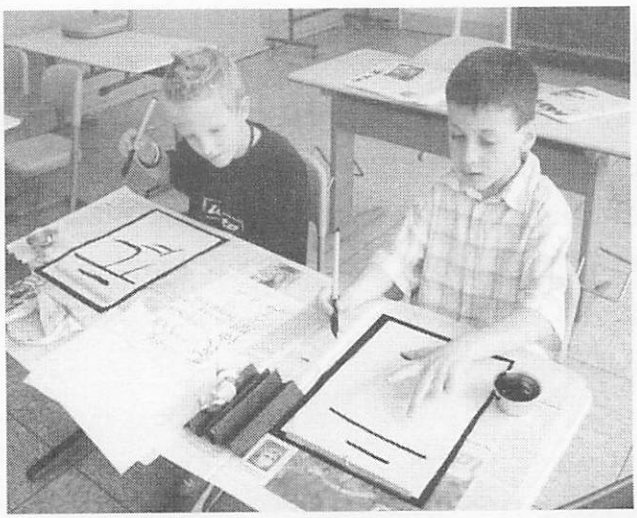
大変ご無沙汰しております。暑い日が続いておりますが、お元気ですか?

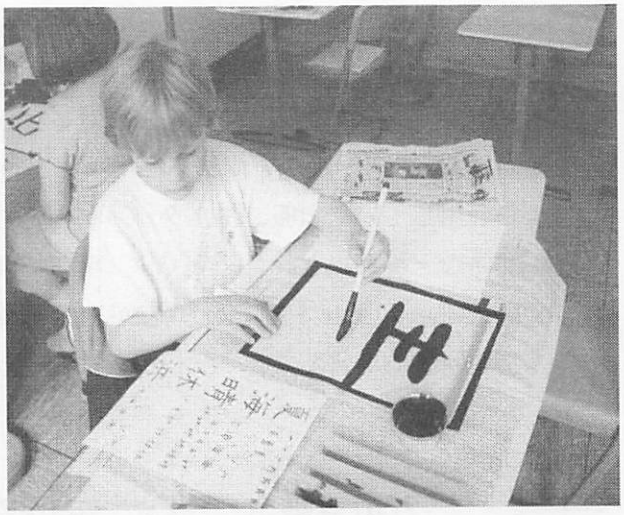
小学校での研修が約3ヶ月過ぎました。毎日が色々な発見で興味深い一方、授業の準備に追われ、楽しいよりも大変といった方がいいかもしれません。先生方はジーンズで授業、職員室は大きな長机が二つのみ、朝食をとるための時間、ヒッツフライ、などなど。。。また、外国人も多い為、日本では想像しがたい問題も色々あるようです。

日本に帰る前にヴィースバーデンに立ち寄り、5年ぶりに留学時代の友人やお世話になった方々に会うことが出来ました。

8月後半から、新学期が始まります。かわいい一年生を迎えることになります。色々と授業案を練らなければなりません。

それでは、取り急ぎお知らせまで。





〈写真：Japanische AG(Arbeitsgemeinschaft)　日本文化クラブにて〉

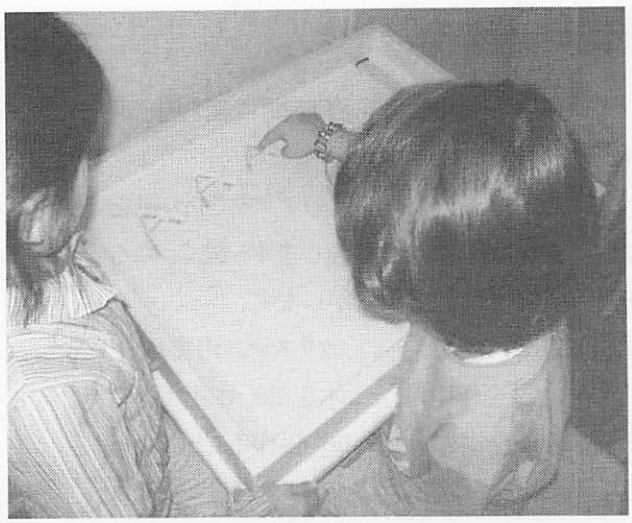
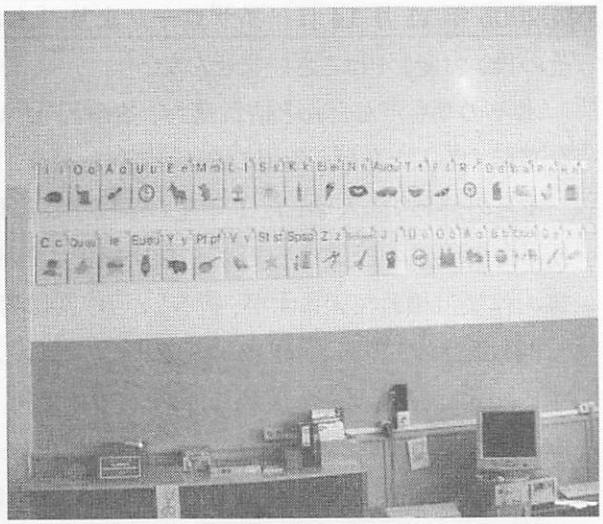
②2005年09月07日　イザローンより「新学期を迎えて」

相変わらずの水不足と聞いておりますが、お元気ですか? ドイツも水に関してはかなりうるさいので、いつも節水に心がけています。

さて、8月末より新学年が始まりました。1年生も入学し、彼らも少しずつ慣れてきたところです。アルファベットや数字の練習をしています。ドイツではアルファベットの「I」をまず初めに習うので、新1年生のことを「I Maenchen(イーメンヒェン)」と呼ぶのだそうです。初めて知りました。様々な方法で「I」の文字を練習します。粘土やはんこ、新聞の切り抜き。一番興味深かったのは砂を使っての練習です(写真参照)。指でそのアルファベットを書いていきます。砂なので何度でも消して使えるし、子供達の書き順があっているかどうか等がよくわかります。1クラス23人にもかかわらず、最初の数週間はこれを2グループに分けて、1グループ2時間の授業をしております。朝8時から9時30分までが第一グループ、10時から11時30分までが第2グループ、といったように、少人数体制で面倒を見ています。

残念ながら私の名前が子供達にとってはとても難しく、なかなか覚えてくれません。。。「ながさき」とか「ながさび」とか、、、正確ではありませんが、声をかけてくれることが最大の喜びかもしれません。

それではまたお便り致します。お体に気をつけて。

〈写真：アルファベットを勉強する小学１年生〉

③2005 年 10 月 17 日　イザローンより「野外活動、幼稚園そしてボンへ」

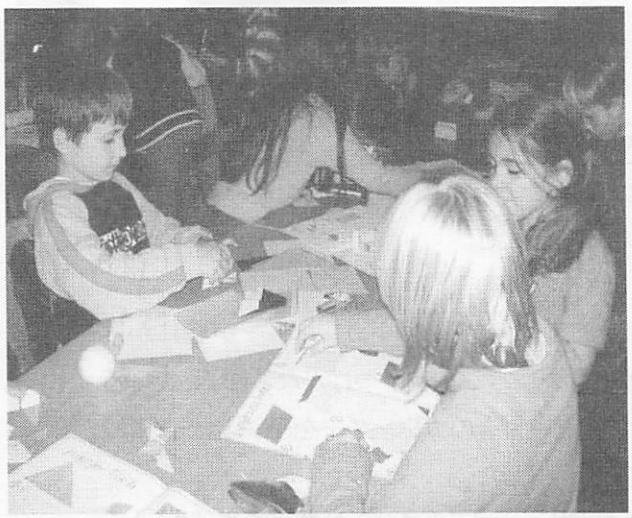
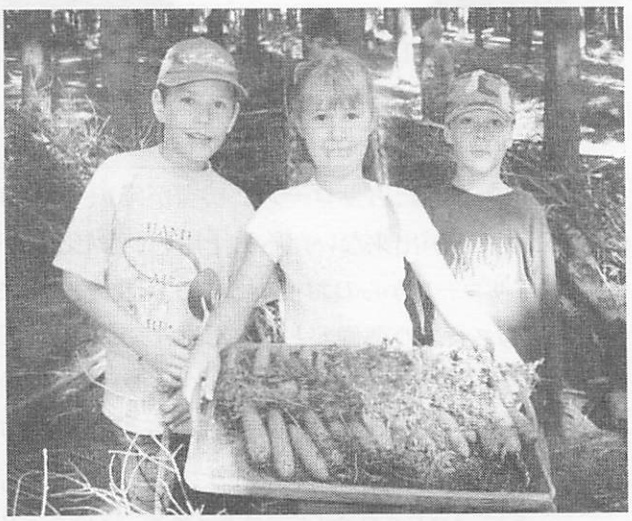
しばらくご無沙汰しておりました。お元気ですか？ 秋休みに入っておりました。

秋休み前は、1 週間小学校 3 年生の野外活動に参加、もう 1 週間は市内の幼稚園で活動しました。野外活動は、香川県で言うなら、屋島、五色台の宿泊学習のようなもの。ただ、こちらには海が無いので、森の中で自然に十分溶け込む活動でした。「こんなにいい環境は普段味わえないので、子供達はここで十分遊ぶべき。」といわんばかりに、朝から晩まで飽きることなく遊び続けました。

幼稚園では園長先生が「日本週間」と名づけてくれ、手遊びの歌を歌ったり、紙工作、ひらがなを書いたり、日本茶を飲んでみたり、毎日テーマを一つ決めて活動しました。小学生より小さい子供達とドイツ語で話をするのは簡単ではありませんでしたが、笑顔で迎えてくれたことに感謝しております。

秋休み中には、ボンを訪問し、メンヒさんや、マイセさんご夫妻とも再会しました。ボンにある日本庭園を案内してくれました。

写真をいくつか添えておきます。それでは、寒くなって参りますが、お体に御気をつけて。

〈写真：小学校の野外活動にて、折り紙やままごとを楽しむ小学３年生〉

④2005年11月14日　イザローンより「木の葉もだんだんと、」

その後、お変わりはございませんか?

木々の葉もだんだんと枯れ落ち、冬へと向かいつつあります。夏時間から冬時間に変わり、車を運転する人たちは、冬用のタイヤに付け替え、などなど。

8月の終わりに入学した1年生も学校生活に慣れてきたようで、その1年生のクラスで折り紙を使っての図工の授業をしました。白い紙で犬と猫を折り、絵の具等で色付けをします。描く、ぬる等の作業は慣れていますが、折るという作業は普段あまり見られないような気がします。

話は変わり、先日、市内のロータリークラブの方々の仲間に入れてもらい、クリスマス市で販売する「Weihnachtswichte」(Weihnacht=クリスマス、Wichte=小人)を作りました。木を30センチ程の高さに切り(切り口は斜めに)、その切り口にサンタクロースの顔を描きます。400個作ることになっており、どんどん作業を進めていきました。毎年恒例の行事だそうで、慣れた手つきでサンタクロースが描かれていきました。私は、わいわいと楽しみながら、色付けのお手伝いをさせてもらいました。

11月11日、今日は「Martinstag」で、学校ではそれにちなんでガチョウの人形を作ったり、キリスト教の授業で先生がそのお話を読んだり、歌を歌ったりしました。その歌がまだ頭の中で流れています。

それではまたご報告致します。お元気で。

〈写真：図工の時間　折り紙を使って〉

〈写真：クリスマスの小人作り〉

⑤2005年12月07日　イザローンより「クリスマスの装い」

11月24日、イザローンに初雪が降り、次の日には約50センチ程積もりました。香川ではきっと味わうことが出来ないだろう、と思い、雪だるまを幾つか作りました。

イザローンからのお便りも、これが最後となります。(おそらく)

クリスマスの準備がどんどん進んでおります。12月1日からはアドベントカレンダーが壁にかけられ、毎日一つずつドアを開いております。学校の教室もクリスマスの飾りつけがなされ、見ているだけで楽しくなります。私は、折り紙を使ってクリスマスの飾り付きのカレンダーを子供達と一緒に作りました。少し難しかったようで、担任の先生も苦労していました。

また、12月6日の「ニコラウスの日」には、幼稚園を訪問し、ニコラウスからお菓子をたくさんもらいました。幼稚園の子供達は前の週の金曜日に自分の靴下(本物)をあらかじめ廊下に並べてお

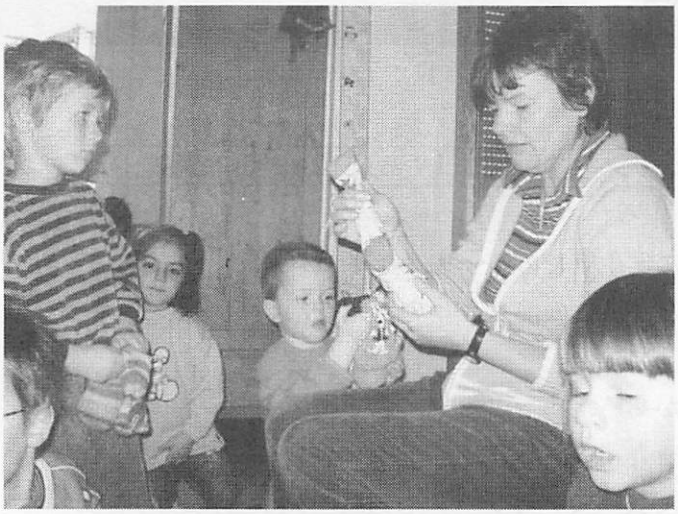
り、ニコラウスがお菓子や果物を一杯につめて、この日、幼稚園にやってきました。大人の私も十分楽しむことができました。

では、今年も残りわずか、楽しいクリスマスを、そして、良いお年をお迎え下さい。

また、ご報告いたします。

〈写真：12月のカレンダー作り〉

〈写真：ニコラウス登場!!〉



〈　写真：靴下の中に入っている物は？〉

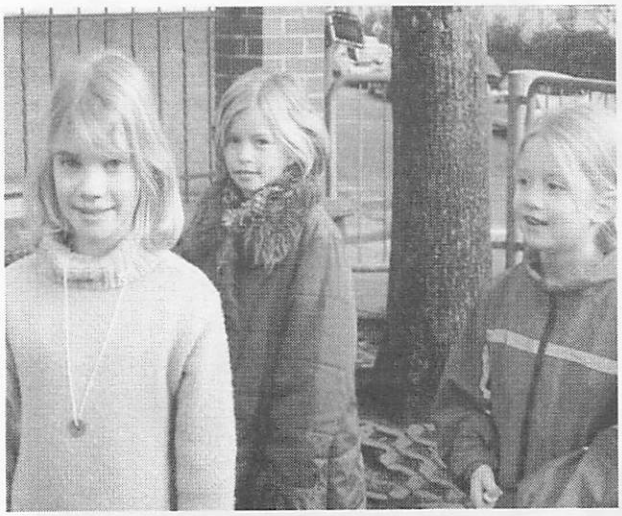
①2006年02月26日　事後報告：イザローンを振り返る「子供達とのお別れ」

2005年12月22日が小学校での最後の研修日でした。それまでにも、「私はもう日本に帰るよ。」と予告しておりましたが、子供達の感覚では、ただのUrlaub（休暇）で、また戻ってくると思っている子が多く、この日、全てのクラスを一つずつまわって、「1月からはもう会えません。」と伝えなければなりませんでした。その時は、心痛く、子供達の顔をまともに見ることが出来ませんでした。子供達一人ひとりに、私からのプレゼントとして、五円玉をペンダントにして配りました。「ご縁がありますように。」と説明するのは難しいので「幸運をもたらす硬貨」だ、と説明しました。硬貨に穴が開いていると言うこと、日本で実際に使えるということ、発行年が載っているということ等に興味を持っていました。

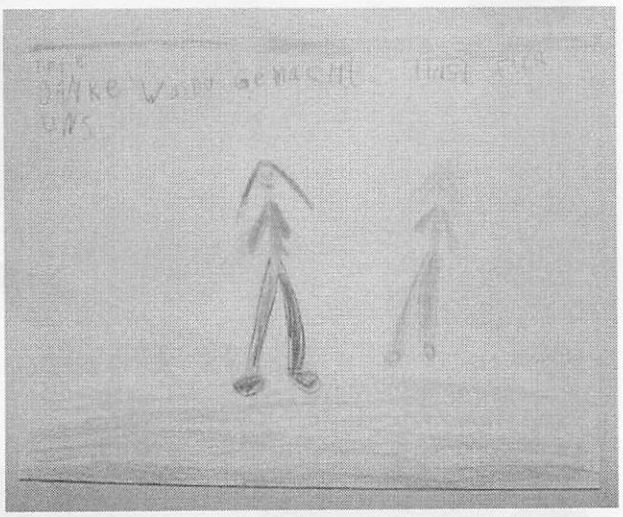
子供達からは、彼らが書いた絵をもらいました。ほとんどの絵に、黒髪でズボンをはい

た私の姿。確かに私は毎日ジーンズなどのズボンをはいており（先生方はジーンズをはいていて当たり前です)、よく見てるなと感心しました。アルファベットをまだ全部習いきっていない１年生も、ドイツ語がほとんど理解できないトルコ人の女の子も、メッセージを添えて。。大切な大切なプレゼントです。

この小学校には、ドイツ人だけでなく、両親の出身国が様々ですが、みんな同じ教室、校庭で生活しています。このような子供達が作る将来の世界、平和であることを願って。



〈写真：五円玉のペンダントを首に〉



〈写真：子供達からのプレゼント〉

②2005年03月12日　事後報告：イザローンを振り返る「やっぱりお寿司は人気」

私が生まれて初めて自分で巻き寿司を作ったのは、ヴィースバーデン(1999 年～2000 年）で留学していた時でした。去年の夏に学生寮でのルームメイト（ロシア人）に再会、彼女は自分の結婚式にお寿司を振舞ったとか、この前２キロのお米を炊いてお寿司を作ったなどと、笑い話もしました。

ここ、イザローンでもきっと作ることがあるだろうと思い、色々準備していきました。

最近では、町の普通のスーパーで「冷凍寿司」が売られ、また、テレビのドラマの中でも「今日はお寿司よ。」とか言って、お箸で食べているシーンも何度か見ました。イザローンの市民大学では、お寿司教室が、フランクフルト国際空港にもお寿司が食べられるレストランができていたり、驚くばかりでした。

今回は、ホストマザーを始め、小学生のお母さん、近所の方、アジア料理のレストランの厨房の方々とお寿司を作る機会がありました。しかし、生魚が食べられないとか、ベジタリアンである人が多いので、その人に合わせたお寿司を作らなければなりませんでした。

「お寿司は、美味しいけれど、ドイツでは高くてね。。」とよく言われましたが、お寿司は日本でも特別な料理で、各家庭に伝統の味があり、マスターするのが難しい、そして高価なものである（と言う私の見解）と、何度説明したことでしょう。

はっきり言って、私が作ったり、教えてあげるお寿司には残念ながら全く自身がありません。が、お寿司作りは、相手との関係をより深めることができる、交流の「場」として、私はとらえています。お寿司の腕も上がると良いのですが。

〈写真：箸を持ったまま手で食べる!?〉

〈写真：巻き寿司に挑戦・真剣勝負〉

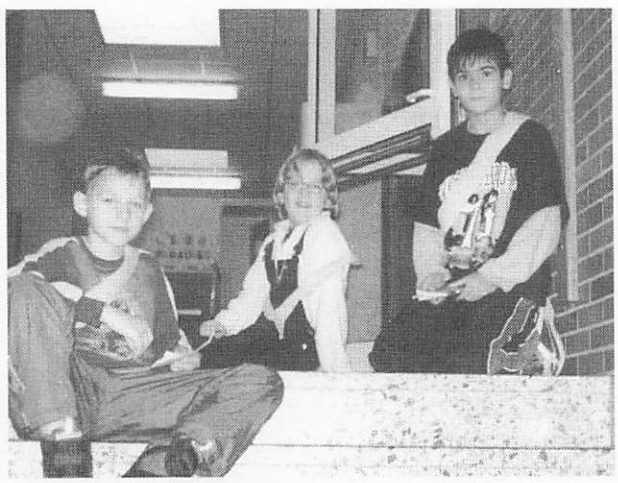
③2006年03月21日　事後報告：イザローンを振り返る「休み時間は必ず外へ」

私が9ヶ月間お世話になった小学校は、Grundschule　Bleichstrasse（ブライッヒシュトラーセ小学校）といいます。1年生から4年生で、合計11クラス、約250名の生徒が通っています。始業は朝8時、1コマ45分の授業で、6時間目まであります。朝、登校してきた子供達はまだ校内には入れません。始業時間の予備ベルが鳴ると、担任の先生が校庭に迎えに来ます。なぜならば、校内は、教室、職員室、トイレ等の出入り口は普段、鍵がかけられており、子供達は自由に出入りが出来ないようになっているからです。

1,2時間目の授業のあとは、10分間の「朝食時間」があります。朝食を家で取ってくる子ももちろんいますが、最終授業がお昼を過ぎる為、小腹をおこす為のものでもあります。スライスしたパンにバターをたっぷり塗って、ハムや野菜をはさんだものや、うさぎのように、生の人参や、ピーマンをかじっている子もいます。朝食時間と、3,4時間目の後は、20分間の休み時間があります。この時、子供達はみんな校庭へ出され、全ての教室の鍵が閉められます。休み時間にお絵かきなどは、雨の日しか出来ないわけです。また、教室に忘れ物をすると、手間がかかります。子供達の監視当番以外の先生達は、「私達もPause（休憩）が必要よ。」と言って、職員室でコーヒータイムをとります。6時間目が終わるのは、13時15分。通常、子供達は下校し、自宅で昼食をとります。

しばらくすると、校内清掃をする大人たちが現れ、隅々まで磨かれます。各クラスに整理整頓係はいますが、掃除の時間はありません。

しばらくは、驚きばかりの学校生活でした。



〈写真：4年生が交代で、休み時間みんな外に出たかどうか校内チェック!!〉

〈写真：朝食の時間〉

〈写真：職員室でもコーヒータイム〉

④2006年4月3日　事後報告：イザローンを振り返る「君はやっとドイツ語を話したね」

月曜日。小学校の1年B組の教室。朝のあいさつが終わると、週末に何をしたか一人ずつ発表していきます。今までずっとドイツ語が話せず、先生の質問にうなずくだけしていた子が、「Ich habe mit meiner Schwester gespielt.妹と遊んだよ。」と言いました。その時、向かい側の席の子が「Du hast endlich Deutsch gesprochen!! 君はやっとドイツ語を話したね。」と喜んだ光景が今でもしっかり頭の中に焼きついています。

それぞれのクラスには、母国がドイツでない子供たちが実にたくさんいます。そのため、子供たちのドイツ語のレベルも様々で、職員室ではこのことに関する話題が中心でもあります。入学前には、母国語のレベルを調べることによって、ドイツ語の上達度を予測するシステムを導入したり、授業中には先生自身が外国語を使って説明したり、取り出し授業によって個人指導をするなど、母国語がドイツ語でない子供達を踏まえての授業対策が色々な形でとられています。

家の家族とは母国語、学校ではドイツ語、といった何とも器用に言葉を使いこなす子供達ですが、子供なりに苦労もしているのだろうか、、、校庭で元気に遊んでいる彼らを見て疑問に思うことがしばしばありました。

日本語を話せるのが当たり前の日本人の中で学校生活を送ってきた私にとっては驚くほかない光景でした。また、言葉だけではなく、宗教も様々で、給食のときのソーセージも宗教によって違ったものが用意されていました。

小学校という小さな集団ですが、この中で様々な母国語、文化、生活習慣をもつ子供達が共に勉強し、遊び、助け合って生活しています。ここでは「競争」ではなく「共存」ということが大切なのだと思いました

⑤2006年04月19日　事後報告：イザローンを振り返る「老人会に紛れ込む」

私は、イザローンで過ごした９ヶ月間、ある老人会の集まりにほぼ毎回参加させてもらいました。２週間に１度のペースで、地域の教区内（同じ教会へ通う人達）で開かれています。きっかけは、私のガストムッター（ホストマザー）がその老人会の世話係として活躍しており、私を連れて行ってくれたのが始まりで、いつの間にか私もその一員のように紛れ込んでいました。初めて訪れた時は、９０歳のおばあちゃんのお誕生日を祝う、との事、早速、鶴を何十匹か折り、プレゼントしました。

集会が近づくと、ガストムッター達と一緒に、ケーキを焼いたり、テーブルに飾る花を摘んできて生けたり、クリスマスの時には、クリスマスの飾りを半日かけて作りました。お年を召されていても、みんなケーキを２切れは簡単に食べてしまうので、人数分ｘ２個と計算して、ケーキがいくついるか考えます。

ゲーム、本の読み聞かせ、夏祭り、遠足、体操など、プログラムは様々です。その中で「日本」についても紹介させてもらいました。ちょうど９月だったこと、また、色々な歌を聞かせた結果、ガストムッターが一番気に入った「もみじ」の歌を１０日間くらい毎晩練習（特訓）してみんなの前で披露しました。（ちなみに別の老人ホームでは二人で「富士の山」を歌いました。）

この老人会では、参加している方々が生きてきた時代のこと、イザローンのこと、ドイツのことなど、色々なことを教えてもらいました。ありがとうの感謝の気持ちと、長生きしてねという願いをこめて。

〈写真：老人会の様子、テーブルの上も毎回季節に合わせて様々に飾られます〉

⑥2006年06月01日　事後報告：イザローンを振り返る「スポーツを楽しむ」

イザローン滞在中は、幾つかのスポーツ活動に参加しました。ドイツは「地域スポーツ」が主流で、学校での部活動等はなく、子供からお年寄りまで地域のスポーツクラブに所属し、スポーツを楽しむようです。私がドイツと出会ったのは、ドイツの「地域スポーツ」について視察する為の「日独スポーツ少年団同時交流」に参加したのが始まりでした。

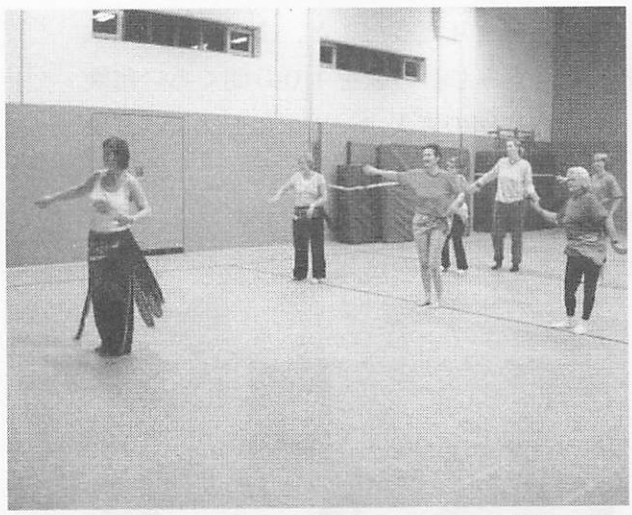
今回は、「女性のための運動教室」、「ハプキ道」、「剣道」に毎週通いました。

「女性のための運動教室」は知り合いの人に誘われて参加するようになりました。金曜日の夜８時から１０時まで、２時間ほど、ストレッチ、筋力トレーニングを通しての体力

づくりで、一週間の締めくくりに一汗かいて爽やかな気分になりました。ギムナジウムの生徒をはじめ、主婦、おばあさんまで、合わせて約 15 名で毎回にぎやかにトレーニングをしました。

時々、気晴らしにチャレンジした「腰振りダンス(ベリーダンス)」は専門の先生の手ほどきを受け、アラビアの音楽に合わせて踊りました。また、ギムナジウムの女の子達が「バトントワリング」を教えてくれ、目が舞うほどバトンを回しました。私が紹介した「剣道」では、普段のストレス解消にいいねーと言って、大きな声で「メン」と叫んでくれました。また、メンバーの中で幼稚園の保母さんが教えてくれた「マッサージ」は、大好評でトレーニングの後に心と体を癒してくれました。このマッサージ法は実際に幼稚園でも取り入れているそうです。

女性のための盛りだくさんの運動教室でした。次回は、「ハプキ道」、「剣道」です。



〈写真：ダンスの練習、先生はいつも元気いっぱい!!〉

⑦2006 年 06 月 14 日　事後報告：イザローンを振り返る「剣は友を呼ぶ」

ある日、私に 1 本の電話がかかってきました。ギムナジウムに通う男の子からで、剣道を一緒にしましょう、という内容でした。私達はインターネットや知り合いを通じて剣道クラブを探し出し、イザローンの隣町のメンデンという町へ通うことにしました。大学時代に留学していたヴィースバーデンでも、このような調子で話が進み、週 3 回練習に通っていました。

「地域のスポーツクラブ」としての「剣道クラブ」であるため、小学生からおじいさんまで、様々な顔ぶれです。チャンバラごっこに影響された子供達、サムライ映画に興味を持ち長年続けている年配の方々、また、世界大会へ向けて苦しい練習をする若者達。。。

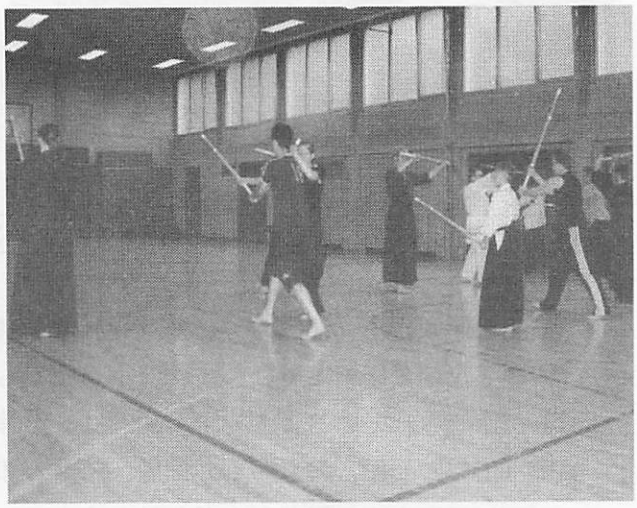
さて、ヴィースバーデンの時と同様、私がしなければならなかったことは、「剣道」について机に向かって勉強することでした。トレーニングとしての剣道は小さい頃からやってきましたが、きちんとした歴史や概念に関する剣道にはほとんど触れることがなく、ドイツの剣道家達からの様々な質問に答えられず、しばしば恥ずかしい思いをしました。

小さい時には心と体を鍛えるための厳しい剣道でしたが、ドイツでのトレーニングを通して、「剣道」の本質を勉強しながら楽しむものへと変わってきました。小さい時に学んだ技は体で覚えており、体が自動的に動きますが、それに加えて、その技の機能を詳しく分

析することを、今回、メンデンでの練習でドイツ人の先生に教えてもらい、「なるほど」と今になって感心させられました。本来ならば日本人の私が教えなければならないのでしょうが。。。

最後に、日本から送ってもらった2本の竹刀をどうしようか考えた結果、1本はホストマザーに「身を守る」ためのお守りとして、もう1本は小さい頃剣道を習いたかったのに、危険だからという理由で習わせてもらえなかったという知り合いの人にプレゼントしました。（ちなみに、その人は今年、剣道を始めたそうです。）

〈写真：メンデンでの練習風景〉



〈写真：ヴィースバーデンにも訪問〉

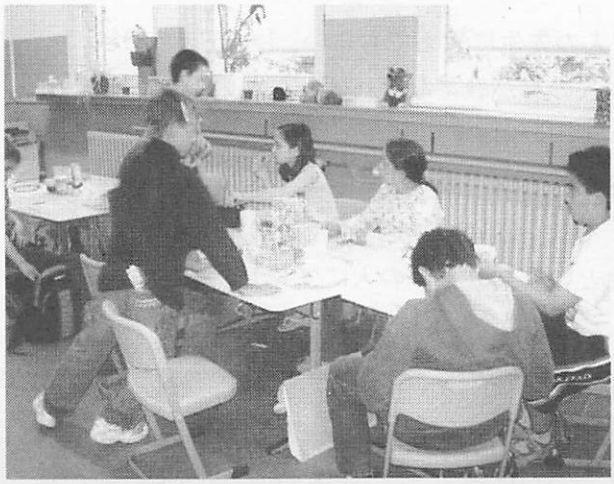
⑧2006年07月09日　事後報告：イザローンを振り返る「夏休み」

「夏休み」に入る前に、小学校の4年生は「卒業」という節目を迎えます。6年制の小学校もあるようですが、私が通った小学校は4年制でした。

4年生の子供達は、真っ白の無地のTシャツを持って校内を駆け回っていました。Tシャツに皆のサインをもらっていくのです。教室では、いつもの朝食の時間を延長し、皆で過ごす最後の日を大切にしていました。彼らとは、3ヶ月少々共に過ごしただけでしたが、街や教会で会った時は、「最近、ドイツ語はどう？」とか、「授業の時、騒いで先生を困らせてごめんね。」と、声をかけてくれました。

さて、子供達は、夏休みをどのように過ごすのだろうか、本当に宿題はないの?? 宿題は本当にないそうでびっくりしましたが、「夏休み明けには、習ったことをよみがえらせる復習の時間がかなり必要なのよね。」と言っている先生もいました。

母国がドイツでない子供達は、車で何時間もかけて家族で里帰りをしたり、数週間サマースクールのような集団活動に参加したり、夏休みの前半と後半の2回旅行に出かけたりするようです。プールや湖などへ泳ぎに行くと、プールサイドの芝生や砂浜で読書をしたり、音楽を聴いたり、りんごをかじったり、のんびりした時間が流れていきます。「休暇」というのは、彼らにとって、本当に体に負担をかけず、ゆっくり休む、という意味合いが強いのだと思いました。仕事をする時にはする、休む時には休む、という切り替えの上手さは、パーティーではとことん盛り上がる、しかし、勉強の時には真剣に勉強するドイツの大学の学生達を思い出させます。



〈写真：最後の朝食を楽しむ４年生〉

〈写真：今日で仲間とお別れ、記念撮影〉

⑨2006年07月29日　事後報告：イザローンを振り返る「幼稚園児はなかなか手ごわい」

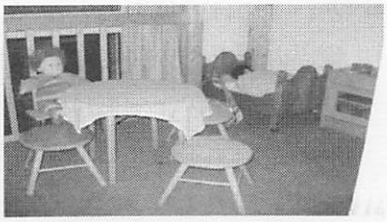
昨年９月と12月に、市内のヒンデンブルク幼稚園にお邪魔させてもらいました。

朝８時頃から、お家の方に連れられて子供達は幼稚園にやって来ます。そして、順番に持参した朝食をとっていきます。小学校でもそうでしたが、朝食をきちんと摂るということが徹底されているようです。園内は、年齢ごとに分かれた教室はなく、目的に応じた部屋（工作の部屋、おもちゃの部屋、読書の部屋、運動する部屋、落ち着く為の部屋、○○ごっこが出来る部屋など）があります。

少し落ち着くと、朝の会が始まり、全員が円になって、歌を歌ったり、あるテーマについて学んだり、最後に先生（保育士）方が順番に「私は今日、○○の部屋で○○をします。」と言うので、それを聞いて子供達は自分が行きたい所へ散らばっていきます。時には、年齢に応じて、裁縫をしたり、市場へ買い物に出かけたりなど、特別活動も行われます。

「あい（私の名前）、おはよう。」から始まり、「積み木で遊ぼう。」「子供の役をやって。」「このゲームを一緒にしよう。」と忙しくなるのですが、一番困ったのが、やってみて初めて気付きましたが、「この本読んで!」というお願いでした。本は全部ドイツ語です。私の下手なドイツ語で申し訳ないと思いながら、しかも「これは何？」と聞かれると、分かりやすくドイツ語で説明してあげなければなりません。子供達は、理解できなければ、はっきりとそれなりの反応します。小さい子供は本を誰かに読んでもらうのがとても好きで、ホストマザーのお孫さんも同様でしたが、まるで試験を受けているようで大変苦労しました。「ドイツ語を勉強する時は音読をするべし。」と、手ごわい幼稚園児から教えられたのでした。言葉だけでなく、小さな体の全てを使って感情をぶつけてくる子供達に対して、慎重に言葉や態度を選びながら接していく先生方の姿にも色々と考えさせられました。

もう一つの「手ごわかった」ことは、街で私を見かけたら、所構わず大声で「あーいー」と呼ばれたこと、いや、呼んでくれたこと。



〈写真：朝の会にて〉

〈写真：図工室でお絵かき〉

⑩2005年09月10日　事後報告：イザローンを振り返る「幼稚園での日本週間」

前回に引き続き幼稚園での活動の報告です。私の訪問中は「日本週間」となり、先生方と相談し、幼稚園児が受け入れられる範囲内で、「あいさつ」、「歌」、「文字」、「日本茶と作法」そして「浴衣」などを紹介させてもらいました。

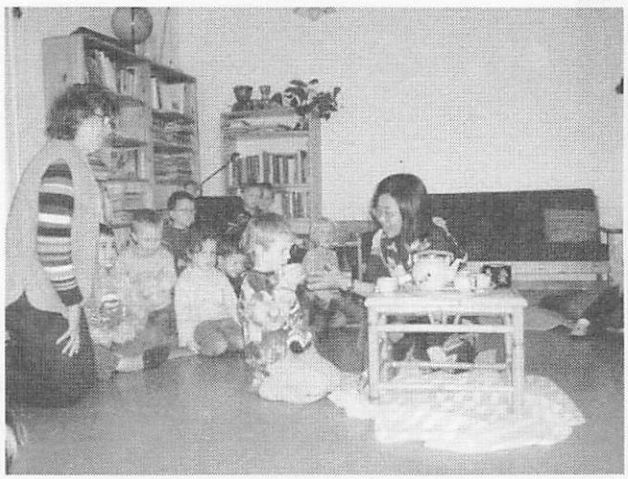
「あいさつ」は、いつも朝の会で、ドイツ語、英語、フランス語、トルコ語など、子供達の母国の言葉を使って歌を歌いながらあいさつをします。という訳で、私は「おはよう」を教えてあげました。

「歌」は、体を動かすことができ、かつ、簡単なもので、「結んで開いて」を、そして日本の童謡のCDも流しました。先生方も気に入ってくださり、CDをプレゼントしました。

「文字」は、ドイツ語のアルファベットでさえ把握していない子供達が混乱しないよう、「ひらがな」のみを紹介、実際に書いたりもしました。何かを見て、それと同じものを書き写すという作業は、発達の段階を観察していくうえで大切なのだと言われました。

「日本茶と作法」は、実際に日本茶を味わってもらい、また、日本の家では靴を脱いで床の上に座る等の生活習慣を紹介しました。トルコもそうである、と、トルコから来た子供達が教えてくれました。

「浴衣」は、伝統的な衣装の一つですが、子供達は、私の姿を見て、とても驚き、笑いました。特に下駄にはびっくりしていました。



この幼稚園の子供達は母国が様々であるから、異文化に触れ、それが異文化である、と意識することがそれほど難しくはなかったかもしれません。が、彼らが大きくなって日本について触れたとき、そういえば、あの時、、、、と幼稚園でやったことを思い出してくれたらいいなあと思います。

〈写真：浴衣はおかしい?　日本茶の味は?〉

⑪2006年10月19日　事後報告：イザローンを振り返る「跳び箱の練習で学んだこと」

子供達が私に向かって突進!!　私はそれを真正面からしっかり受け止める!!　10、11月、小学校の体育の授業で、子供達と跳び箱の練習に励みました。先生は、まず、跳び箱が得意な子と苦手な子に分けました。得意な子供達は、よりレベルの高い技を、苦手な子供達は、確実に跳べるように練習していきました。

私は、毎回、苦手な子供達の担当をさせてもらいました。具体的には、跳び箱のすぐ後ろに立って、彼らが跳んだときに、両腕をつかんで、前に引き寄せる、という補助と、その後アドバイスを与える役割です。

さて、いざ、練習に入ると、跳び箱に向かって走ってくる子供達の顔は、みんな真剣。そして、彼らを待ち構えている私は、それ以上に真剣。スピードが足りず跳び越えられない子、バランスを崩してしまう子、私と同じくらいの体格の子、助けは要らないと主張する子、どの子をも、しっかりと確実に受け止めなければなりません。もし、失敗すると、彼らは、恐怖感を覚え、もう、こちらに向かって走ってきてくれないでしょう。だからこそ、待ち構えているとき、「お願い!」と言わんばかりの子供達の気迫と、緊張感に私は押しつぶされそうでした。

役目は、まだ続きます。受け止めた子が、自分ひとりで跳んだ時のイメージがわく様に、前方へ導いてあげること、そして、それぞれに必要なアドバイスを実際に示しながら与えること、その点が少しでも達成できれば、しっかり褒め、一緒になって喜ぶこと。できていなくても、君ならできる、と自信を持たせること。実際に、喜んでいる顔をみると、こちらも自然に嬉しくなりました。

汗だくになりながら、何度も何度も練習してきた結果、なんとあるクラスは、全員跳び箱が出来るようになりました。「スポーツ万能のクラスだね。」と先生が子供達を褒めてあげました。

たかが跳び箱。しかし、思っていた以上に気力と体力を消耗し、また、子供達とのつながりを強めてくれた、有意義な授業でした。そして、この跳び箱的受け止め方は、日常の学校生活においても重要なのではないかと思いました。子供達のメッセージを真正面から受け止め、それに対して、自分の力で次に進めるような手助けをしてあげる、その成果を一緒に分かち合う。。。

〈写真：体育の授業の様子。四列や背の順に整列することは一度もなく、決まった座り方もありませんでした。集合時は、ただ円になるだけでした。〉

⑫2007年01月15日　事後報告：イザローンを振り返る「色々なクリスマスカード」

クリスマスから年末年始にかけて、ドイツからクリスマスカードが届きました。イザローンを去って約1年経ちましたが、幼稚園や小学校の子供達、先生、そして、親御さんからの近況報告を受け取り、懐かしく思いました。また、ヴィースバーデン時代、スポーツ少年団時代の方々からの便りには、もっと深い懐かしさを感じました。

さて、幼稚園の子供達からは、まだ学習していないアルファベットを使って、一生懸命に文章を書いてくれました。すべて「S」の字が逆さまになっており、自分が小さい時に書いていたひらがなを思い出させます。雪が降らなかったから、雪だるまを作ることができなかったそうです。

小学校の子供達からは、彼らの成長振りが分かる写真が添えられていたり、学校でのことを書きつづってきてくれたのですが、「質問があります、日本ではクリスマスのお祝いをするのですか？」と投げかけてきた子供がいました。私は正直、どのように答えるべきか悩みました。イザローンの小学校でいる間、キリスト教の授業を見学させてもらい、「クリスマス」について今まで知らなかった多くのことを子供達と一緒に学びました。また、教会の仕事に携わっていたホストマザーからもたくさん学びました。そんな訳もあり、慎重に返事を書きました。

先生からは、クリスマスの時期に恒例の「Backen（クッキー作り）」、「Basteln（飾り作り）」、「Theaterstueck（演劇）」など、一連行事をなんとか終え、冬休みに入り、やっとくつろげる時間ができたとか。私もお手伝いをしてあげたかったな、と思いました。

親御さん達からは、小学校の最終学年である4年生になる娘が直面している事、次に進む学校の選択についての思いが書かれてありました。この選択は成績にも左右され、多少なりとも将来の進路にかかわっているため、本人も混乱しているようです。

心のこもったカードをありがとう、そして、すばらしい1年になりますように。。

最後に　～振り返ること、書き記すことの大切さ～

これまでのドイツ滞在において、現地で日記をつけることは習慣づけておりました。今回は、さらにそれを振り返りながら事後報告を書き記すことによって、ドイツで経験した一つ一つの場面を再度思い起こし、それらが自分にとってどのような意味を持ち、自分にどのような影響を与えたのか、そしてこれから自分はどう在りたいのかをじっくりと考えることができたと思います。このような機会を与えてくださったことに感謝いたします。

思いがけない友人達との再会

川田　敦子

はじめに…

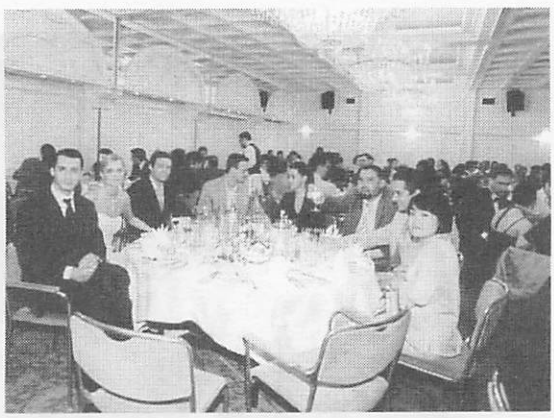
会報に原稿を寄せさせて頂くのは実に5年ぶり（創立10周年記念号以来）、3回目ですっかりご無沙汰してしまいました。この5年間で数々の再会を果たす事が出来ました！その中のいくつかをご紹介と思います。

留学時代のルームメイト、ダニエラから届いた招待状

2003年のある日、ヴィースバーデン留学時代に家族のように生活を共にしたダニエラから結婚式の招待状が届きました。姉のように慕っていた彼女の結婚式にどうしても参加したくて、当時私は社会に出てまだ2年目でしたが職場の先輩の後押しで結婚式の為だけにルフトハンザ航空で 5/8～5/11 という、超強行スケジュールで休暇を頂き、初の海外ウエディング参列に向けて旅立ったのです。

彼女のご主人とは留学中に何度か会った事がありました（私が寮に住んでいた当時、何度も彼女を訪ねては猛アタックしていたからです）。突然のドイツ行きに、私は日本の自宅から彼らの新居に電話を入れるも、あいにく留守でメッセージを残し、ちゃんと空港に迎えに来てくれるのかと心配しながらの旅立ちでした。空港につくと、ご主人のサシャが迎えてくれました。ほっとして再会を喜び合いました。ダニエラは大学の野外学習で他州の町に出かけており、サシャと二人彼女を迎えに…結婚式には参加出来ないと伝えていたので訪独はサプライズでした。私に再会した時の彼女の驚きようと喜びようといったら、それはそれはすごいものでした。

当日は天気にも恵まれ、自宅で友人に手伝ってもらいウェディングドレスを着た彼女はとても素敵でした。ベンツでフランクフルトのローマー広場にあるニコライ教会で挙式を行い、その後ル・メリディアンホテルで披露宴が行われました。披露宴はブッフェ式で宴は何と翌朝の3時まで続きました。新郎新婦はマケドニア人ですがドイツ育ちで、式はマケドニア式でした。印象深かったのは参加者皆で輪になって生バンドの演奏で踊った事でした。一生忘れられない結婚式となりました。



（写真；2003年5月10日　結婚披露宴）

ダニエラ来日

2004年9月ダニエラ夫妻が休暇で日本を訪れる事になり、香川の我が家にもはるばる足を伸ばしてくれました。折しも香川は前代未聞の高潮被害を受けていましたが、建築を学んでいる彼女には興味深いだろう、直島に案内しました。安藤忠雄氏設計の地中美術館やベネッセ、フェリーからの瀬戸内海の眺めを心ゆくまで楽しんでいました。また、私と香川大学から機を同じくして留学した金光さんの実家岡山にもお邪魔してバーベキューを楽しみました。

（写真；2004年9月11日　我が家にて　私、祖父、ダニエラ、サシャ）

留学時代の寮の隣人、ズサンネとの再会

2005年5月、寮の隣人でダニエラ同様仲良くしてもらったズサンネが香川に来る事になりました。彼女は大変親日家で日本訪問経験もありました。金光さんのルームメイトが彼女で私達が帰国後は同志社大学へ数ヶ月留学経験もありました。彼女から日本でドイツの文化を紹介するパネル展を開きたいのだと相談を持ち掛けられ、中村会長に相談したところ快く引きうけて下さいました。ヨンデンプラザ・サンポートでのパネル展とドイツ料理教室は大盛況でした。

一行は総勢4名の女性で2名ずつ屋島の渡部さん宅と木太町の國方さん宅にホームステイをさせて頂きました。國方さん宅には私も一緒にお世話になり、とても楽しい夜を過ごすことが出来ました。ハーゼンベックさんはデコラティブ・マーレライの教室を経営されていて、今回の来日も実演や体験教室を開いていらっしゃいました。

（写真；2005年5月25日　ヨンデンプラザ・サンポートにて）

寮の友人、ロベルトの日本留学

私と一緒に留学した金光さんは韓国人と日本人のハーフということがきっかけで寮母さんがロベルトを紹介してくれました。彼は生粋のベルリンッ子ですが韓国を旅行した経験があったのです。彼の第一印象は変った人！でしたが彼とはかれこれ5年の付き合いになります。留学時代同じ寮に住んでいました。留学からの帰国前には、母と叔母がドイツに来て1週間ほど旅行したのですがその際彼にベルリンを案内してもらいました。母はベルリンの印象が一番残っているようです。卒業旅行をした時彼はフランスに居て、私も訪ねて行きました。そのロベルトが、私達日本人留学生の影響？かDAADの奨学生として日本に留学し語学研修の後現在長野県のシチズンでインターンシップ中です。彼も2005年12月のクリスマスに香川を訪ねて来てくれました。人と人との不思議なつながりを感じます。

ダニエラを訪ねてN.Yへ

ご主人サシャの仕事の関係でN.Y.に在住の彼らを訪ね2006年3月N.Y.の彼らを1週間訪ねました。昼間は二人共仕事なので1人で自由の女神を見に行ったり、メトロポリタン美術館やグラウンド・ゼロ、エンパイヤーステートビルなどを観光しました。一番印象的だったのは何と言ってもブロードウェイのミュージカル、“レント”を3人で鑑賞した事。セントラルパークの散歩も忘れられません。

（写真；2006年3月　セントラルパークにて　ダニエラと　）

ロベルトを訪ねて長野へ

2006年のGWに、ロベルトを長野に訪ねました。千光寺や浅間山へレンタカーを借りて巡りました。草津温泉にも足を運びました。

（写真；松代にて　ロベルト、カトリンと）

思いがけないハンナとの８年ぶりの再会

2007 年 8 月、信じられないことが起こったのです！ハンナは、ボン・ラインジーク大学からインターンシップ交流で来日し、4 月～8 月までヒューテックで企業研修をしていた清水秋男君（ドイツ人と日本人のハーフ）の彼女なのです。が、何と私が初めてドイツを訪れた1999年2月～3月にボンでホームステイさせてもらったベルント一家の長女カヤの同級生でベルント家とは家族ぐるみでお付き合いをしているグリム家の長女ハンナだったのです！！！秋男君が帰国前に丸亀城に是非行きたいとの事で丁度香川に来ていたハンナも同行していました。ハンナとたまたまホームステイの話しになり、「えーっっ、ハンナ？あのハンナ？？」と思わず叫んでしまいました。ハンナとはベルント家で３度ほど食事を共にしていたので私の記憶辿り、帰って早速アルバムを開きました。彼女に間違ありませんでした。何と言う運命の巡り合わせでしょうか。数日香川に滞在するとの事で彼女にベルントさん宛の手紙とお土産の好物梅干を彼女に託しました。本当に信じられない再会でした！

（写真左；1999 年 3 月 6 日　ベルント家にて左端が私、右からホストファーザー・ディートリッヒ、ハンナ）

（写真右；2007 年 8 月 31 日　居酒屋にて左から伊勢さん、ハンナ、私、秋男君）

終わりに…

今回はいくつかの再会について綴ってみましたが、いろんな人達との出会いがあって今の自分があるのだとつくづく感じます。ドイツの地を初めて踏んでから８年という歳月が流れましたが香川日独協会の皆さんやボン独日協会の皆さんのお力添えがあってこそ、私は本当に素晴らし出会いや再会を果たす事が出来たと思っています。この場をお借りして感謝の言葉を述べさせて頂きます。有難うございます。

そしてこれからも、ドイツと関わり続ける人生を歩んでいきたいと思います。何時の日か自分の家を持てたら…是非ホストファミリーを経験してみたいです！そして自宅でドイツ料理教室と、フラワーアレンジメント教室を開く事が私のささやかな夢です。夢に向って日々腕を磨いています。

(Email: akawata615@aol.com)

私のドイツ語との出会い

綾井　泰徳

きっかけは、中学生の時に読んだ漫画であった。石ノ森章太郎の漫画サイボーグ００９のエッダ編を読んだのである。エッダとは、細かいことを省略していうと、北欧に伝えられた神話である。神話に着想を得たストーリーであった。

その、冒頭の部分に、エッダの天地創造、人類創造の物語が要約してあった。美しいので、一部引用する。

～人間と神々の運命を決めるのは三人の不思議な女ノルネ（ウルト、ヴェルダンディ、スクルトという名の過去と現在と未来）だ。この三人は“宇宙とねりこ”イグドラズイルという巨木の根にすわっていた。～この木は神々の没落といっしょに倒れることになっている～。（石ノ森章太郎『サイボーグ００９⑪』秋田書店１９７６より）

これに、感動してしまった私は、元の話はどういうものなのか知りたくなり、本屋で北欧神話の本を探した。やっと見つけたのが山室静『ギリシャ神話〈付北欧神話〉』社会思想社１９６３であった。社会思想社はもう潰れているので、これは今では手に入らないだろう。もとより、北欧神話が目当てで、ギリシャ神話はこの際どうでもよかった。読んでみて、北欧神話は透明感があって、いいなあ、と思った。

大学時代、私は別な縁があって、英語とスペイン語の勉強をした。卒業後、やはり、エッダを原文で読みたくなった。エッダはアイスランドに、伝えられたものである。大阪の大きな本屋でアイスランド語の本を探したが、なかった。また、北欧神話に関する研究を、菅原邦城さん、谷口幸男さんの著作で読んでいた。当時の私は、神話学者になりたかった。そうしていると、ドイツ語でも、エッダは頭韻になることがわかった。頭韻とは叙事詩で文頭で韻を踏むのだ。ドイツ語の本なら沢山ある。そうだ、ドイツ語をやろう。

そうして、買ってきたドイツ語の文法の本には、振り仮名を頼りに発音を習っても結構用が足ります、とある。私は、ドイツ語を独学することを決意した。

その時から、十年以上たつが、私のドイツ語は、基礎文法修了程度で、中級の下の方である。独学であったため、ドイツ語の語順を理解するのに随分と回り道をした。語彙が足りないので、なかなか会話が難しい。日独協会には、私よりもドイツ語の堪能な方が多くおられると思います。今後ともよろしくご指導をお願いします。

日独戦争と第九

― 映画『バルトの楽園』の背景など ―

小阪　清行

[はじめに]

今日は「日独戦争と第九」というタイトルでお話させていただきます[1]。

今日の話の流れについて説明申し上げますと、まず、始めに年表を見ながら、日独戦争とドイツ兵俘虜の歴史について振り返っておきたいと思います。その辺の事情をすでにご存じの方も多いとは思いますが、復習のつもりで聞いていただければと存じます。

次に、映画「バルトの楽園」に関連したお話をいたします。映画をご覧になった方が随分多いのではないかと思いますので、講演のタイトルの副題を「― 映画『バルトの楽園』の背景など ―」としておきました。映画の場面を振り返りながら、映画と史実との相違などについて説明することによって、ドイツ兵俘虜たちの実像に迫りたいと考えております。

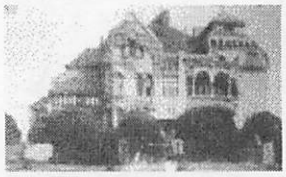
最後に、ドイツに興味を持つわれわれとして、「ドイツ兵俘虜を通して見えてくるドイツ文化」ということについても、少し考えてみたいと思っております。

あまり慣れないことですので、時間の配分がうまくいかないかもしれません。その時点で時間がきていればそれでお話を終わります。しかし、もし時間が残っているようであれば、落ち穂拾い的に、俘虜を取り巻く色々な事件やエピソードなどを、あまり脈絡もなく、２・３紹介しようかと、このように考えております。

では、まずは歴史の復習から始めます。【資料１】の年表をご覧ください。

[歴史]

ご存じのように、ドイツは植民地政策においてイギリス・フランスにかなり遅れをとっていました。アフリカの一部や南太平洋のほぼ全ての島を手中にしていたものの、なんとしても市場規模の大きい中国を獲得したい、そう目論んでいました。1894 年の日清戦争で、日本は中国から遼東半島や台湾などを得ます。これに対して、ドイツはロシア・フランスと一緒になって三国干渉を行い、遼東半島を清国に返還させます。これによって中国に恩を売っていましたが、その背景には実はそういう下心もあったとされています。さて、年表の１行目をご覧ください。１８９７年に中国人によってドイツ人宣教師二人が殺害されるという事件が起きます。ドイツは、これ幸いとばかりに、武力によって清朝政府に圧力をかけ、チンタオを１８９８年から９９年間租借することに成功します。そして戸数たった４００という小さな漁村に過ぎなかったチンタオを、近代軍事基地に変貌させました。その結果、チンタオは「東洋の真珠」とか「東洋の小ベルリン」とか呼ばれるほどの近代都市になったのです。現在の日本でも上下水道が整備されていないところは結構あると思いますが、チンタオは１００年以上も前に既に上下水道が完備されておりました。下の立派な建物をご覧ください。これは青島総督府の昔と今の写真ですが、青島にはこのような欧風の建物が今も数多く残っているそうです。ちなみに、青島の観光キャッチフレーズは「欧風建築とうまいビールの青島」だそうで、もちろん両方とも植民地時代のドイツの置きみやげです。



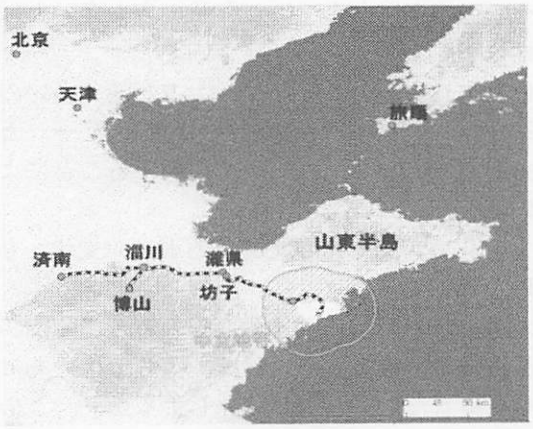
青島総督府（ドイツ支配当時）

青島総督府（現在）

[1] この講演は、2007 年 3 月.10 日、Ｉ-ＰＡＬ香川で開催された。

ここでチンタオという都市について説明しておきます。先ほども申しましたように、昔は小さな漁村に過ぎませんでしたが、ドイツ占領当時に人口は約６万人まで膨れあがり、現在では人口７００万の大都市です。

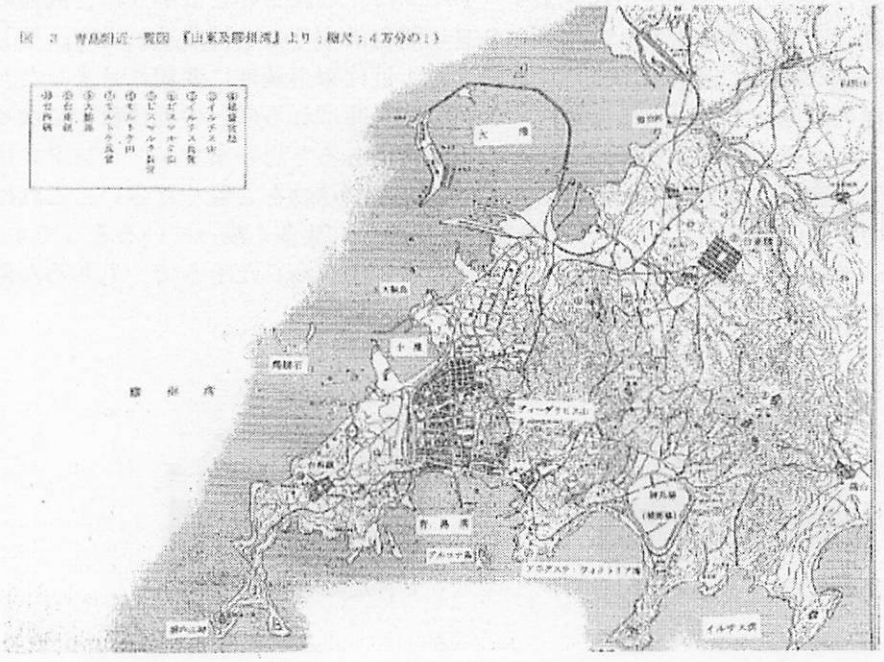
以下の地図(a)をご覧ください。右上に旅順と書かれた半島があります。これが先ほどの三国干渉で返還させられた遼東半島です。その地図の中央が山東半島で、山東半島の付け根のあたり、線で囲まれた部分が膠州湾付近です。そのあたりを拡大したのが(b)です。ドイツはこの膠州湾一帯の鉄道敷設権や鉱山採掘権なども得ていました。(b)の真ん中より少し南、線で囲まれたあたりが青島半島で、その先端に「青島」と書かれたチンタオがみえるでしょう。



(a) 山東半島

(b) 膠州湾

青島半島を更に拡大したのが(c)です。中央に碁盤の目のように区画された黒っぽい部分があります。それがかつてのドイツ人の居住区です。チンタオというのは「青い島」と書きますから、島だと思っておられる方もいるかもしれませんが、この地図でお分かりのように、実際は膠州湾に突き出た半島の先端部分です。今見てもらっているドイツ人居住区の真南に、見づらいですが、アルコナ島という島が見えますか？この島が、本来は「青島」と言っていました。今の青島は、ですから、そのもともとの「青島」という島に面した地域だったために「青島」と名づけられたそうです。青島の近くには、他に読み方は分かりませんが、「赤島」「黄島」というのもあります。信号のように赤青黄と三色揃っています。

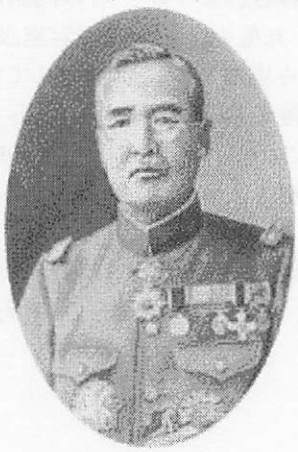


(c) 青島

【資料１】の年表に戻ります。１９１４年６月にボスニアの首都サラエボでオーストリア・ハンガリー帝国の皇太子が暗殺されたことに端を発して、第一次世界大戦が始まります。日本も日英同盟を口実として参戦して、８月２３日にドイツに対して宣戦布告します。

第一次大戦勃発後の１９１４年８月の初旬、つまり８月２３日の宣戦布告に先だって、ドイツ政府は中国国内や日本、朝鮮など東アジアに住むドイツ人を青島へ召集します。その中には、例えば、後に丸亀収容所に収容されることになる東京帝国大学教師（実質的には教授）の Siegfried Berliner や、後に大阪外国語大学教授なった Hermann Bohner（当時、宣教師）とか、後にライプチヒ大学日本学教授や日本文化研究所の初代所長になった Johannes Überschaar（当時は大阪医学専門学校[現在の大阪医科大学]教師）など、博士号を持ったインテリも多く含まれておりました。ともかく、ドイツ兵俘虜は職業軍人だけではなかった。学者、技術者、貿易商人、職人、音楽家など高度の専門知識・技術を持った人間が相当数含まれていた、特に板東収容所の場合は、約半分が予備役、後備役と呼ばれる在郷軍人だったということは、記憶に留めていただきたいのです。

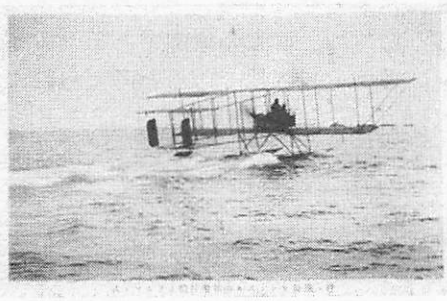
(d)を見てください。これは青島攻略軍司令官の神尾光臣中将で、彼は有島武郎の岳父にあたります。攻略軍は久留米の第１８師団を中心とした約３０，０００名の兵力でした。（ここで「久留米の」という箇所を少し強調しておきます。理由はあとで明らかになります。）迎え撃つドイツ軍は、約５，０００人、すなわち日本側の１／６の兵力で、しかもその約１／３は応召してきた在郷軍人、すなわちにわか兵士達でしたから、兵力には格段の差がありました。



(d) 青島攻略軍司令官・神尾光臣中将
次女安子が有島武郎の妻

(e-1) 映画「青島要塞爆撃命令」のポスター
キャスト：加山雄三、佐藤允、夏木陽介など

余談ですが、(e-1)を見てください。これは今から約４０年前に公開された「青島要塞爆撃命令」という映画のポスターですが、真ん中より右よりに、ちょっと見づらいですが、白抜きで「世界最初の大空中戦」と書いてあるのが見えますか？「世界初の空中戦」は実際はもちろんヨーロッパで行われています。ですからこれは事実に反します。しかも、「大空中戦」と言っても、日本軍の１０機そこそこに対して、ドイツ側は飛行機をたった１機しか持っていませんでした。ですから、これも完全な嘘です。それはともかく、日本軍が初めて戦争に飛行機（水上飛行機）(e-2)を投入したのがこの日独戦争のときであることは間違いありません。



(e-2) 日独戦争に使われた水上飛行機

再び、年表に戻ります。

圧倒的兵力の差にもかかわらず勇敢に戦ったドイツ軍でしたが、二ヶ月あまり後の１１月７日に降伏します。短期間の戦いでしたが、戦死者の数は日本軍が１，０１４名、ドイツ軍の方は戦死者２０９名、病死者１５０名、俘虜が約４，７００名でした。

青島が陥落したあと、攻囲軍司令官の神尾中将が、チンタオ総督のヴァルデックと会見しております。その折に神尾中将は、日本陸軍がドイツ陸軍からこれまでに受けた指導に感謝の意を表し、日英同盟の関係で、不本意ながら青島を攻撃したこと、また日本軍に多大の損失が出るほどドイツ軍の防備は優れていた、と語ったそうです。これに対してヴァルデック総督も、日本軍の武勇を称えたと言われています。先ほども申しましたように、神尾中将は小説家有島武郎の岳父、一方のヴァルデック総督の父親はドイツ文学の教授でした。あまり関係ないかもしれませんが、文学を少し嚙った人間の個人的な感想としては、何となく二人の遣り取りにソフトな一面と言いますか、非軍人的雰囲気が感じられて、ちょっと嬉しくなる場面です。

こうして５０００名近いドイツ兵俘虜が日本に連れてこられることになった訳です。彼らは最初全国の１２ヶ所の収容所に収容されます。１ページの収容所地図には２０あったように書かれていますが、最初は１２でした。後で新しく作られたり、統合されたりします。その１２のうちの３つが四国にありました。すなわち、松山、徳島そして丸亀です。

約９２０名のドイツ兵俘虜がこれら３つの四国の収容所に収容されますが、その内訳は松山の７ヶ所の収容施設に約400名、徳島の２ヶ所の収容施設に約200名、丸亀の２ヶ所の収容施設に約300（３２４）名です。丸亀に２ヶ所というのは、ほとんどの俘虜が本願寺塩屋別院に収容されていましたが、７名の将校たちは徒歩で１０分ほどの別の小さな収容施設（看護婦養成所跡地）に収容されておりました。俘虜たちはこの３つの収容所で約２年半を過ごし、後にこの３つの収容所が今の鳴門にある板東収容所に統合され、そこでまたほぼ２年半。結局、合わせて約１，０００名のドイツ人が、四国で５年数ヶ月を過ごすことになった訳です。

ちなみに、今からお話する板東収容所の松江豊寿所長は、板東の前に、すでに徳島市内にある徳島収容所の所長をやっておりました。徳島時代の手腕が買われて、統合された収容所の所長になった訳です。

[バルトの楽園と史実]

少々退屈だったかもしれませんが、これで復習の時間を終わりまして、今から、映画「バルトの楽園」に関する話に移りたいと思います。

どうでも良い話ですが、映画のタイトルについて少し触れます。「バルトの楽園」の「バルト」はドイツ語の「髭」を意味する「バールト Bart」からきています。松平健が扮する松江豊寿所長のカイゼル髭が非常に立派で目立つものですから、主人公松江のシンボルとしてこの言葉を使ったようです。カイゼル髭というのは、ご存じのように、植民地政策を推し進めた皇帝ヴィルヘルム二世があのような端がピンとはね上がった髭を蓄えていたことから名づけられて、特に軍人に好まれ大正時代には随分流行ったそうです。俘虜研究の仲間の間では、「バルト」では何のことだか分からない。バルトと聞けば、普通の人はバルト海を連想するから、「バールト」にすべきではないか、という議論があったのですが、東映の方ではすでに発表の後だったせいもあって、名前の変更は難しかったようです。おまけに相撲取りの把瑠都を宣伝に担ぎ出したりしたものですから、話が余計にややこしくなりました。

バルトはドイツ語で森を意味する Wald にだぶらせている、という説もあるそうです。

要するに、「バルトの楽園」の意味するところは、軍人の象徴である「カイゼル髭」と「音楽の園」のことですから、「戦争」と「平和」がシンボライズされていると考えられます。

さて、映画の内容についてですが、全体的に見てあの映画は、ほぼ史実に基づいた話だと思っていただいて結構なのですが、史実と違っている個所もかなりありました。今日は映画と史実との間でズレのある部分についてお話しようかと考えております。

最近たまたま見たテレビ番組に、「世界一受けたい授業」というのがありまして、高校の社会の先生なんかが出てきて、例えば「暴れん坊将軍」のオープニングのところに、松平健が馬に跨って颯爽と浜辺を疾走する場面がありますが、あれは嘘だ、というのです。なぜかと言えば、テレビに映るあの

馬はサラブレッドだけれども、江戸時代には日本にサラブレッドはいなかった。いたのは日本古来の馬で、それはポニーみたいな小さい馬だったというのです。あるいは、「遠山の金さん」こと遠山金四郎景元は、遊び人風に描かれているけれども、江戸町奉行というのは実際は現在の都知事・警視総監・消防総監・地検・地裁の所長などの職務を兼任していて、且つそれを一人でやらなければならない激務だったので、過去にその役職の人間が何人も過労死してしまったほどだった、とかそんな番組でしたが、確かに見ていて楽しかったです。

私もそれを真似しまして、今からあの場面は嘘で、本当はこうだったなどとお話して、「世界一聞きたい講演」を目指すつもりですが、あまり期待はしないでください。

念のために申し上げておきますが、私は別に映画が史実と違っているのがイケナイというつもりは全然ありません。映画は言ってみれば「事実」よりも「真実」を描き出す創作あるいは芸術でしょうから、それはそれでもちろん結構なのです。しかし、実際はこうだった、ということを一応知っておくこともまた重要なことではないかと思う訳です。

私は「チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会」の広報係のようなことをやっております。その関係で「バルトの楽園」の助監督の方から、時々私のところに電話がありまして、色々質問を受けました。例えば、当時のドイツ兵達の軍服の色がどうであったのかとか、当時の筆記体（Sütterlin）を書けるドイツ人が今でもいるか、いるとすればどうやって見つければいいか、とか、そんな細かい質問でした。当時の筆記体というのは、映画の中で母親と息子の手紙の遣り取りの場面が何度かありましたが、恐らくあの場面で使ったのだと思います。つまり、映画制作サイドとしては、細部に亘るまで、なるべく史実に忠実であろうとしていたとは思います。その辺は、先ほどポスターを見た「青島要塞爆撃命令」とは雲泥の差があります。あれは完全な娯楽映画で、そういう点ではかなりいい加減でした。「青島要塞爆撃命令」のビデオを助監督さんが見たいというので、お送りしましたが、たぶんあまり参考にはならなかったと思います。

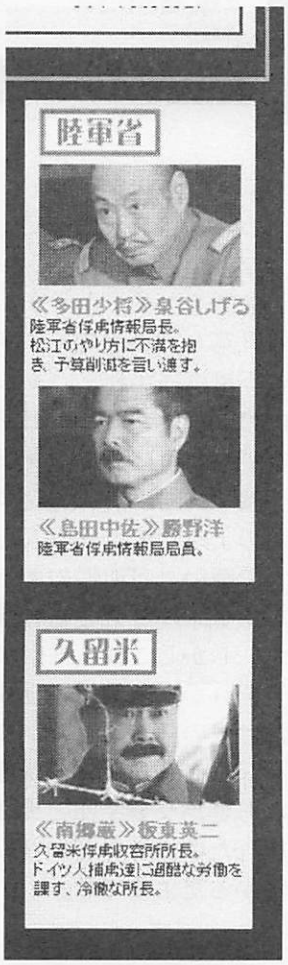
映画の登場人物について少しお話いたします。（説明）

A. 松江所長 →

（実名）

← B.高木大尉

（実名）



C. 南郷所長 →

（仮名。モデル：

眞崎甚三郎?）

↑ D. ハインリッヒ少将

（仮名。モデル：Alfred Wilhelm Moritz Meyer-Waldeck?,　Otto Günther?）

↑ E. ハンゼン

（仮名。モデル：Hermann Hansen）

G. 松江の父（旧会津藩士）　↓

↑ F. カルル・バウム

（仮名。モデル：Karl Juchheim?、Heinrich Freundlieb?）

これで、映画を見ていない方も、だいたいの粗筋は理解していただいたのではないか、と思います。

前置きが長くなりましたが、映画と史実のズレの話に入ります。まず、映画のクライマックスとなる「第九」の演奏ですが、映画では収容所の中でドイツ兵俘虜と板東の住民が一緒に第九を聴いたという風に描かれていました。年表の２ページ目を見てください。1918 年６月１日に「板東俘虜収容所内でヘルマン・ハンゼン指揮により、ベートーヴェンの『第九』が演奏される」とあります。その２行下に、「11 月 11 日休戦条約締結される」とあります。

戦争終結以前に一般の日本人が自由に収容所に出入りするということは、あり得ませんでしたから、あのような形で日本人とドイツ人が第九を一緒に聴いたというのは、全くのフィクションです。日本人で聴いた可能性のある人がいたとすれば、國村隼が演じていた高木副官くらいでしょう。彼は、自らヴァイオリンを嗜むほど音楽好きだったらしいので第九初演を聴いた可能性はかなり高いと思います。しかしこれも推察に過ぎません。

それから映画では昼間に、しかも野外で演奏したような設定になっていました。しかし、実際の開演は夜の７時過ぎで、演奏会場は「講堂」の中でした。そこに入れたのは講堂の面積から計算すると、ギュウギュウ詰めの状態でも精々５００人程度だったろうと言われています。しかも演奏者側、すなわち徳島交響楽団と男性合唱団のメンバーですが、それだけで１３０人ほどもいましたので、客席に座れたのはせいぜい３００～４００。ですから、俘虜たちの多くは「講堂」の外で聴かなければならなかったようです。

ちなみに、この演奏を直接聴いた元俘虜の一人パウル・クライ（Paul Kley）は、後に回想して「ハンゼン指揮の『第九』の反響はすごかった。最後は全員の大合唱になり、泣き出す者も出る始末だった」と言っています。

余談ですが、収容所内での演奏でありながら、この第九初演の知らせはすでに新聞で全国に報道されていたようです。これについては、「銭形平次」を書いた作家で、当時は報知（読売）新聞の社会部長をしていた野村胡堂が、資料Aの資料①のようなことを書いております。彼は「あらえびす」のペンネームで、音楽評論をやっていたほどのクラシック通でした。（読む）

こういうことを通して、すでにこの頃には、もう一部の日本人の心を捉えていた様子が窺われます。

さて、板東での演奏は、「俘虜の、俘虜による、俘虜のための」第九でしたが、一般の日本人で第九を初めて聴いたのは誰だったでしょうか？年表の1919年12月3日のところを見てください。「久留米高等女学校講堂で女学生達を聴衆として、久留米収容所俘虜によるベートーヴェン『第九』の第2、第3楽章が演奏される」とあります。これが恐らく、日本人が初めて第九を聞いたときだったでしょう。もっともこのときは、部分的にしか演奏されておりません。

これまでの話はドイツ兵俘虜による演奏でしたが、ここでついでに、「日本人の、日本人による、日本人のための」第九の全曲初演はいつかと申しますと、これは板東での初演から6年遅れて、1924年のことになります。東京音楽学校のグスターフ・クローンが指揮しました。（ですから、正確に言うと、完全に「日本人による」とは言えない訳ですが。）クローンというのは、かつてベルリン・フィルのヴァイオリンのソリストをやっていた人で、ニキシュなどの推薦により東京音楽学校の外国人教師に就任して、在任中多くのベートーヴェン作品を本邦初演した人物だそうです。ドイツ兵俘虜の話とは直接は関係ありませんが、興味のある方は、以下をお読みください。当時の日本人の反応が読み取れるのではないかと思います。

東京音楽学校での“第九”初演の予告記事

（朝日新聞　大正13年11月27日 朝刊）

今や終に其時は來た。疲れ果てた心を振り起こして、此處に吾人は「歓喜の歌」を謠はうとする！一八二四年、墺國ウィーンに其初回演奏の産聲を擧げてより此處に滿百年、今年今月二十九日、樂聖ベートーヴェン一代の傑作「第九ジュムフォニー」は方に我日本に於ける初回演奏の厳かなる響きを傳へようとして居る。永き憧れの充たされる日を數へて、此處に吾人は聲高く「歓喜の歌」を謠はんとする！

（『ベートーヴェンの「第九ジュムフォニー」』序文冒頭より抜粋）

初めて演奏される第九交響樂

東京音樂学校では管弦樂曲の代表作であるベートーヴェンの傑作第九交響樂を二十九卅兩日午後二時演奏する事になつたが同曲は合唱附管弦樂で難曲中の難曲と謂はれてゐるもので同校では今春來クローン教授の指揮の下に教授講師生徒二百餘名により猛練習を重ねたもので、又同曲の演奏は日本では之が最初の試みであると

（「朝日新聞」大正十三年十一月二十七日『音楽だより』より抜粋）

ドイツ兵俘虜と関係ないと申しあげたところですが、実はこのクローンは、ドイツ兵俘虜と少し接点があります。【資料２】のエンゲルの手紙をご覧ください。これは比較的最近、去年の９月に発見されたパウル・エンゲルの手紙です。東京のさる郵趣家（郵便物の蒐集家）の方が、私宛にメールの添付ファイルで送ってくれました。郵趣家の方々は、ときに極めて高度の知識をお持ちです。この方も、音楽史の研究家でもあるようです。

パウル・エンゲルは丸亀でエンゲル・オーケストラを結成して、板東でも第九を初演したハンゼンとともに、音楽活動では最も大きな功績を残した人物です。昔の朝ドラ「なっちゃんの写真館」のモデルになった徳島市内の「立木写真舘」で、「エンゲル音楽教室」を開設したことでも知られています。丸亀では数年前まで、彼の名前を借りて「エンゲル祭」と銘打って、毎年俘虜関係の講演を行ったり、演奏会を開催していおりました。今は残念ながら財政難でストップしておりますが。

さて、エンゲルの手紙は、東京に住むラントグラーフという実業家に、解放後の就職の斡旋を依頼する内容です。日付が 1919 年 10 月 1 日となっておりますから、解放を間近に控えていまして、俘虜たちも敗戦の祖国に帰っても就職難が待っていることをよく承知していました。エンゲルの場合、奥さんの Bertha が上海で待っていましたから、特に必死だったでしょう。

３ページの上の方、手紙の末尾を見てください。署名の左側に追伸のような格好で（訳には下線）Vielleicht kann Herr Professor Kron für mich etwas in Tokyo besorgen.「ひょっとするとクローン教授に、東京での私の職について何かお世話いただけるのではないでしょうか」とありまして、エンゲルと東京音楽学校のクローンが音楽を通して、間接的かもしれませんが、繋がっていたらしいことが読み取れます。

ついでながら、エンゲルの手紙の真ん中ほど、前のページ、２ページの下から８行目ほどのところ、下線を施した個所を見てください。「去年私は徳川侯の前で、私のオーケストラと一緒に協演いたしましたが、その演奏の後、彼が私に個人的に話しかけてくれまして、オーケストラと私の演奏を褒めてくださいました」と言って、少々自己アピールしている一節があります。この徳川侯というのは紀伊徳川家十六代当主の徳川頼貞のことでして、なんき南葵楽堂という日本最初の私設音楽堂を作ったほどの音楽愛好家だったそうです。資料によっては、この人が板東で第九の初演を聴いたと書かれたものがありますが、これは間違いで第九の「初演」ではなく、その２ヶ月くらい後に、板東の第九演奏の噂を聞きつけて、わざわざ演奏を聴きに行き、第一楽章だけを聴いたというのが正しいようです。

かなり細部に亘って第九にこだわって参りましたが、第九についての話はこれで終わりにしまして、映画と史実のズレの２番目に移ります。

映画の中に何度か松江所長が、会津藩が下北半島に移住されたときの苦難を回想するシーンがありました。松江大佐の父親（松江久平）は会津藩士でしたが、会津藩はご存じの通り、朝敵としてその藩領は没収されました。かつて京都守護職であった会津藩主松平容保（かたもり）は鳥取藩預かりの禁錮刑となり、当時まだ 2 歳だった容保の嫡男（容大、かたはる）が明治 2 年（1869 年）に家名存続を許されて、青森県の下北半島に斗南藩を立てました。下北半島は恐山などがある本州の最北端で、不毛の地でしたから、松江の父親を含む一族が飢えに苦しんで、木の根っ子さえ食べた、というような映画の場面は、恐らく実際にあった話だと思われます。しかし松江豊寿自身は、数年後父親が会津に帰ってのちに、そこで生まれておりますから、松江大佐自身が斗南の艱難を体験したというのはフィクションです。もちろん、父親から当時の苦労話は聞いていたでしょうし、本人も会津出身の軍人として、薩長出身者などと較べて、相当の辛酸を嘗めたことは、映画にあった通りだと思われます。要するに、映画が言いたかったことは、松江大佐が会津出身者として、行く先々で「敗者の悲哀」を味わい、それがドイツ兵に対する「武士の情け」へと繋がった、ということだったと思いますが、この辺りは、映画に描かれていた通りだと考えていいのではないでしょうか。

史実と映画とのズレの３番目に参ります。

ブルーノ・ガンツというのは、2004 年の話題作「ヒトラー ～最期の 12 日間～」でヒトラーを演じて、世界的俳優として知られるようになった俳優です。そのガンツがチンタオ総督クルト・ハインリッヒ少将という役で出演しておりました。板東収容所で一番階級が上だったのは Eduard Kleemann 少佐で、彼が俘虜代表を務めておりました。そもそも 5,000 人近いドイツ兵俘虜の中に「少将」は一人もおりませんでした。ドイツ兵俘虜の中では階級が一番上だったのは、先ほど登場しましたチンタオ総督の Meyer-Waldeck で、彼は松江所長と同様、大佐でした。

もっともヴァルデックは、俘虜期間中に昇進して少将になっています。しかし、日本側はこの昇任を認めておりません。すなわち、ご存じかと思いますが、将校たちは俘虜の身分でありながら、ハーグ条約に則って給与を支給されておりました。日本側が認めなかったということは、具体的に申しますと、ヴァルデックに対して、ずっと大佐としての月俸（２８０円）しか支給しなかったということです。

さて、この点において、日本とドイツの文化の違いが見てとれるのではないかと思います。すなわち、日本では、特に第二次世界大戦に際しては、東條英機がだした「戦陣訓」というのがありました。「生きて虜囚の辱を受けず」という文句が特に有名です。捕虜になるくらいであれば、潔く自決せよ、という考えですが、これは恐らく武士道精神とも関係していると思われます。極めて日本的な考え方

と言えるでしょう。ところが、ドイツでは収容中の俘虜たちを、功績があったとして、昇進させている例がかなりあります。これはわれわれ日本人には奇異にうつる訳です。ここには、俘虜であることも勤務の一つの形態である、という言ってみれば合理的な考えがあるようです。日本の心情的な捉え方とはかなり違う、という気がします。

話はちょっと飛びますが、第二次大戦の頃、徳島の阿波市出身の酒巻和男さんという海軍少尉がいたそうですね。阿波市というのは隣町と言ってもいい程、板東のすぐ近くです。この酒巻さんは真珠湾攻撃で、小型潜水艇に乗り込み、奇襲攻撃を試みましたが、座礁します。俘虜になってはいけないので、自爆を試みたものの失敗。意識を失い米兵に捕らえられ、日本人捕虜の第１号となったそうです。戦死した他の９人は「軍神」として崇められたそうですが、酒巻さんの家族は捕虜になったというだけで「非国民」だと非難されといいます。ドイツ兵俘虜の場合とは、随分大きな違いがあります。

話がだいぶん逸れておりますが、元に戻します。ともかく、ヴァルデック大佐が収容されていたのは習志野収容所でして、板東収容所ではありませんでした。

では、ハインリッヒ少将のモデルは全然いなかったかと言いますと、それらしき人物が比較的短期間ですが板東にいるにはいました。総督府の民政長官をやっていた Otto Günther です。総督でもなく、文民でしたから当然軍の階級もありませんでした。彼は第九が初演される５日ほど前（1918 年５月 26 日）に青島警察署の監獄から板東収容所に移送され、休戦条約が締結された後（12 月６日）に青島に召還されていますから、約半年間だけ板東にいたことになります。彼は別れに際して、銀飾りの施しのある愛用のステッキを松江所長に贈ったそうですから、恐らく彼がモデルになっていることは間違いないと思います。

なお映画の中で、第九初演にあたってハインリッヒ少将が挨拶をして、松江所長にステッキをプレゼントする場面がありました。そのときハインリッヒ少将が「世界のどこに、板東のような収容所があるでしょうか。世界のどこに、松江大佐のような・・・(収容所長がいるでしょうか)」と言ったのを覚えておいででしょうか。あの言葉は、実は借り物です。実際は、先ほど第九の話のときに登場した、元俘虜 Paul Kley 二等兵の晩年の言葉です。Kley は丸亀と板東で５年間俘虜生活を送ったばかりでなく、第二次大戦でも俘虜となり、死刑の判決を受けたり、後に 25 年の懲役刑に減刑されたりしますが、結局９年間シベリアで収容所生活を送った人です。97 歳まで長生きはしていますが、青年時代、壮年時代に合計して 15 年近くも俘虜生活を送った苦労人です。そのような Kley の言うことですから、なかなか重みのある言葉だと思います。

次にズレの４番目として、各収容所の待遇の比較の問題に移ります。映画では特に板東と久留米の収容所が比較されて、久留米の俘虜たちはかなりヒドイ扱いを受けていたように描かれていました。実際、初期の久留米収容所の所長には俘虜達に暴力を振るった者もいたようです。後の二・二六事件の黒幕とも目される眞崎甚三郎が二代目の所長だったのですが、板東英二が扮する南郷所長は、「非常に恐れられ」ていたこの眞崎甚三郎中佐がモデルだと言われています。

ともかく映画では、板東収容所が如何に素晴らしい収容所であったかを引き立たせるために、一番待遇の悪かった久留米収容所を対置しておりました。台本作者なら誰でもああいう手法をとったと思います。しかも映画にあったように、実際に久留米収容所から９０名が板東へ移ってきております。もっとも、移動は第九初演の２ヶ月後ですから、映画とは順序は逆ですが。久留米から来た俘虜たちは不衛生な環境のため南京虫に苛まれていて、それへの対策、つまり荷物の消毒などのため、板東では余計にお金がかかったとの記録が残っているそうですから、よほど両収容所の間には違いがあったのでしょう。

ちなみに、丸亀に収容されていた元東京帝国大学教師 Siegfried Berliner が待遇の悪さを、面会に来た妻を通して、アメリカ経由で本国ドイツの陸軍省に訴えます。その結果、中立国アメリカのウェルズという大使館員が、各収容所を回って調査を行いました。その報告書によれば、松江所長の徳島収容所はもちろん上中下の「上」にランクされておりますが、眞崎甚三郎所長の久留米収容所はやはり「下」と評価されています。ある俘虜は板東収容所を「模範的収容所 Musterlager」と呼び、それに対して久留米は「日本の KZ（強制収容所）」と表現しました。色々な評価の仕方があり、例えばある人は丸亀収容所を上位にランク付けし、別の人はワースト４だと言います。しかし、板東がベスト１で、久留米がワースト１だと言う評価においては、ほぼ一致しているようです。

しかしながら、研究者の間では、そういう一般の評価に疑問を投げかけています。岡山大学名誉教授で松尾先生という方がおいでますが、極めて実証的でかつ緻密な研究で定評があります。その松尾先生と、久留米には特に詳しいドイツの俘虜研究家シュミットさんという方の間の通訳をしたことがあります。二人の考えでは、板東と久留米の間には、一般に言われているほどの大きな差は無かった、とのことで意見が一致していました。例えば、板東収容所の俘虜の奥さんが夫に面会を求めても、規則で週に何回と決まっていた筈ですが、なかなか会わせてもらえなかったという話が、私の記憶に残っています。また、久留米収容所の研究者で堤さんという方がおいでます。彼がドイツ兵俘虜に関する本を書いておられて、久留米収容所の音楽活動や市民との交流などについて紹介しているのですが、「バルトの楽園」を見た人達から、その本と映画とのあまりの落差に、「嘘つき」呼ばわりされて困っている、とのメールをいただいたことがあります。あの映画で久留米収容所の株が実際よりも相当下がったのは間違いありません。

映画にもありましたように、青島攻略軍は久留米の第１８師団を中心としていまして、その攻略軍から約千人の戦死者が出ていますから、久留米の師団関係者や地元遺族の感情からすれば、多くの仲間・身内を殺した敵をおいそれと丁重に扱うことなどできなかった、そういう事情を差し引いて考える必要もあるのではないかと感じています。

その他、細かい点で事実と異なる点はいくつもあると思います。例えば、松平健が扮する松江所長はかなり上手なドイツ語を喋っておりましたが、松江は学校時代フランス語を学んでいて、ドイツ語はほんの少しできた程度だったそうです。それから、チンタオで戦死した父親を探して板東に来た「志を」という少女の話とか、市原悦子の扮する村の女が脱走俘虜を助けた話などは、全くのフィクションでしょう。

さて、映画と史実の間のズレについて色々喋ってきた訳ですが、私個人にとって一番興味がありますのは、板東収容所と松江所長が、美化され過ぎてはいないだろうか、という点です。先ほども申しましたが、芸術作品においては、どんな脚色も許されるとは思います。ただ、ここでの問題は実際はどうだったかを知るということです。

ある意味では英雄の仮面を剥がすような露悪趣味的な行為であるかもしれませんが、やはり、事実は事実として押さえておく必要があろうかと思います。

松江所長は、ご遺族の話などから判断しても、人間的に見て極めて温厚な人情味溢れる方のようでした。これは間違いないと思います。ただ、私には少しひっかかる点があります。松江は一時期韓国にいて、韓国統監であった伊藤博文に重用されたと言われています。松江所長の奥さんの言葉を引用しますと、松江は「伊藤に気に入られよく食事を共にし、口がおごって困った」ということです。松江がいかに伊藤博文に近い関係にあったか、よく理解できます。その伊藤博文がどんな政治家であったかと言えば、韓国の保護国化を意図して皇帝に譲位をせまったり、軍隊を解散させるなど内政干渉を行いました。このような伊藤やその周辺に、「武士の情け」や「敗者への同情」があったのかどうか、これは大きな疑問です。しかも松江は日韓併合に功績があったとして天皇から「併合記念章」を受けています。

意地の悪い考え方だと思われるかもしれませんが、松江所長にもひょっとするとわれわれ日本人にありがちな、欧米人に甘く、近隣アジア諸国の人々には厳しいという、そういう一面があったのではないか。そう勘ぐりたくなる事情がある訳です。こういう疑問をもつのは私だけではないようでして、何人もの方が同じ問題意識を持っていることを確認しております。この辺りのことに一番詳しいのはドイツ館の田村先生ですが、先生に一度この問題に関して質問したことがありますが、結局、この時代の松江については史料が少な過ぎて何とも言えない。目下のところ未解決の問題とされているようです。

それから、映画の中で、こんな場面がありました。ドイツが休戦条約を締結した後、すなわち戦争に負けた後、俘虜達は意気消沈してしまいます。そして収容所新聞「バラッケ」の編集者たちも新聞発行の意欲を無くしてしまいます。そんな彼等にマツケン扮する松江所長が「バラッケ」の発行を続けて、今こそ仲間を励ますようにと、Das ist ein Befehl! 「これは私の命令だ！」と珍しく激しい言葉で檄を飛ばす感動的シーンがありました。ところが実際は「バラッケ」の編集者の側からは、解放を

前にして自由に物が書けるようになった時点で、「今までは収容所の管理側からの検閲ゆえに、思うことがそのまま書けなかった」との不満が漏らされています。

あまりこういうことを言いますと、せっかくの皆さんの感動に水を差すかもしれないので、憚られもするのですが、やはりこういう一面もあったことを知っておくことは必要かな、と思った次第です。

しかし、ちょっと松江所長の評価を下げ過ぎたかもしれませんので、ここでもう一度持ち上げます。何はともあれ、松江豊寿所長が極めて立派な収容所長だったことに変わりはありません。

ここで、時代もちょうど同じ、第一次世界大戦中の収容所長について、ロマン・ロランが母親に宛てて書いた手紙の中の文章がありますので、参考にしていただきたいと思います。以下をご覧ください。

２人の代表はベルリンの近くで、マグデブルク、トルガウ、ツォフェンの３ヵ所の俘虜収容所を訪ねることができました。俘虜の待遇はその地の司令官の如何によって違います。マグデブルクではそれは厳しく、トルガウでは大変人情味があり、非常に寛容です。もっとも衛生条件はどこも良好です。２人は俘虜への送り届けやその物品の分配に便宜をはかるためにいろいろと重要な譲歩を獲得しました。

（ロマン・ロランの手紙より。『母への手紙』（1914 年 12 月 17 日付）には ICRC（赤十字国際委員会）の２人の代表がベルリンでフランス人捕虜と再会した話がでている。）

「人情味があり、寛容である」ためには、色々な局面で、人間として包容力やスケールの大きさ、ある場合には勇気が求められると思います。松江所長は俘虜たちのことを思い、左遷を覚悟でやっていた、この点については疑う余地はなく、映画に描かれていた通りだと考えてよいのではないかと思います。

先ほどから何度も登場している二等兵 Paul Kley にもう一度登場してもらいます。彼は９０歳近くなって次のように言ったそうです、「ひとり暮らしの今は、板東の温かい思い出に包まれて生きている。それにしても、松江所長と高木副官は素晴らしい軍人だった。みんなが尊敬していた」。

[最後に]

「日本では類を見ない捕虜収容所、２年１０ヶ月の奇跡の日々」――これは映画の宣伝文句ですが、「奇跡」というのはちょっと大げさかもしれませんが、ある程度は本当でしょう。ではなぜ、そのような奇跡が可能だったのか、松江がどうして俘虜に対して、あのような寛容な態度をとり得たのか、このあたりは是非とも知りたいところです。その背景をいくつか挙げてみましょう。

まず、第１番目に、松江所長があのように寛大であり得た背景には、ハーグ条約というものがありました。日本は周知の通り、幕末に開国して以来、列強から不平等条約を押しつけられ、屈辱を味わわされておりました。ですから、俘虜を人道的に扱うことを求めたハーグ条約を真っ正直に遵守することによって、文明国であることを世界に認めさせることが急務だった訳です。日独戦争の頃までには、不平等条約もかなり改善されてきて、もはや卑屈なまでにサービスする必要もなくなったいたのですが、十年前の日露戦争のときは、まだ馬鹿正直に条約を守っていたようです。特に松山収容所のロシア将校などは、家族を呼び寄せて、借家住まいをして、おまけに料理人まで雇っていたといいます。道後温泉などにも結構よく行っていたようです。

日露のときほどではないにしても、日独戦争後の俘虜対応も、背景にはやはり、ハーグ条約がらみの政治的・外交的な思惑があったようです。

第２番目には、すでに見たように、松江の出自が大きく関係してくると思います。松江は幼年学校・士官学校を経て長州閥の強い陸軍に進みますが、行く先々で会津出身者としての「敗者の悲哀」を味わいます。「ドイツ人も国のために闘ったのだから」というのが松江の口癖だったそうです。その言葉の裏には、疑いもなく「われわれ会津人も国のために闘ったのだ」という気持ちが隠されていたことでしょう。それがドイツ兵への同情へと繋がったということ、これも疑えない事実でしょう。この辺りは、中村彰彦氏が直木賞をとった作品『二つの山河』に詳しく述べられています。

今述べた二つの点は、映画の中でも上手く取り入れて言及されていたと思います。

私はここで、さらにもう１つの点を付け加えたいと思います。

それは、松江所長には複眼的視点があったのではないか、という点です。これは先に述べた会津出身ということとも関連しています。

すなわち、松江所長には勝利者と敗北者、管理者と非管理者、日本とドイツ・・・という対立軸を、両サイドから相対化して見ることのできる姿勢が具わっていたのではないか。そして、それによって、対立を融和させることのできる姿勢、そういうものが具わっていたのではないか、という気がするのです。それをどういうところに感じるかといいますと、例えば、松江は「ドイツ人も国のために闘ったのだから」と言いいます。そのときの「国のために」という言葉は、文脈から判断すると「大義のために」という言葉で言いかえることができるかもしれません。すなわち松江の場合、「会津 - 対 - 薩長」とか「日本 - 対 - ドイツ」というような党派的な考えを超越しているのではないかと感じられます。

松江所長自身の書いたものなどはあまり残っていないようで、断定はできません。ですから、これはあくまで仮説の域を出ない訳ですし、多少「こじつけ」っぽくもあるのですが、私自身は極めて重要な点だと思っています。

この辺のところをもう少し詳しく考えてみたいと思います。

以下の図式をご覧になってください。

北欧的（ドイツ的）なるもの		南欧的なるもの
暗さ、音楽（流れ）、werden	アルプス	明るさ、造形美術（形）、sein
非体系的・非組織的、動的		体系的・組織的、静的
力、情念、激情、陶酔、熱狂		精神、理知、調和、秩序
ディオニソス（酒の神）		アポロン（太陽神）
神秘主義、理想主義		現実主義、合理主義、啓蒙主義
プロテスタント		カトリック
疾風怒濤、ロマン主義（病的）、彼岸への憧憬		古典主義（健全）、此岸に充足
悲劇、抒情詩		喜劇、叙事詩
哲学的・形而上学的、深遠		社会改良主義、現世的
主観的、内面性、非世俗的		客観的、世俗的
粗野（野蛮？）、魂の古代性		洗練・優雅
自然への回帰		自然を離れて進歩、文明・文化
民族的		世界的、ヨーロッパ的
ルター（奴隷的意志論）		エラスムス（自由意志論）
バッハ、ヘルダー、シラー、ベートーヴェン、ワーグナー、ニーチェ		ミケランジェロ、ダ・ヴィンチ、デカルト、ヴォルテール、セザンヌ、ピカソ

これは、ドイツ的なるものとは何か、ということを説明するために私が作った図式です。どなたもお気づきのように、アルプスの北と南では、人間も文化も随分違います。それで南欧的なるものと対比させると、北欧的なるもの、あるいはドイツ的なるものが割とはっきり見えてくると思うのです。これは、私自身が付け足した部分もかなりありますが、基本的にはドイツの作家トマス・マン(Thomas Mann)が『ドイツとドイツ人』という講演で述べている考え方に基づいております。図式的に考えることは、ある意味で非常に危険だと思うのですが、分かり易くするためにあえてこれを使います。

1・2分お待ちしますので、この図式をよく眺めてみていただけますか。

トマス・マンがこの講演をアメリカで行ったのは、1945 年 5 月、すなわちドイツが無条件降伏した直後のことです。マンはヒトラー政権に反対して 1933 年に亡命しましたが、恐らく十数年の間、何がドイツをナチスという狂気に追いやったのか、そのことを考えて考え抜いていたのだと思います。彼はドイツ民族の卓越性と、ドイツ民族の物騒な性質を、自身の体験から知り抜いていた人間だと、私には思われます。

皆さんは、宗教改革者ルター(Martin Luther)をよくご存じだと思います。彼はよく「ドイツ精神の権化」などと言われます。私はしばらくルターの思想を嚙っていた時期があるものですから、ルターの偉大さ・深遠さ・精神の強靭さというものを、多少は知っているつもりです。

その偉大なる「ドイツ精神の権化」であるルターが、実は次のような言葉も吐いているのです。これは宗教改革が始まった 1517 年から 7 年の後、ドイツで農民戦争(1524～25)が起こります。農民たちはルターの「神の前に人間は平等である」という考えに共鳴し、その影響のもとに、領主たちに対して重税に抗議して立ちあがったのです。しかし、ルターは領主たちの側に立って、彼等に宛てた手紙の中で、次のように言うのです。

農民は今や福音のために戦っているのではなく、彼らは反乱を惹起する、不従順な殺人者、略奪者、冒涜者であることが明瞭になったので、当局は彼らに対して十分な罰する権利をもつ。当局が剣を帯びているのは、まさにこの目的のためであるからである。これに反して、農民に味方して生命を失う者は、永遠に地獄の火に焼かれる。彼は神にそむいて剣を帯びた者であり、悪魔の輩下であるからである。だから愛する諸侯よ、できる者はだれでも、刺し殺し、打ち殺し、締め殺しなさい。そして暴徒ほど有毒にして、有害な、また悪魔的なものはないのだということを忘れてはならない。狂犬を打ち殺さなければならない時、事情は同じである。

結果として十万人の農民が領主軍の剣によって殺戮されたと言われています。これはルターを誹謗する際によく引用される文章です。ルターはよく双面神ヤヌス、すなわち二つの顔を持つ神に例えられます。極端に素晴らしい面とその逆の面を具え持つからです。ですから、ルターの偉大さを知らずに、この面からのみルターを見ることは、これはまた非常に危険なことなのですが、彼にこんな面があったこともまた知っておく必要はあります。ルターにおいてはまた、反ユダヤ主義的な考えも濃厚でした。

さて、ルターに見るごとく、北欧的なものは自然性というものを尊びますから、ゲルマン的な粗野あるいは野蛮な面が出てくる危険性は、常に潜んでいると言っていいと思います。では、南欧的なものはすべてプラス面だけしかないか、と言えば、そこにはしばしば自然性がもつ生き生きした息吹き、魂の高まりというものに欠ける嫌いがあります。

ナチスによって国土だけでなく、精神もズタズタに荒廃させられたドイツ人に向かって、マンはこう言います、「今日、われわれドイツ人が模範とすべきは、ルターではなく、ゲーテである」と。ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)は、若い頃は当時流行のフランス文学にかぶれていました。しかし、ヘルダー(Johann Gottfried von Herder)という先輩との出会いで、ゲルマンの精神、民族の魂に目覚めます。それがシュトゥルム・ウント・ドラング（Sturm und Drang、疾風怒濤）です。しかし、この文学運動は極めて激しいもので、仲間の多くが自殺したり、発狂してしまいました。ゲーテと、そして後にその親友になったシラーは、辛くもその危機を乗り越えることができました。そして三十歳代から、古典主義に移行して行きました。しかし、ゲーテの凄いところは、古典主義に移っても、ゲルマン的なもの、北欧的なもの、自然性というもの決して失わなかったことです。ゲーテが一番好んだ言葉は、lebendig という言葉でした。「生き生きした」とか「溌剌とした」という意味ですが、ゲルマン的な「生き生きした」魂、これを失うことなく、南欧的なものをも身につけている点、汎ヨーロッパ的、世界的、あるいは宇宙的、このような特徴こそがゲーテの凄さだと思います。

さて、このことと俘虜研究とがどう関係するのか、と言う話になります。マンの言いたかったことは、一言で申せば、先ほども申し上げましたように、複眼的視点を持つこと、物事を両サイド、あるいはあらゆる角度から見る態度が極めて重要である、国境とか民族とか、そういうものを超越することが重要である、ということではないかと思います。松江所長にもそういう面が恐らくあったのだと、私は感じているのです。俘虜のことを勉強しながら、そのようなことも学べれば素晴らしいのではないかと思っております。

さて、時間が少々残っているようですので、俘虜たちに関するおもしろそうなエピソードを、ほとんど何の脈絡もなく、落ち穂拾い的に二・三紹介したいと思います。

[落ち穂拾い]

＊ローカルな話題

まず、遠い昔の俘虜を、もっと身近に感じていただけるような、ローカルな話をいたしましょう。

実は皆さんが今いらっしゃるこの香川国際交流会館の前あたりを、９０年ほど前にドイツ人俘虜がたびたび通っていたと思われます。と申しますのも、高松工芸高校、当時は香川県立工芸学校と言っていましたが、そこにドイツ兵俘虜が二人、技術指導のため丸亀から週に 2 回ほど通って来ていたからです。もっともご存じの通り、今の工芸の場所には昔は高松中学があり、工芸は昔は今の香川大学教育学部辺りにあったようです。でも、いずれにしてもここからそう遠くない場所です。以下を読んでみましょう。

1916 年（大正 5 年）11 月 19 日（大阪朝日新聞　四国版）

香川県立工芸学校にては丸亀市に収容中の俘虜を雇いて教師となし、同校生徒をして獨逸に於ける工芸品を模索せしむることに決したるは既報の如くなるが、同校と俘虜収容所と交渉の結果、俘虜の中にて特別の技術を有する図案及び指物一名宛を毎週二回宛同校に通はせしめ教授を受くることに決し、来週より実行すべしと。

それから、中村会長さんと丸亀日独協会の山下さんは西讃の出身と聞いておりますが、ローカルな話題ということで西讃に関係する事件を紹介いたします。以下をご覧ください。

『丸亀収容所日誌』より

大正五年二月十二日　　晴

一、午前八時五十分第二中隊班長カール・バウツ、伍長ハンス・アンドレーの両名事務所に来り同中隊上等兵ヘルマン・ゼーゲル、卒ヨハン・ヘルマイの二名今朝所持不明の報告に接せしかは直に取調しも全く不明の由報告す

一、右捜索の結果東側外壁に破壊逃亡の形跡あるを発見す

大正五年二月十三日　　晴　夜　雪

一、午前二時丸亀憲兵分遣所より左の電話通報あり

十二日午前十時頃詫間村字濱田―仁尾道に於て二人の外人に出会ひたる者ありと

一、右直後丸亀警察署より十二日午前十時頃右濱田附近に於て二名の外人に出会ひたる婦人ありたる由電話通報あり

大正五年二月十四日　　晴　風稍強し

一、午後七時五十分師団司令部より左記電話通報あり

三豊郡辻村在郷軍人分会より善通寺聯隊区司令部宛の電報に依れは西洋人を捕へたり連れに来られたしとの事に付直に憲兵を差遣せり

一、午後八時四十五分丸亀警察署より収容所附巡査を介し左の通報あり

観音寺警察署長より県警察部宛報告に依れは逃走俘虜二名恙なく逮捕せり

今の三豊市山本町で遍路宿を営んでいた真屋エツという女性が、消防団に通報したことが逮捕につながりました。彼女は香川県知事から表彰を受けております。

映画では、市原悦子扮する板東の村の女が、脱走俘虜の怪我を治してやったり、食事を与えたりして、かばってやりましたが、残念ながらと言うべきか、わが香川での史実はそうではありませんでした。

なお、丸亀ではこの 9 ヶ月後に、もう一回脱走事件が起きています。丸亀収容所には『機密日誌』なるものも残されていました。この講演の準備をしている間に、岡山大学の高橋先生から入手したのですが、そこには丸亀から脱走を計ったヨーゼフ・ボート(Josef Both)とルードルフ・エーラート(Rudolf Ehlert)という二人の俘虜に関するなまなましい記述があります。彼等は同性愛者であって、同輩から腕

力の制裁を受けて、自殺未遂事件を起こした末に脱出を試みた経緯が書かれいます。

さて、ローカルと言うことで、もう一つ。私ごとで恐縮ですが、かく申す私も実はドイツ兵俘虜を身近に感じている一人です。私は昔、丸亀収容所のあった塩屋別院内の付属幼稚園に 4 年間も通いました。また、東大教師をしておりましたベルリーナー博士は、奥さんも日本に一緒に来ておりまして、彼が丸亀に収容されてからは、女中さんと一緒に丸亀にやってきて、私の家から 100mほどのところに借家住まいをしておりました。私の父親は当時 10 歳くらいだったので、ドイツ人女性が家の前を歩くのをよく見ていたそうです。以下をご覧ください。ベルリーナーがそのとき女中をしていた岩崎よしさんに宛てて、日本語で書いたハガキです。文法的に少し間違っているところもありますが、それが却って魅力的で、実に感動的な素晴らしい文章だと思います。

ベルリーナーから、東京に住むかつての女中・岩崎よし子宛

・・・いただきまして申されない程お喜び申しました。心からお禮を申し上げます。お菓子は實に旨しくて、此の前の五ヶ年の間に其のお菓子程旨しい物をお食べした事が一ッペンも有りません。よし子様は甚だ上手ですねー。私もずっと前からよし子様に何かものを差し上げるのでしたが實には解放が明日ですか何時ですかと思って居る間、此の前の四、五年を費した者ですから、送るよりも持って来る方が好いと思って、つい今迄御無沙汰を致しました。妻は今獨乙に居て、手紙毎に「よし子様によろしく」と書いてありますよ。先はお禮かたがたに御通知まで。お身をお大切に・・・

＊悲劇

極めて悲劇的な事件も起こっています。Siegfried von Saldern という俘虜になった時点で３５歳くらいの大尉がいました。ご存じのように、ドイツ人でファーストネームとファミリーネームの間に前置詞 von が付く人は、Herbert von Karajan などの場合もそうですが、貴族です。ザルデルンは男爵でした。しかも、彼の妻イルマは当時の海軍大臣 Eduard von Capelle の娘でした。福岡収容所に収容され、夫人も福岡市内に住んでおりましたが、1917 年 2 月 25 日の夜、強盗が侵入しまして夫人を刺し殺しました。それを知ったザルデルンは絶望のあまりに、4 日後に収容所内で自殺してしまいました。

死後、海軍大臣カペレ大将宛の遺書が残されていました。資料⑨を読んでみたいと思います。

この遺書は当時日本中の涙を誘ったと言われています。なお、犯人は小倉でパン職人として住み込みで働いていた田中という人物あるということがわかり、事件から二週間後に逮捕され、後日、死刑

となったといいます。

この事件は小説の題材にもなっています。高松市の男木島出身の作家西村ぼう望の『暗い連動』（１９８３年１１月に毎日新聞社）という小説です。少し猟奇的に描かれていて、私の好みではありませんでしたが。

＊高木大尉について

悲劇と言えば、我が丸亀出身の高木繁大尉も悲劇の主人公と言えるかもしれません。高木大尉は太っ腹で、俘虜達のウケも大変良かったようで、板東の収容所新聞『バラッケ』には、回数で言うと、松江所長の倍ほど登場しているそうです。結構短気な面もあったようで、俘虜を殴ったりしたりしていたとの情報も残されています。しかしそれでも俘虜たちから慕われていた、ということは、恐らく何処かに不思議な魅力があったのだと思われます。

ご存じの通り、高木大尉は特に語学に秀でていて、７ヶ国語ができたと言います。ドイツ語、ロシア語、中国語を使って仕事をしていますから、これら３ヶ国語ができたのは間違いないと思いますが、それ以外に恐らく、英語、フランス語ができたでしょうが、これら以外の残り２ヶ国語はどれだか分かりません。

ともかく外国語にやたらと強かったようです。映画の中では、目下、朝ドラで「かもかのおっちゃん」をやっている國村隼が、非常に上手なドイツ語を喋っていました。２週間しか練習しなかったそうですが、私よりずっと上手かったので、ちょっとショックでした。

さて、高木繁は俘虜たちがドイツに帰国した約１０年後に、中佐で退役します。退役後は兵庫県の県庁などに一時務めますが、1935 年に満州のハルピンに渡りました。そこで外資系の百貨店勤務しますが、それはある種の隠れ蓑であって、日中ソ間の情報戦に従事したと見られます。つまり民間人でありながら、軍の特務機関に席を置いていました。そのため、終戦後、ソ連軍によってシベリアに抑留され、ソ連で病没しました。

あれほどドイツ兵俘虜たちを大事にした彼が、語学に秀でていたために、スパイとして働く羽目になり、捕虜の身となり、恐らくはシベリアの相当厳しい環境の中で病に倒れて死んでいったと想像されます。運命の悪戯のようなものを感じます。

＊ほろ苦い話

ほろ苦い話もあります。少々長いですが、読んでいただければ、酷かった食糧事情などが理解できます。可愛がっていた犬を食べた、そしてそれが美味しかったという悲しい話も出ています。また後半を読めば、敗戦のドイツに帰国した兵士を待っていたものが、必ずしも彼等が収容所で恋い焦がれていた故郷ではなかった、という事実にペーソスが感じ取れるかと思います。

クリスティアン・フォーゲルフェンガー（習志野収容所）の日記より抜粋

[誕生日]

１９１６年4月１１日

今日は私の誕生日なので、我が戦友ハーゲンが特別な食事を用意して驚かせてくれた。普段の昼食はますます悪くなっていくばかりだというのに。彼はほかの戦友たち、ブレスラウ出身のグレニッツ、デュッセルドルフのエレ、ケーニッヒスベルクのペッヒブレンナー、ゾーリンゲンのクライナーブュッシュカンプも、このお祝いの焼肉料理に招待した。かれらは贈り物として、２０リットルのビール（子豚ちゃん）を持ってきた。大豚ちゃんというのは３０リットルの樽のことだ。それは、実に素晴らしいお祝いのごちそうだった。小さなウサギの骨をやろうとして、私は我々の愛犬がいないことに気が付いた。夜になって、焼肉にしたのはイエウサギではなく、我々の愛犬シュトロルヒだったことが明らかになった。最近の食糧事情の悪さによって、これ以上飼うことができなくなっていたのだった。それにも関わらず、それは我々にとってとても美味かった。

[帰国]

１９２０年2月２４日に、我々はヴィルヘルムスハーフェン港外の錨地に到着し、ここで一晩を　明

かさなければならなかった。・・・・・次の日、私は日本人乗組員の一部と一緒に上陸し、海員バザールへ行って彼らが目立つものをやたらと買い漁るのに付き合った。なぜならば、１円に対して４ライヒスマルクももらえたので、彼らにとってはすべてが安かったからだ。衣服の補充として、全員がウールの毛布から作られた冬用コートと帽子を受け取った。私は両親に電報を送り、翌日にはデュッセルドルフに着くはずだと知らせた。・・・・・父は、次の列車を待つために、彼の兄弟と一緒にコーヒーを飲みながら待合室に座っていた。ところが、この列車は、８時少し前にはもう到着してしまったので、私は父やおじと会うことはなく、市電に行ってオーバーカッセルへ向った。・・・・・偶然ここで私は、母の兄弟であるペーターおじに出会った。言葉をかけた私に彼は尋ねた、「いったいあんたは誰かね？」。私だと分かったとき、彼の質問はこうだった、「やぁ、坊主。いったいどこから帰ってきたんだ？」。それから彼は私を引っ張って、両親の家に向った。家の手前１００メートルで月桂樹の木を示して、「あそこがおまえたちの家だよ」と教えてくれた。父はその時まだ、市内で私を待っていた。母は私を迎えいれながら「まぁ、これが本当に、うちの息子なのかい？」と尋ねた。私が最後に両親の許で過ごしたのは、１９１３年のクリスマスだった。夜には盛大に再会の祝宴が開かれ、私の名づけ親まで、燕尾服にシルクハットを被ってやって来てくれた。私は郷里を離れている間、デュッセルドルフ方言はほとんど話さず、長年ずっとハンブルク方言ばかり使っていたため、この時もこの方言で喋ったので、なかなか自分が言おうとしていることを理解してもらえなかった。私にとっては、すべてがよそよそしくなってしまっていた。

さて、そろそろ時間のようですので、これで終わりにしたいと思います。

講演を引き受けるにあたり、中村会長さんから、雑学的なもので大いに結構と仰っていただいたものですから、それに甘えてしまって、今日は余談に継ぐ余談、脱線に継ぐ脱線でまとまりがなく、随分聞き苦しかったと思います。それにもかかわらずご静聴いただき、ありがとうございました。

（注：　講演原稿作成にあたり、様々な文献・ＨＰを参考にいたしましたが、筆者自身が管理人の一人である「チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会」のＨＰから特に多く引用いたしました。http://homepage3.nifty.com/akagaki/　とりわけ、高知大学の瀬戸武彦先生の俘虜名簿を多用いたしました。画像は鳴門市ドイツ館、「チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会」、その他極めて多くのＨＰの恩恵を被りました。また、ドイツ館の田村一郎先生からは第九初演に関して、「高橋スタンプ」の高橋健次郎氏からは青島戦に関して、「丸亀ドイツ兵俘虜研究会」の松本周滋氏からは高松市の昔の状況などに関して、それぞれ貴重な情報をいただきました。お礼申し上げます。その他、一々お名前は挙げませんが、色々お世話になった方々に、この場で深くお礼申し上げます。なお、下線強調はすべて引用者によるものです。）

【資料１】　ドイツ兵俘虜をめぐる略年表

（この年表は瀬戸武彦先生（高知大学教授）作成のものから小阪が抜粋いたしました。）

1897 年（明治 30 年）

11 月 1 日　山東省曹州府鉅野県の張家荘で、ドイツ人宣教師二名殺害される。

11 月 14 日　ドイツ東アジア艦隊の艦船三隻が青島沖に現れ、青島を無血占領する。（当時の青島は、戸数約 400 の漁村で、清国守備兵は約 2000 名といわれる。）

1898 年（明治 31 年）

3 月 6 日　独清条約締結

1904 年（明治 37 年）

6 月 11 日　山東鉄道の開通式が執り行われる。

1912 年（明治 45 年、大正元年）

1 月 1 日　中華民国成立する。

1914 年（大正 3 年）

6月28日　オーストリア帝国皇太子フランツ・フェルディナント夫妻、ボスニアでセルビアの一青年によって暗殺され、

7月28日　第一次世界大戦勃発する。

8月23日　日独国交断絶し、ドイツに宣戦布告する。

9月2日　日本軍、山東半島黄海側の港町龍口に上陸する。

10月6日　久留米俘虜収容所開設される。

11月7日　マイアー=ヴァルデック総督、日本軍に降伏して青島を明け渡す。

11月11日　東京、名古屋、大阪、姫路、丸亀、松山、福岡、熊本に俘虜収容所開設される。青島近郊労山湾の沙子口より、俘虜の日本への移送が始まる

12月3日　静岡、徳島、大分に俘虜収容所開設される。

12月　12月末までに、青島から約4400名の独軍俘虜（ドイツ及びオーストリア=ハンガリーの将兵）が日本に移送され、12ヶ所の収容所に収容される。その後も俘虜移送があり、青島からの移送俘虜数は4688名となる。その他南洋群島等からの俘虜を合わせて、最終的には4697名が俘虜として収容される。

1915年（大正4年）

4月　徳島俘虜収容所において、俘虜による新聞『徳島新報』（週刊）第1号が発行される

1916年（大正5年）

7月19日　松山俘虜収容所で、俘虜による新聞『陣営の火』（週刊）第1号が発行される（1917年7月発行停止になる）。

1917年（大正6年）

4月9日　徳島、松山、丸亀の各収容所閉鎖され、板東俘虜収容所開設される。

9月30日　板東俘虜収容所で俘虜による新聞『ディ・バラッケ』（週刊）第1号発行される（最終巻は1919年9月号）。

1918年（大正7年）

6月1日　板東俘虜収容所内でH.ハンゼン指揮により、ベートーヴェンの『第九』が演奏される。

秋　流行性感冒（スペイン風邪）が世界中で猛威を振るい始める（翌年の春まで）。

11月11日　休戦条約締結される。

1919年（大正8年）

6月28日　ヴェルサイユ講和条約締結により、青島のドイツ国有財産は、日本に譲渡されることになる。

12月3日　久留米高等女学校講堂で女学生達を聴衆として、久留米収容所俘虜によるベートーヴェン『第九』の第2、第3楽章が演奏される。

12月25日　この日より翌年の1月28日にかけて俘虜の本国送還が行われる。

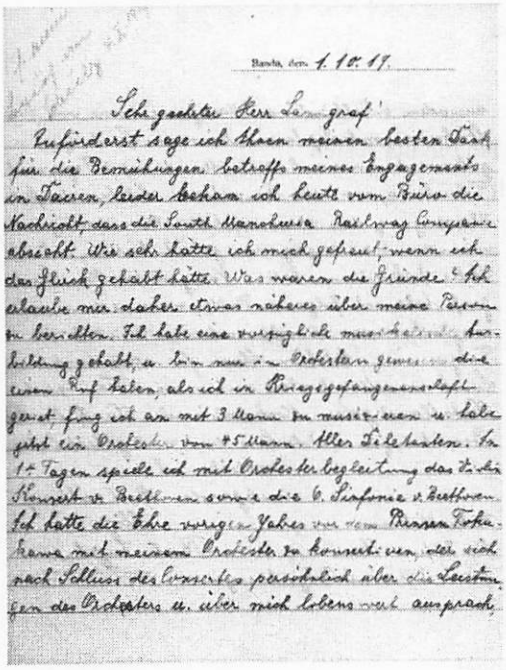
1920年（大正9年）

1月10日　ヴェルサイユ条約発効する。

4月1日　習志野、名古屋、青野原、似島、板東、久留米の各俘虜収容所閉鎖される。

ドイツ人俘虜収容所
（数字の改称は1920年まで存続した）

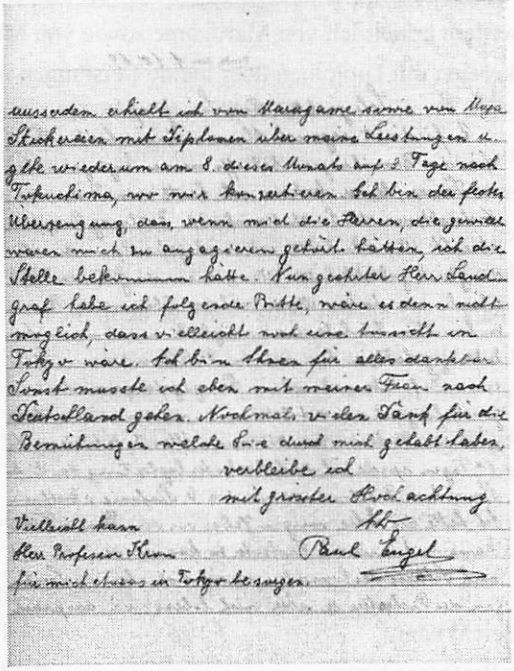
【資料２】　　エンゲルの手紙



Bando, den 1. 10. 19.

Sehr geehrter Herr Landgraf!

Zuförderst sage ich Ihnen meinen besten Dank für die Bemühungen betreffs meines Engagements in Dairen, leider bekam ich heute vom Büro die Nachricht, dass die South Manchuria Railway Companie absieht. Wie sehr hätte ich mich gefreut, wenn ich das Glück gehabt hätte. Was waren die Gründe? Ich erlaube mir daher etwas näheres über meine Person zu berichten. Ich habe eine vorzügliche musikalische Ausbildung gehabt, u. bin nur in Orchestern gewesen, die einen Ruf haben, als ich in Kriegsgefangenschaft geriet, fing ich an mit 3 Mann zu musizieren u. habe jetzt ein Orchester von 45 Mann. Alles Diletanten. In 14 Tagen spiele ich mit Orchesterbegleitung das Violin Konzert v. Beethoven sowie die 6. Sinfonie v. Beethoven. Ich hatte die Ehre vorigen Jahres vor dem Prinzen Tokukawa mit meinem Orchester zu konzertieren, der sich nach Schluss des Conzertes persönlich über die Leistungen des Orchesters u. über mich lobend aussprach,



ausserdem erhielt ich vom Marugame und vom Mega Stadtverein mit Diplomen über meine Leistungen u. gilt wiederum am 8. dieses Monats auf 3 Tage nach Tokushima, wo mir konzertieren. Ich bin der festen Überzeugung, dass, wenn mich die Herren, die genannt waren nicht so angezogen getäuscht hätten, ich die Stelle bekommen hätte. Nun geehrter Herr Landgraf habe ich folgende Bitte, wäre es denn nicht möglich, dass vielleicht noch eine Chance in Tokyo wäre. Ich bin Ihnen für alles dankbar. Sonst musste ich aber mit meiner Frau nach Seitoellland gehen. Nochmals vielen Dank für die Bemühungen welche Sie durch mich gehabt haben,

verbleibe ich

mit grosser Hochachtung

Hochgeehrter Herr Landgraf

Vielleicht kann Ihr Professor Ihnen für mich etwas in Tokyo besorgen.

Ihr

Paul Engel

封筒の宛名

Herrn
Landgraf
Akasaka Omote-cho, san-cho-me
　　Tokyo, Japan

書簡文面

Bando, den 1.10.19.

　　Sehr geehrter Herr Landgraf!

Zufürderst (注：普通 Zuvörderst, あるいは Zuförderst と綴る) sage ich Ihnen meinen besten Dank für die Bemühungen betriffs meines Angagements（注：Engagements）in Dairen, leider bekam ich heute vom Büro die Nachricht, dass die South Manchuria Railway Companie absieht. Wie sehr hätte ich mich gefreut, wenn ich das Glück gehabt hätte. Was waren die Gründe? Ich erlaube mir daher etwas näheres über meine Person zu berichten. Ich habe eine vorzügliche musikalische Ausbildung gehabt, u. bin nur in Orchestern gewesen, die einen Ruf haben; als ich in Kriegsgefangenschaft geriet, fing ich an mit 3 Mann zu musizieren u. habe jetzt ein Orchester von 45 Mann. Alles Diletanten. In 14 Tagen spiele ich mit Orchesterbegleitung das Violin Konzert v. Beethoven sowie die 6. Sinfonie v. Beethoven. Ich hatte die Ehre vorigen Jahres vor dem Prinzen Tokukawa （注：Tokugawa） mit meinem Orchester zu konzertieren, der sich nach Schluss des Conzertes persöhnlich über die Leistun-

gen des Orchesters u. über mich lobenswert ansprach（注：aussprach），
ausserdem erhielt ich von Marugame sowie von Muya
Stickereien mit Diplomen über meine Leistungen u.
gehe wiederum am 8. dieses Monats auf 3 Tage nach
Tokuchima (注：Tokushima) , wo wir konzertieren. Ich bin der festen
Überzeugung, dass, wenn mich die Herren, die gewillt
waren mich zu angagieren gehört hätten, ich die
Stelle bekommen hätte. Nun geehrter Herr Land-
graf habe ich folgende Bitte, wäre es denn nicht
möglich, dass vielleicht noch eine Aussicht in
Tokyo wäre. Ich bin Ihnen für alles dankbar.
Sonst musste ich eben mit meiner Frau nach
Deutschland gehen. Nochmals vielen Dank für die
Bemühungen welche Sie durch mich gehabt haben,

verbleibe ich
mit grösster Hochachtung

Vielleicht kann　　Ihr
Herr Professor Kron　　Paul Engel
für mich etwas in Tokyo besorgen.

封筒の宛名
日本国　東京　赤坂表町３丁目
ラントグラーフ様

Paul Engel より Landgraf 宛の書簡

板東にて、1919 年 10 月 1 日

恭敬　ラントグラーフ様

まず、大連での私の雇用の件に関してご尽力いただいたことに、衷心より感謝申し上げます。残念ながら本日、関係事務所より、南満州鉄道会社が私の採用を見合わせる旨の知らせを受け取りました。もし採用されることになっていたとすれば、どんなに嬉しく思ったことでしょう。不採用の理由は何だったのだろうか。そのような疑問を抱いておりますので、私は敢えて、私自身について少し詳しく報告いたしたく存じます。私は優れた音楽教育を受け、名のあるオーケストラでのみ音楽活動をして参りました。俘虜生活が始まり、最初は３名で活動を始めましたが、現在は４５名の楽団員を抱えております。全員が素人です。２週間後に私は、オーケストラをバックにベートーヴェンのヴァイオリンコンチェルトと、ベートーヴェンの第六交響曲を演奏することになっております。去年私は徳川公の前で、私のオーケストラと一緒に協演いたしましたが、その演奏の後、彼が私に個人的に話しかけてくれまして、オーケストラと私の演奏を褒めてくださいました。更に私は丸亀と撫養(むや)から、私の業績に関して、感謝の言葉を縫った刺繍をいただいておりますし、また今月の８日には３日間の予定で再度徳島に出掛け、そこでコンサートを開くことになっております。私は確信しております――私を採用する気でいた人たちが、もし私の演奏を聴いてくださっていたならば、私を雇ってくれたであろうことを。ところで、ラントグラーフ様、ひょっとして東京で職を得る可能性はございませんでしょうか。この件につきまして、再度ご尽力いただければ、非常に有難く存じます。もしそれが不可能であれば、私は妻と一緒にドイツに帰らなければならないことになります。私のためにお骨折りいただきましたことに対して、最後にもう一度心より感謝申し上げます。

頓首

パウル・エンゲル

ひょっとするとクローン教授に、東京での私の職について何かお世話いただけるのではないでしょうか

訳者注：

手紙の受取人ラントグラーフは、大沼氏の教示によれば、「多分、ティッセンクルップ（一大製鉄コンツェルン）の日本代表」の Wilhelm Landgraf である可能性が高いとのこと。以下のＨＰに彼に関する言及がある。

http://www.thyssenkrupp.com/de/presse/japan_geschichte.html

"Nach dem Ersten Weltkrieg werden die Wirtschaftsbeziehungen zügig wieder aufgenommen. 1921 eröffnet Wilhelm Landgraf, der die Interessen der Krupp-Werke vertritt, ein Büro in Tokio."

編集者の訳：「第一次世界大戦後に（日本との）経済関係は直ちに再開された。1921 年にクルップの日本代表ヴィルヘルム・ラントグラーフは東京にオフィスを開設した。」

以下は大沼氏のコメント。「第一次世界大戦中の日本にいたのか、あるいは戦後すぐ日本に渡来して 1921 年に支店を開いて代表になったのではないでしょうか。エンゲルの手紙は 1919 年 10 月ですからその時すでにランドグラーフ氏は赤坂に居住していたことになります。」

また、「クローン教授」については以下のＨＰに言及されている上野音楽学校教師「グスターヴ・クローン教授」ではないかと推察される。この記事によればクローンは、一九一八年十月二十七日南葵楽堂の開堂式において、東京音楽学校職員生徒とこれに海軍軍楽隊が加わった混成管絃楽団およそ八十名よりなるオーケストラの指揮をしている。

http://www.chohoji.or.jp/tokugawa/raitei_gakudou.htm

またクローンは「芥川龍之介の聞いた音楽会」という以下のホームページにも登場しています。

http://home.p05.itscom.net/akioka/BunshoAkutagawa.htm

以下、上記ＨＰよりの引用：

翌十一月も、芥川は西洋人アーティストの演奏会に積極的に出かけている。まず十一月二十七日には、帝国劇場でおこなわれた東京フィルハーモニー会第十二回演奏会に出かけた。この日の演奏会は、「閑院宮同妃両殿下には姫宮殿下御同伴にて台臨あり聴衆一同の敬礼裡に貴賓席に御着席」（『読売新聞』同年十一月二十八日）とあるように格式ばった演奏会であり、東京音楽学校にユンケルの後任として着任したクローン Gustav Kron（ヴァイオリン・指揮、一八七四～？）がオーケストラを指揮してヴァーグナーの《ローエングリン第三幕への前奏曲》を演奏したほか、クローンのヴァイオリン独奏も行なわれた。芥川はこのクローンのヴァイオリン独奏が気に入ったようで、井川恭あての十二月三日の書簡に「クローンのバツハが一番よかつた」と記している。

ドイツ訪問記（2008　Sommer）

大坂　靖彦

去る6月28日（土）より7月13日（日）まで約2週間にわたりウイーンとドイツ各地を訪問して参りましたのでご報告申し上げます。
今回のドイツ訪問の目的は四つありました。

1）ドイツ（ハンブルク）における第1回日本語スピーチコンテスト及び「青年の主張・私の人生設計」作文コンテストのお知らせとご協力のお願い
2）ウイーンでのサッカー　ユーロ2008（ドイツースペイン）決勝戦観戦
3）ドイツワイナリーでのワインのテイスティング
4）ドイツ松下電器時代のOBによるドイツでの同窓会

ウイーンのエルンスト・ハッペルスタジアムで開催されたサッカー　ユーロ2008の決勝戦は、多くの方が観戦されたことと思いますがスピード、技、チームワークのどれをとってもスペインが素晴らしい力を発揮しました。フィールドの前列から5番目と言う最高の席での観戦。会場のサポーターの熱気の渦に身体中が包まれるという素晴らしい感動を味わいました。結果はご存知の通り残念ながらドイツの力及ばずとなってしましました。王宮での前夜祭はじめ、決勝戦翌日市庁舎でのレセプションには世界各国の家電小売業の TOP グループが集まり華やかな交流の場となりました。

ベルリンではベルリン自由大学を訪問しました。5年ほど前にベルリン自由大学で講義をさせていただいた時の先生とお会いでき旧交を温めました。ベルリン日独センター、超党派でつくる独日友好議員連盟の方々とお会いし、ドイツにおける第1回日本語スピーチコンテストの説明や「青年の主張・私の人生設計」作文コンテストについて説明をさせていただきました。ドイツや日本の公的機関が推進すべき大事な日独交流活動を具体的に実践しようとしている企画にみなさんは大歓迎で、積極的なご支援を賜ることができました。予想以上の大反響に私自身も驚いている次第です。

ハンブルグは第1回日本語スピーチコンテストのメイン会場を予定しており、会場や開催日や運営についてハンブルグ総領事館の成宮総領事から素晴らしいアドバイスやご支援のお言葉をいただき感激いたしました。来年が大阪・ハンブルグ友好都市 20 周年で、いろいろな企画やイベントが盛りたくさん準備されており、会場その他の事情が許せば来年5月23日（土）に開催いたしたいと思います。今年10月25日（土）に予定されている日本での第8回ドイツ語スピーチコンテスト（大阪本町：大阪創造産業館）が大阪市の外郭団体である大阪・ハンブルグ友好都市協会との共催で開催という関係もあり、ハンブルグ市文化庁や政府官房の方々とお会いできました。大阪・ハンブルグ友好都市協会との協力関係を更に深めて参りたいと思います。又、ハンブルグ大学や日本語研究会の関係の方々とも親しく懇談いたしました。

香川日独協会と姉妹提携をしている独日協会ボンでは新旧の会長にお会いできました。新会長の Dieter Born さんは独日相互理解を深める雑誌「Japan　magazin」を出版するなど、ドイツ全土での巾の広い日独交流活動をされておられます。特に日独ホームスティ連合には大変深い興味を示されて、非営利株式会社ビッグ・エス　インターナショナルの社会貢献活動の柱の一つである日独ホームスティ連合の今後の活動に大きな期待が寄せられました。
また、フランクフルト　アム　マイン独日協会　会長フォルカー・ゲンプトさん、副会長の堤さん、ケルン独日協会会長カール　ハインツ　マイトご夫妻にもご協力をお願いしました。

非営利株式会社ビッグ・エス　インターナショナルの会社案内に推薦のお言葉をいただきました独日協会連合会のルプレヒト・フォンドラン会長からは大変温かいおもてなしをうけました。日本滞在のご経験もあり勲2等という名誉ある勲章を受章された方ですが、大変気さくにお話をすることができました。

コブレンツでは古城協会会長のザイン・ヴィットゲンシュタイン・ザイン侯爵にお会いすることができました。亡くなったお嬢様の日記がベストセラーになったのを記念して、ドイツの青少年の善行を表彰する青少年育英会を組織されておられます。私のささやかな計画のひとつである「青年の主張・私の人生設計」作文コンテストにも大変興味を示されました。

そして、私が 40 年前に学生時代にヨーロッパをヒッチハイクでヨーロッパを旅したときに 3ヶ月間もお世話になったワイン農家の皆さんとの旧交を温めました。私が上智大学を卒業して、社会人としての第一歩を踏み出したのが松下電器でしたが、入社後間もなく海外研修生として派遣されたのがハンブルグで、NBSE という会社の初代所長の佐久間さんとＯＢのメンバーと共にワイナリーを訪れました。このお世話になったワイナリーの極上のワインを毎年輸入してきました。今回も各ワイナリーでワインのテイスティングをし、選りすぐったワインを契約してまいりました。そして広大なワイン畑を花電車で回り、ワインとソーセージに舌鼓をうちながら、ラインのとうとうと流れる素晴らしい絶景にみとれながら、人生の出会いと旅のご縁に深く感謝をいたしました。この旅を通じて、多くの人とのご縁がうまれ、ドイツ人、日本人を問わず多くの人が日独交流のために汗を流していることを知ることができました。ささやかではありますが、第8回ドイツ語スピーチコンテストや、第1回日本語スピーチコンテスト、「青年の主張・私の人生設計」作文コンテストや日独ホームスティ連合等の社会貢献活動を通じ日独交流の輪が広がりますことを願っております。

（非営利株式会社ビッグ・エス　インターナショナル ﾌｧｳﾝﾀﾞｰ）

非営利株式会社 ビッグ・エス インターナショナル
BSI Non-Profit-Unternehmen BIG-S International (NPC)

ﾌｧｳﾝﾀﾞｰ　大坂　靖彦
代表取締役　大坂　陽子
●ｵﾌｲｽ・ドイツの館
〒760-0013　香川県高松市扇町 2-6-5
Tel:087-823-2626　Fax:087-823-2623
HP:http//www.bigs-i.com　PCmail:J-D@bigs-i.com
●自宅
〒760-0017　香川県高松市番町 4-2-19
Tel:087-863-6888　Fax:087-887-7919
PCmail:J-D.osaka@bigs-i.com
携帯電話:090-2898-1989
携帯 mail:BSI-osakaya@softbank.ne.jp

Gründer　Yasuhiko Osaka
Präsidentin　Yoko Osaka
●Büro・Deutsche Hütte
2-6-5Ogimachi Takamatsu-city Kagawa Japan 760-0013
Tel:+81(0)87-823-2626　Fax:+81(0)87-823-2623
HP:http//www.bigs-i.com　PCmail:J-D@bigs-i.com
●Privat
4-2-19Bancho Takamatsu-city Kagawa Japan 760-0017
Tel:+81(0)87-863-6888　Fax:+81(0)87-887-7919
PCmail:J-D.osaka@bigs-i.com
Handy-Phon:+81(0)90-2898-1989
Handy-mail: BSI-osakaya@softbank.ne.jp

2007年5月15日に第5回目となる100万円の募金を贈呈。
ドイツの新聞でその様子が掲載されました。

Honeymoon auf Japanisch: Besuch des Friedensdorf

Die Jung-Eheleute Osaka aus Kagawa (Japan) besuchten jetzt für einige Stunden das Friedensdorf. Besucher aus Japan gibt es regelmäßig. Bis dahin war der Besuch also nichts Besonderes. Der von dem Ehepaar Osaka aber schon, denn die beiden sympathischen jungen Leute waren erst seit genau einer Woche verheiratet.
Nun ist es ja bei den meisten frisch getrauten Paaren üblich, auf eine Hochzeitsreise zu gehen, wenn man sich das finanziell leisten kann und dabei denkt man normalerweise an Sonne, Strand und Meer. Die Eheleute Osaka aber planten langfristig eine ganz besondere Reise, die sie zwar um die Welt führt, aber der erste Stopp führte sie ins Friedensdorf nach Dinslaken.

Beide waren völlig begeistert von den Kindern im „Dorf" und von ihrer Lebensfreude, die sie trotz ihrer Verletzungen, Krankheiten und Behinderungen haben. Der Vater vom Bräutigam, Naoto Osaka, besucht bereits seit dem November 2001 alljährlich das Friedensdorf, um eine mittlerweile traditionelle Spende in Höhe von 1 Million Yen - das sind circa 6.000 Euro - zu übergeben. Das Geld sammeln Herr Osaka Senior und Junior von den Kunden ihrer japanischen Firma „Big-S". In diesem Jahr übergaben die frisch getrauten Eheleute diese Spende bei ihrem Honeymoon-Besuch jetzt anstelle des Vaters an Friedensdorf-Mitarbeiter Wolfgang Mertens.

非営利株式会社ビッグ・エス インターナショナル

『第７回全国ドイツ語スピーチコンテスト』ニュースリリース

非営利株式会社ビッグ・エス　インターナショナル主催による『第７回全国ドイツ語スピーチコンテスト』が平成19年10月12日（金）にドイツ連邦共和国大使館（東京都港区）にて開催されました。会場となったドイツ大使館に招待された人は132名。審査委員長にドイツ大使館首席公使　Dr.ベルント・フィッシャー氏、審査委員にはドイツ観光局局長 ペーター・ブルーメンシュテンゲル氏、ウインクレル商会株式会社 代表取締役 ヘルベルト・ファイド氏、独日文化交流育英会副会長 亀山剛生氏、ドイツ文化センター 語学部長 ユルゲン・レンツコ氏、ルフトハンザドイツ航空会社 エクゼクティブアシスタント ピラティー慶子氏、日本カールデュイスベルグ協会会長 Dr.ミヒャエル・ポートフ氏、在日ドイツ商工会議所副専務理事 マークゥス・シュールマン氏、上智大学教授 菅野カーリン氏、東京横浜独逸学園 学園長 Dr.ミヒャエル・シェフチック氏、ハンブルグ大学 日本語講師 山守雄氏ら11名の審査員をお迎えし、盛大に行われました。

コンテストには日本全国東北から九州まで30名の応募があり、テープ・CD・MD審査によるプレコンテストを勝ち抜いた13名の本選出場者が、ドイツへの熱い思いをスピーチに込めて、日頃の学習の成果を競い合いました。出場者の中には、手作りの紙芝居やちょんまげのカツラなどの小道具を用い発表する人や、衣装をまとい身振り手振りを交え力強く熱演する人、またBGMにあわせて自作原稿を表情豊かに発表する人など、オリジナリティー溢れる発表が次々なされ、いずれ劣らぬスピーチで素晴らしいコンテストになりました。また、ソプラノ歌手の坂本真由美さんがシューベルトの「野バラ」やシューマンの「愛の歌」など素晴らしい独唱を披露しました。

審査の結果、最優秀賞は「百聞は一見にしかず」を発表した加藤諒さん（東京都）と、「ビールの代わりにスポーツ、でもどうか程ほどに」の題名でビールばかり飲んでいると思っていたドイツ人が実はスポーツが大好きでビックリしたことを発表した今泉詠吉さん（東京都）の２名が受賞しました。加藤さんは自分の学んでいるドイツ語学習に刺激をあたえ、ドイツ語を試すチャンスと思い参加したということで、これからの経済学の研究にはドイツ語が助けになるためこれからもしっかりドイツ語を学んでいきたいと話していました。なお、最優秀賞の２名には、ルフトハンザドイツ航空会社より副賞として「ドイツへの往復航空券」がそれぞれに贈られました。

また、優秀賞には２名が選ばれ、ドイツ文化センターより副賞として「日本国内のゲーテ・インスティトゥートドイツ語講座１学期分の権利」が、優良賞の１名にはウインクレル商会株式会社より副賞として「ドイツ製マウンテンバイク」が、努力賞の２名には、財団法人日独協会より「CD-ROM付の独和辞典」がそれぞれ贈られました。

表彰式終了後、大使公邸庭園で催された懇親会はドイツ大使館ハンス　ヨアヒム・デア大使の乾杯で幕をあけ、出場者、審査員、観覧者など130名が集い、楽しい歓談のひと時となり、ドイツ語スピーチコンテストを通して、日独交流の輪が一段と深くひろがりました。

非営利株式会社ビッグ・エス　インターナショナル（香川県高高松市）は法務局に登記された法人組織で、名前が示しますように「非営利の株式会社」で、特定非営利活動法人＝NPO ではなく NPC（Non Profit Company）。日独の交流を軸として、国際交流活動、社会貢献活動、青少年育成支援活動、企業家育成支援活動などを通じて日独の交流を広め、深めることを目的としています。「ドイツ語スピーチコンテスト」（2000年に第一回大会を開催）や「ドイツ国際平和村」への募金活動（毎年100万円を贈呈し、総額500万円）等のフイランソロピー活動やドイツ青少年の日本におけるホームステイやインターンシップ（企業研修）等を行っています。ドイツ在住の若者を対象とした第1回日本語スピーチコンテストは2009年5月23日（土）にハンブルグ市の市庁舎で開催します。また、日本とドイツの青少年（日本は中学生、高校生、ドイツは13歳～18歳）を対象とした「青年の主張・私の人生設計」作文コンテスト（2009年3月20日応募締切、5月23日発表）を実施いたします。

非営利株式会社ビッグ・エス インターナショナル・大阪・ハンブルク友好都市協会

『第８回全国ドイツ語スピーチコンテスト』ニュースリリース

非営利株式会社ビッグ・エス　インターナショナル主催、大阪・ハンブルク友好都市協会共催よる『第８回全国ドイツ語スピーチコンテスト』が平成20年10月25日（土）、大阪産業創造館（大阪市中央区本町）で開催されました。審査委員長に大阪神戸ドイツ連邦共和国領事館 Dr.ゲロルト・アメルンク総領事、副委員長にルフトハンザドイツ航空会社オットーＦ．ベンツ日本支社長、審査委員に大阪ドイツ文化センターのミヒャエル　シュレーン館長、ウーヴェ　カルステン天理大学教授、八亀徳也関西大学教授、ベルンハート　ノイベルガー京都外国語大学准教授、アルミン　ラッツヴィル　ミカエル・ヴァイニッヒ・ジャパン㈱社長、シュテファン　キシュカ　テュフラインラントジャパン㈱最高業務責任者代理、ヘルベルト・ファイド　ウインクレル商会㈱取締役、亀山剛生独日文化交流育英会副会長ら10名の審査員をお迎えし、盛大に行われました。

今大会には関東から九州まで31名の応募があり、この中からプレコンテストを勝ち抜いた10名の本選出場者が、ドイツへの熱い思いを込めて競い合いました。出場者の中には、手作りの紙芝居を用いて発表する人、白熊のかぶりものをして、身振り手振り力強く熱演する人などオリジナリティー溢れる発表が次々なされ、いずれ劣らぬ熱演で素晴らしいコンテストになりました。

審査の結果、最優秀賞は北澤郁子さん（獨協大学３年、埼玉県出身）と、甲藤史郎さん（獨協大学大学院、埼玉県出身）、近畿圏在住の学生におくられる大阪・ハンブルク友好都市協会長賞は北山紀明さん（ゲーテ・インスティトゥート、大阪府）が受賞しました。ルフトハンザドイツ航空会社より副賞として「ドイツへの往復航空券」が贈られました。尚、大阪･ハンブルク友好都市協会協会長受賞者はハンブルク親善大使として任命されハンブルクに派遣されます。大阪市長賞は和田恵子さん（京都産業大学４年、大阪府出身）、優秀賞には大阪ドイツ文化センターより「日本国内のゲーテ・インスティトゥートドイツ語講座１学期分の権利」、優良賞にはウインクレル商会株式会社より副賞として「ドイツ製スノーボード」、熱演賞には非営利株式会社ビッグ・エス　インターナショナルよりデジタルカメラ、熱演賞には財団法人日独協会より「CD-ROM付の独和辞典」がそれぞれ贈られました。

また、スピーチ終了後にはカルテット合唱団フォージーンズ（石橋実、細井昭宏、田中年秀、加藤三三男）によるウェルナーの「野バラ」やジルヘルの「ローレライ」など素晴らしい合唱も披露されました。表彰式終了後の懇親会は大阪ドイツ文化センターミヒャエル・シュレーン館長の乾杯で幕をあけ、出場者、審査員、観覧者が集い、お楽しみ抽選会など、楽しい日独交流の場となりました。

2008年10月28日

非営利株式会社ビッグ・エスインターナショナル　　ファウンダー　大坂　靖彦
〒760-0013 香川県高松市扇町2-6-5　TEL 087-823-2626　FAX 087-823-2623
e-mail:J-D@bigs-i.com　HP:http://www.bigs-i.com

大阪･ハンブルク友好都市協会（会長　佃　孝之）

設立目的：大阪市と自由ハンザ都市ハンブルクとの間で1989年（平成元年）5月11日に署名された友好都市提携宣言に基づき、両市の経済、科学、技術、文化、その他各分野の交流を深め、両市の発展と市民の相互理解並びに友好親善を図るとともに、日独両国の友好親善に寄与する。

主な活動：両市代表団の相互訪問。大阪市立大学とハンブルグ大学の学術交流。ハンドボールなどのスポーツ交流。ドイツ語スピーチコンテストの開催及び入賞者のハンブルクへの派遣。国際交流の夕べなど。第18回ドイツ語スピーチコンテスト入賞者の成瀬絵里さんは約4週間姉妹都市ハンブルクに滞在し、ドイツ文化センターの語学研修講座を受講しより一層のドイツ語のスキルアップに努めると共に、大阪市親善大使としてハンブルク市役所表敬訪問など充実した毎日を送られました。

ユースサミット　企業研修　　Laura Rahm（ラウム・ラウラ）さん

2007 ユースサミットでドイツ学生の６０名が８月１５日に来日。日本人学生と 2007 ユースサミットが在日ドイツ連邦共和国大使館（東京都港区）とゲーテ・インスティトゥート（東京都港区）の会場で行われ、その後日本の各地でホームステイをしながら企業研修（インターンシップ）が行われました。

研修生の一人 Laura Rahm（ラウム・ラウラ）さんを 2007 年 8 月 19 日～9 月 8 日の 21 日間受け入れ、企業研修を行ないました。

ラウラさんはドイツ国パッサウ大学で国際ビジネスと文化を勉強しており、１６才のときから日本ファンで、特に日本の建築物に興味をもっており、今回の研修先でもあった「讃州井筒屋敷」の昔ながらの日本建築に見入っていました。研修の中でも五色台にある喝破道場では、大自然の中で、朝４時に起床しての座禅を行い膳の修行を行い、自給自足の生活を送りました。この修行は厳しいのでラウラさんには無理があるかと思っていたところ彼女から「喝破道場はすばらしい体験になりました。もっと長く研修したかった…。」と笑顔で答えてくれました。

また、研修やホームステイをご協力いただいた方たちのお陰で、鳴門市ドイツ館で研修を行ったり、上板町泉谷の「技の館」にて藍染を自分で体験したり、楽器の練習から茶道までを体験、引田にあるソルトレイク引田様では釣堀でのフィッシングに挑戦。見事大物のハマチを釣り上げました。

さらにビッグ・エスインターナショナルの研修では、2007 年 10 月 12 日（金）にドイツ連邦共和国大使館で開催される「第７回　全国ドイツ語スピーチコンテスト」プレコンテストの審査員となり、ドイツ人審査員と一緒にテープ・ＣＤ・ＭＤ審査を行い 30 名の応募者の中から 13 名の出場者を決定しました。

ドイツ NRW 州　独日文化交流育英会企業研修　Klossek Michael（ｸﾛｾｯｸ・ﾐﾋｬｴﾙ）さん

2007 年度ドイツ NRW 州独日文化交流育英会来日研修生を、社団法人日本カール・デュイスベルグ協会を通じ受け入れました。

研修生は男性３名、女性４名の７名で、日本カール・デュイスベルグ協会の専務理事　坂本明美様が引率、ご出席いただきました。

徳島での研修を終えた研修生は、屋島山頂（香川県高松市）で屋島寺の観光や展望台からのかわら投げを楽しんだ後、歓迎会にて懇親を深めました。翌日は栗林公園（香川県高松市）で、日本の庭園を散策し、日本の伝統文化に触れました。又、香川日独協会の若手メンバー2 名が参加し、日独交流の輪が広がりました。その後、株式会社ビッグ・エスの運営するパソコン専門店の PC DEPOT（高松東バイパス）の見学、最新大型家電専門店のケーズデンキ高松本店の見学をしたあと、香川伝統の味であるさぬきうどんを賞味しました。研修生のクロセックさんは 9 月 30 日までホームステイをしながら企業研修を行いました。他の研修生は各々日本各地のホームステイ先へと向かいました。

クロセックさんがお世話になったホームステイ先での研修は、香川県民ホールのスタッフとして、ドイツのヴィースバーデン一団による「つばき姫」講演の準備から撤収、団員との通訳の役割を経験しました。また、五色台にある喝破道場では、禅を学ぶことと共に「月観の会」というお茶会にも参加し、日本の伝統文化を身体で体験しました。徳島県での研修では鳴門市ドイツ館の館員として 4 日間の研修を行い、鳴門市とドイツとの関係を学びました。

各ホームステイ先での研修を終えたクロセックさんは株式会社ビッグ・エスが運営するケーズデンキ高松本店で商品の荷受から商品補充、セキュリティーについての勉強、レジや契約についての研修で最新家電店を勉強し、最先端の家電業界の仕組みに驚いていました。

最終日には、大自然にめぐまれた藤川牧場（香川県塩江町）を訪れ、藤川オーナーからは、独自の酪農法について学び、臭いの全くしない牛舎、つやつやした毛並びの牛たちと触れあい、とれたての牛乳やソフトクリームをテイスティングした後、塩江温泉で研修の疲れを癒したあと東京に帰りました。

非営利株式会社ビッグ・エス インターナショナル（大坂靖彦：香川日独協会副会長）ホームステイ受入実績

ブレーメン州立ギムナジウム　2007・2008 日本研修旅行生
ケーズデンキ高松本店見学研修会

四国学院大学が毎年受け入れをしているドイツ国ブレーメン州からの研修生を受け入れ、ケーズデンキ店舗見学や人生設計塾、懇親パーティーを実施しました。

研修生は 18 才～20 才の男性 2 名、女性 11 名の合計 13 名。ブレーメンよりヴォルフガング・ベルクマン先生、野島悦子先生が引率、四国学院大学からは平井俊広先生、仁信由美子先生が出席くださいました。

研修スケジュールでは、まず株式会社ビッグ・エスが運営するケーズデンキ高松本店（2300 坪）ジャンボジェット機が 2 機入る広い店舗では、携帯電話コーナーからパソコンコーナー、大型液晶テレビや DVD レコーダーのある映像コーナーの見学。日本の冬の暖房商品であるコタツは非常に興味を持ち見入っていました。

人生設計塾では、株式会社ビッグ・エスの経営理念やこれまでの歩み、非営利株式会社ビッグ・エスインターナショナルの理念や日独交流のこれからの広がりへの構想が大坂社長から熱く語られました。特に人生設計「BIGLIFE PLAN」については、自分の人生の夢を思い描きながら、研修生は興味深く聞いていました。

その後場所を移し、懇親パーティーを開催しました。歌が好きな研修生が多く、井上陽水の「少年時代」やビートルズの「イエスタデイ」を歌い賑わいました。最後に「ムシデン」を合唱し日独交流の輪が広がりました。

2008 ドイツ NRW 州　独日文化交流育英会企業研修
Sebastian Leliveldt(ｾﾊﾞｽﾃｨｱﾝ ﾚﾘﾌｪﾙﾄ)さん

ドイツ NRW 州独日文化交流育英会の研修生の Sebastian Leliveldt（ｾﾊﾞｽﾃｨｱﾝ ﾚﾘﾌｪﾙﾄ）さんを受け入れ、ホームステイと企業研修を行ないました。

研修では非営利株式会社ビッグ・エスインターナショナルのホームページの作成を始め、株式会社ビッグ・エスの運営するケーズデンキでは使い方教室でレンジの勉強会やメーカー様のブルーレイ勉強会に参加し、「ブルーレイは未来の機会。ドイツにはまだないので興味もあり面白い。でもまだちょっと高い…。」と話し、日本の電気製品の知識を勉強しました。

また、ケーズデンキの店内改装もあり、棚の組み換えから商品展示まで行ないました。Sebastian Leliveldt（ｾﾊﾞｽﾃｨｱﾝ ﾚﾘﾌｪﾙﾄ）さんは、カメラが大好きで、一眼レフカメラの展示はプライスのつけ方から演出の仕方まで熱心に研修を受けていました。

鳴門市のドイツ館の研修では、第二次世界大戦後の日本とドイツのことを学び、あらためて日独の深い絆を感じたようです。その後、五色台の喝破道場（香川県高松市）の研修では、夜早く寝て朝は 5 時に起きての規則正しい生活を送りました。朝早くからの座禅で膳の修行、そして時給自足の生活を送り大自然を満喫しました。

また、屋島山頂や栗林公園、小豆島（香川県高松市）、祖谷渓谷（徳島県三好市）での観光を楽しみ有意義な日々を過ごしました。

非営利株式会社ビッグ・エス インターナショナル（大坂靖彦：香川日独協会副会長）ホームステイ受入実績

余はいかにしてワグネリアンとなりしか

ー運命の女神ノルンのつむぐ綱は未だ切れず、筆者とつながっているー

近藤　昌紀

・日経新聞は裏から読む

日経新聞の裏面は文化欄となっているが、その内容たるや、経済紙と呼ぶにはもったいないほど、質の高い文化情報が満載されている。その上、毎日曜日に、見開き２面をさいて、数回シリーズでテーマを決めて、世界の名画を総カラーで紹介する「美の美」欄もあり、筆者のようなエセ文化人気取り（にも至らない、どう見ても「文化ペテン師」）にとっては、恰好の情報源となっている。

さて、この日経文化欄の右肩てっぺんに、連続もののコラムがある。各界の文化人が、好みの、又は、得意のテーマをもとに、絵画を主とした、視覚で感知できる芸術作品を、作品の写真付きの１０回シリーズで紹介・解説するというもので、写真がモノクロであるのが歯がゆくなるほど、面白い解説や裏話が出るときがある。

・「歴史は繰り返す」ならぬ「王のやることは繰り返す」

その日平成２０年９月４日、私の目を引いたのは、早稲田大学講師・中野京子氏が解説者となって８月下旬から始まった、「尊大な王と悲しみの王妃十選」と銘打った、肖像画紹介シリーズの第５回目掲載分。餌食となったのは、フランス国王フランソワ１世。まずは、その全文を紹介しよう。

尊大な王と悲しみの王妃十選　　ドイツ文学者　中野　京子

▽５　クルーエ「フランソワ１世像」・・・（筆者注：原文ではモノクロ上半身写真付き）

（１５３０年ごろ、９６×７４センチ、ルーヴル美術館蔵）

巨大な鼻のフランソワ１世は、もうすぐ４０歳。若いころはスペインのカルロス１世と神聖ローマ皇帝の座を争って戦い、捕虜にされるなど苦杯を舐めたが、今や国も安定し、贅沢三昧に遊び放題。

おかげで後世、ユゴーによって「王は愉しむ」のモデルにされてしまう（この戯曲がヴェルディの傑作オペラ「リゴレット」へと発展する）。

しかし、王は女遊びばかりしていたわけではなく、本肖像画に見られるすばらしいファッション・センス（粋な縦縞！（筆者注：原画をお見せできないのが残念。このへんに注目する著者・中野京子氏の、女性ならではのセンスが光る。））から明らかなように、芸術への美意識もなかなかのものだった。フォンテーヌブロー宮殿へ多くのイタリア人画家を招聘し、そこを中心にフランス・ルネッサンスの花を咲かせたのだ（フォンテーヌブロー派の官能的な作品群はここから生まれた）。

何よりフランソワ１世の功績は、晩年のレオナルド・ダ・ヴィンチを宮廷に迎え、厚遇したことだろう。レオナルドは王の腕の中で死んだ、との伝説さえ残っている。もちろん事実ではないが、「モナ・リザ」がイタリアでなく、ルーヴル美術館にあるのは、ひとえにフランソワ１世のおかげと言えよう。ジョコンダの神秘的微笑みがフランス経済をどれほど潤し続けているかを考えれば、王の浪費も許される？

・それからちょうど３５０年後、ドイツはバイエルン王国で、１人の王が即位した。

さて、このフランソワ１世の行状記を読んでいて、そのやったことが、ちょうど３５０年後の、ドイツはバイエルン王国で即位した１人の王とそっくりではないかと頭に浮かんできたなら、あなたは

相当のヴァーグナー狂、失礼、もう少し品良く言うなら、熱烈なるヴァーグナー愛好者、いわゆるワグネリアンであろう。とにかく、上記解説を少しパロディー化すれば、このバイエルン国王と、この王を食いものにして名声を不朽のものとした、リヒャルト・ヴァーグナーという寄生虫的大作曲家の物語が出来上がる。では、さっそく、上記文章をデッドコピーした上で、パロってみよう。

悲しみの狂人王と尊大な寄生虫的作曲家　　パロディスト　近藤　昌紀

土産物として大人気「ルートヴィッヒ２世像」

（南ドイツのバイエルン州、特に日本人好みのロマンティク街道を旅した人ならば、現地の土産物屋に一足、足を踏みいれた途端、この人の肖像（又は、ヴァーグナーの肖像とセットになっている場合も多い）の入った土産物に埋め尽くされている店頭に唖然とされた方も多いのではないか。）

洒落た軍服に身を包んだ、すらりとした美男子ルートヴィッヒ２世は、１８６４年、１９歳で即位。宝塚歌劇で有名になった「エリーザベト」・オーストリア＝ハプスブルク帝国皇后とは近縁の親類である。即位当事のバイエルン王国は、国も安定し、贅沢三昧も可能で、幼い頃から傾倒していた大作曲家、巨大な鼻のリヒャルト・ヴァーグナーを招聘し、放蕩三昧をさせる。

おかげで後世、イタリアの、自身も貴族階級出身の映画監督、ルキーノ・ヴィスコンティによって、主従ともども、名画『ルードゥィッヒ』のモデルにされてしまう。また、森鴎外も、彼がドイツ留学・滞在中に知った、この王の死にまつわる悲劇を題材に、『うたかたの記』を上梓する。

しかし、王は女遊びには縁がなく、彼の肖像に見られるすばらしいファッション・センス（その実はナルシストであった。）は、男性に向けられたものであり、男色家として、より名を馳せた。このことから明らかなように（？）、芸術への美意識もなかなかのものだった。ドイツオペラを代表する偉大な作曲家、リヒャルト・ヴァーグナーを招聘したのみならず、彼の舞台芸術を地上に具現したかのようなノイシュヴァンシュタイン城、ヘレンキムゼー城、リンダーホーフ城を築き、ヴァーグナーの作品の理想的上演の場として、バイロイト祝祭劇場を建てさせた。ここを中心に催されるバイロイト音楽祭により、ヴァーグナーの芸術は花を咲かせたのだ（彼の最後の作品『パルジファル』は、彼の遺言により、死後も長い間、この劇場以外での上演が許されなかった）。

この状況は、今も変わらない。余りの人気に、世界で最もチケットの取りにくい劇場と言われ、毎年夏の初日には、欧州各国首脳が集い、観劇外交を展開する場ともなる。

オペラ愛好家であり、かつ、ワグネリアンとして名を馳せている小泉元首相が、２００３年８月の中欧数カ国訪欧時、訪問国のひとつ、ドイツのシュレーダー首相に頼み込んで、バイロイト音楽祭でヴァーグナーの歌劇『タンホイザー』を鑑賞したことがマスコミをにぎわしたが、このオペラ鑑賞にケチを付けた国会議員がいた。思想的な問題よりも、政府専用機を使って観劇に行くとはケシカラン、と、実に形而下学的な発想の発言であったように記憶するが、このような方々が、国会で教育や文化を論議していただけるとは・・・。いやはや、いい国である。日本という国は。文化あるいは文化人に対する敬意が、文化大国（？）を標榜するには少々不足しているのでは？

対極にある例を揚げておこう。アルゼンチン出身の作曲家、アストル・ピアソラといえば、サントリーかどこかの宣伝で、世界的チェリストのヨー・ヨー・マがその作品を演奏して、にわかに日本で有名になった作曲家だが、この人は晩年をパリで過ごしていた。

１９９０年、ピアソラは、そのパリで脳溢血に倒れる。その情報が世界を駆け巡るや否や、当事のアルゼンチン大統領は、「わが国の英雄を外国で死なすわけにはいけない」と、大統領専用機をパリに飛ばし、療養中のピアソラを母国に連れて帰る。ピアソラは何とか命脈を保ち、その２年後、ブエノスアイレスで死去する。

実は、この件の先例となったのもヴァーグナーだ。ヴァーグナーは旅先のベネチアで亡くなったが、その亡がらがイタリアでなく、バイロイトに葬られているのは、国葬扱いの特別列車でバイロイトに送られたからである。

いずれにせよ、ルートヴィッヒ２世の功績は、晩年のリヒャルト・ヴァーグナーを宮廷に迎え、厚遇したことだろう。その恩恵は、単に芸術的な面に止まらない。時代は下って、第２次大戦後の東西冷戦時代、バイロイト祝祭劇場が、位置的には、旧西ドイツの、旧東ドイツ国境に近い場所にあったおかげで、旧東側も考えたことであろう。「鉄のカーテン」を破って西に侵攻し、ここを占領したりすれば、旧西側陣営からどのような反撃を食らうか分からない。それゆえ、少なくとも欧州では、東西間の熱い戦争は起こらなかった、と、筆者は本気で考えている。

そして、ルートヴィッヒ２世の建てたノイシュヴァンシュタイン城やバイロイト祝祭劇場がドイツ経済をどれほど潤し続けているかを考えれば、王の浪費も許される？

さて、フランソワ１世の末期は、平穏であったのだろうか。少なくともルートヴィッヒ２世の末路は、平穏ではなかった。内憂外患で心神がボロボロになった、政治には不向きの夢想家王は、４０歳の若さで精神科の主治医を道連れに、謎の水死をとげた。（合掌）

・運命の女神ノルンのつむぐ綱（詳細は、リヒャルト・ヴァーグナー作曲、楽劇『ニーベルングの指輪』全４部作第３夜『神々の黄昏』冒頭部参照）**が筆者に絡まってきた。**

実は、本稿を著するに際し、まさに、不思議な運命が筆者を導いた、としか言いようのない事件が重なった。

その第１

前記、平成２０年９月４日付け日経新聞の、中野京子氏のフランソワ１世の行状に係る麗文を読んだ際、一方で、フランソワ１世とダ・ヴィンチ、一方で、ルートヴィッヒ２世とヴァーグナーという、王侯と芸術家の関わりにおいての「共通性」が、筆者の「文化ペテン師」的インスピレーションをいたく刺激し、わざわざ、スクラップしておいたこと。

その第２

くだんの、フランソワ１世の行状を滅茶苦茶に茶化した「ヴェルディの傑作オペラ「リゴレット」」が、オーストリアはバーデンの市立歌劇場の引越し公演により、高松市の県民ホール（以下、命名権取得により付けられた某企業名は、名称がやたら長くなるので、あえて記さない。）大ホールで上演された９月１２日夜の、まさにその会場で、筆者は、日独協会役員の最上英明氏とばったり出会い、「今年は、ヴァーグナー没後１２５周年に当たるので、ヴァーグナーに関する文章がどうしても欲しい」

と、思いもよらぬ依頼をいただいた。

その第３

９月４日のスクラップから、わずか１週間の後、『リゴレット』の公演会場で、原稿依頼を受ける。その瞬間、筆者の頭の中には、上記『神々の黄昏』冒頭部で、３人の運命の女神ノルンが、切れた運命の綱を手に歌う、

「Ｅｓ　ｒｉｓｓ！（切れた！）」

という声が響き渡った。

そうなのだ。この、偶然の連続性を断ち切ってはいけない。「文化ペテン師」とは言え、ヴァーグナー芸術の伝道師を自認する筆者の血が騒ぎ、使命感が体を貫いた。

ということで、重い腰どころか、腹回り１メートルを超えてしまったメタボリック体をパソコンの

前にやっとの思いで座らせ、本稿を書いている次第である。

・さて、前置きが長くなったが、本稿の標題、「余はいかにしてワグネリアンとなりしか」に戻ろう。

だいたい、この標題自体が「文化ペテン師」の面目躍如だ。内村鑑三の名著「余は如何にして基督教徒となりし乎」をもったいなくもパロディー化させていただいた。しかし、これがあながち出鱈目なパロディーでないことは、自信を持って言える。ヴァーグナーの作品には、『タンホイザー』や『パルジファル』など、キリスト教、それもカトリックの思想や伝説に根ざした歌劇・楽劇があるが、これらの作品を聴いているならば、序曲の段階で、もう、すでに法悦の境地に入ってしまう魔力がある。

中世キリスト教の聖人アウグスティヌス（３５４～４３０）は、著書『告白』の中でこう述べる。「(前略）きよらかな声とよく整った調子でうたわれるのを聞くと、歌そのものよりもむしろうたわれている内容に感動させられていることを考え、この（中略）大きな効用をあらためて認識するのです。

このようにして私は、それがひきこむ快楽への危険と、にもかかわらずそれが有している救済的効果の経験との間を動揺しています。(中略)

それにしても、うたわれている内容よりも歌そのものによって心動かされるようなことがあるとしたら、私は罰をうけるに値する罪を犯しているのだと告白します。」(山田晶訳『世界の名著』１４、中央公論社)

まことにストイックなご発言だが、このお言葉どおりに考えるなら、約１，５００年後のドイツに出現するヴァーグナーの歌劇・楽劇を予言した、としか言いようのない名言である。ワグネリアンの大半は「うたわれている内容よりも歌そのものによって心動かされ」、結果、それを聞く者は「罰をうけるに値する罪を犯している」。そして、そのようなバチ当たりな世界へ引きずり込むような名曲を世に送り出したヴァーグナーは、魔界の帝王若しくは悪魔の申し子としか言いようがない。神よ。このような魔神、若しくはヴェーヌス（＝ヴィーナス：詳細はヴァーグナーの歌劇『タンホイザー』の第１幕冒頭部をご覧あれ。）のとりことなった、哀れなワグネリアンたちを許したまえ。(念のために言っておくが、我が家は先祖代々、真言宗大覚寺派の門徒である。)

・筆者のヴァーグナー受容

筆者が、作曲者は知らないままに初めてヴァーグナーの作品を耳にしたのは、中学生のときであった。当事の音楽の先生が、給食の準備開始の合図の音楽として、歌劇『タンホイザー』」第２幕第４場の、歌合戦の場での入場行進曲を放送したのだ。幼児体験は一生身に付きまとうと言うが、筆者の場合、ヴァーグナー受容がまさにそれだった。『タンホイザー』云々など知らぬままに、「えらい、かっこええ行進曲やな」と心にしまい込んでおいたのだが、あるとき、偶然聴いたＮＨＫラジオ第一の音楽放送で、この曲がヴァーグナーのそれであることを知る。

第２の出会いはそれから間もなくのことであった。当事、家庭に爆発的に普及し始めた小型カセットレコーダー。今から考えると、テープ、録音機材ともに性能は悪く、静かな音などを録音すると、音を少しでも大きくしようものなら「ザーザー」という雨が降るような音、いわゆる「テープヒスノイズ」に泣かされた、あの１９７０年前後の代物だ。今のオーディオ機器では考えもつかない劣悪さ。それでも、オープンリールテープのバカでかい図体と、テープの取り扱いの面倒さに比べれば、雲泥の差があった。幼い子供でも、好みの音を自由に録音できる有難さを初めて知ったのが、筆者の世代であろう。

このカセットレコーダーに、ジャンルを問わず、音楽なら何でもかんでも録音して楽しんでいたある日、これもＮＨＫ第一のラジオ放送で、『タンホイザー』のアナウンスを耳にした。しめた！あの行進曲が録音できる。勇んでテープをセットし、放送を録音し始めると、聞こえてくるのは全く別の曲。それは、「行進曲」ではなく「序曲」であったのだ。

しかし、今考えると、当時、たかが中学生であった筆者の感性も捨てたものではなかった、と思える。この「序曲」のただものでない“魅力”、というよりも、まさに“魔力”に気が付いたのは、録音された曲を２回目に聴いたときだった。すごい。深い。和音が厚い。他の音楽とは全く違う。もう、やめられない。

それからというもの、約数か月、寝る前の子守唄は、このカセットレコーダーから流れ出る「タンホイザー序曲」となった。

・日本人が、老若男女、ほとんどその曲を知っているが、肝心の作曲家の名前を知らないクラシック音楽の大作曲家は誰だ？

問：では、あなたはリヒャルト・ヴァーグナーの作品を知っているか？

えっ！知らない！そんなことはない。絶対に知っている。たとえば、結婚式に行くでしょ。そこで新郎新婦のご入場。ここで演奏される行進曲が、にぎやかなのがフェリックス・メンデルスゾーン作曲の組曲『真夏の夜の夢』より「結婚行進曲」、静かな方がリヒャルト・ヴァーグナー作曲、歌劇『ローエングリン』第３幕第１場より「結婚の合唱」だ。

それでも分からないという方には「チャチャチャチャーン、チャチャチャチャーン」と景気良く始まるのがメンデルスゾーン、「パーンパーカパーン、パーンパーカパーン」と荘厳な雰囲気で、ゆっくり始まるのがヴァーグナーと、口三味線を使うと、結婚式に出た経験の少ない子供はいざ知らず、結婚式慣れした大人なら、すぐ納得する。

私の経験からすると、純白のウェディングドレスを着てしずしずと入場する場合は、ヴァーグナーが多用され、お色直しや和装できらびやかに入場というときは、メンデルスゾーンというパターンが多い。ほら、知ってたでしょ、あなたも。ヴァーグナーの作品を。

ここで、結婚業界に水をさすような裏話を言うと、本家本元の西欧の結婚式では、メンデルスゾーンの結婚行進曲は使われても、ヴァーグナーのそれは使われない。なぜか？それは、ご当地だけあって、両方の結末を知っているからだ。

メンデルスゾーンの『真夏の夜の夢』の元をたぐると、シェイクスピアの同名の戯曲に行き当たる。この作品の最後は、すったもんだの末に、複数組の男女がめでたく結婚というハッピーエンドの喜劇だが、ヴァーグナーの『ローエングリン』ときたら、結婚式をあげたのはいいが、夫から素性は問うなと言われ、固く約束をしたはずのエルザ姫が、初夜の床で、我慢できずに激しく詰問し、裏切られた夫は「ローエングリン」という名とキリスト教騎士団の騎士であるという素性を明かし、去っていく。ショックで新婦のエルザは息絶える、と、典型的破局型の悲劇である。こんな結末を知っていたら、いくらヴァーグナーの「結婚の合唱」が素晴らしくとも、縁起でもない、ご遠慮いただこうというものだ。

しかし、原曲の素晴らしさを言うなら、断然ヴァーグナーだ。原曲は、オーケストラ伴奏付きの合唱曲。本格的に聴いたら、結婚式が真実、神聖な儀式であることをいやが上にも感じさせてくれる。長い曲ではないが、曲が全曲終わる頃には、まさに法悦の境地に至る。このいいところだけをとって、結末はだんまり。再度言わしていただこう。いやはや、いい国である。日本という国は。

・作曲家ヴァーグナーは混同される。

もうひとつ、ワグネリアンを苛立たせるのは、ヨーゼフ・フランツ・ヴァーグナーの存在だ。リヒャルト・ヴァーグナーとは縁もゆかりもない、こちらのヴァーグナーは、タイケの『旧友』と並んで、ドイツ・オーストリア・マーチの双璧をなす『双頭の鷲の旗の下に』の作曲者として知られる。この曲は、小学校の運動会の行進曲に結構使われるから、情けないことには、ヴァーグナーと言えば、このマーチの作曲者とのたまう小学校の先生は多い。

ええ、そりゃ、確かにこのマーチも名曲ですよ。必聴の名曲でしょう。ゲルマニア（＝ドイツマニア）にとっては。でも、リヒャリトの方はこんなもんじゃありません。再度言わせてください。すごい。深い。和音が厚い。他の音楽とは全く違う。

・結婚式の余興のカラオケ用にお勧め。ヴァーグナーの「結婚の合唱」

自慢する訳ではないのだが、筆者は、リヒャルト・ヴァーグナーの「結婚の合唱」を原語のドイツ語で暗記している。頭の固くなってきた最近の筆者なら、かなり暗記に苦労するかもしれないが、幸いにも、若いときに、好きこそ物の上手なれで、その気になって対訳を片手にレコードをかけて覚えた。これが、後々におおいに役に立った。

例えば、結婚式の余興が盛り上がり、突然のカラオケのご指名をいただく。それではと、おもむろにMCのお姉さんに、その曲名を言う。思わず、キョトンとするお姉さん。そこで、例の口三味線で「パーンパーカパーン、パーンパーカパーン」とやるとすぐ納得する。どこの式場でも、この曲のCDは必ず置いてあるし、エレクトーンの生演奏をするようなケースでも、必ず、この曲の楽譜は持っている。

ということで、MCのお姉さんが「近藤様がお歌いいただくのは、リヒャルト・ヴァーグナー作曲、歌劇『ローエングリン』第３幕第１場より「結婚の合唱」」などと言い出そうものなら、このめでたの席で、「また、めんどげなことを」と言わんばかりの視線がこちらを向く。そこで、例の序奏が鳴り始める。ほとんどの人は、この序奏から知っているから、うざったそうだった目が、この男、いったい何を始めるつもりや、と、好奇の目に変わる。そこでおもむろに歌い出す。「Ｔｒｅｕｌｉｃｈ　ｇｅｆｕｈｒｔ　ｚｉｅｈｔ　ｄａｈｉｎ，（トロイリッヒ　ゲフュールト　チーエット　ダヒン）・・・・」

この曲は知っていても、歌詞付きであったと知る人は、まずいない。これで、サプライズ。歌詞はドイツ語で、少々間違ってもケムリに巻ける。歌詞はそんなに長くない。終われば、それなりの敬意を持った拍手。

日独協会の会員諸氏なら、多少たりとも、ドイツ語に造詣はあろうと思うから、今から覚えるなら、これに尽きる。便利であり、一押しである。

・ヴァーグナーの歌劇『タンホイザー』でもあるまいし、結婚式場で歌合戦とは！

小泉元首相が大好きなことで有名になった、ヴァーグナーの歌劇『タンホイザー』。その第２幕第４場での騎士たちの歌合戦、いわゆる「ヴァルトブルクの歌合戦」の場は、この歌劇の中でも見せ場のひとつとなっているが、このシーンが何と結婚式の場で起こった。

その日、私は新郎側の招待者の一人として座っていたのだが、披露宴の余興で、小癪にも、新婦側の職場の上司が、ベートーベンの第９交響曲の第４楽章を飾る、いわゆる「歓喜の歌」をドイツ語で歌ったのだ。筆者はこの曲もそらんじていたので、どうとも思わなかったが、それまで、ド演歌と長渕剛でつないできた新郎側は、さすがに萎縮する。

筆者も若かった。負けてはいられない。起死回生の一撃を担い、この日はたまたま、エレクトーンの生演奏付きであったので、ヴァーグナーの「結婚の合唱」の楽譜は有るかと奏者に聞くと、有るという。上記と同じ手順で勝負に出た。

さすがに、この日は相手方が「めんどげなことを」先にやっていてくれたので、うざったい目では見られない。堂々たるドイツ語曲の勝負になった。結果としては、その場は引き分け。後で聞いたら、新婦側のその上司とやらが、職場で、

「あの、ドイツ語の歌を歌った男は一体、どんな人間で、何をやっている人物なんだ？」

と、筆者の氏素性を聞いたというから、このような場では、歌は人を表すということになるのだろう。

・黄昏のワグネリアンから、若きワグネリアンへ、言上奉る。

中学時代、それとは知らずに、初めて『タンホイザー』の大行進曲を聞いて、３５年余。２０歳で、スイス・ルツェルン湖のほとりにあるトリープシェンの家、そして、バイロイト祝祭劇場、バイロイトの棲家ヴァーンフリート荘、その裏手に仲良く眠るヴァーグナーと妻・コジマの墓詣でと、夢にまで見たヴァーグナー巡礼をして、早３０年。黄昏の近付いたワグネリアンから、少壮のワグネリアンに、老婆心ながら、忠告を申し上げておく。

１．間違っても、ヴァーグナーを老後の楽しみに、などと考えないこと。

そのために、レコード全集も買った。レーザーディスク（以下ＬＤと略す。）が出れば、やっと映像が見られると、金に糸目を付けず買った。ＤＶＤが出れば、それも買った。ＤＶＤともなれば、コストは信じられないくらい安い。しかし、無念。体力が持たない。初期のオペラ群なら救いようもあるが、後期の、それも歌い手のモーションが極端に少ない『トリスタンとイゾルデ』や『指輪４部作』を、延々と、数時間座って見続けることができるか、君は？これは、もはや、体力の勝負であって、知力は二の次だ。老境に入っては無理。若者よ。若いうちに、大作は見ておけ。

２．ナマモノを見るなら、歴史にこだわらず、なるべく新しい施設で見ること。

レコード時代を長く経験した、筆者のような黄昏世代にとっては、ヴァーグナーを見ることは、すなわち、ナマモノの舞台を見ることであった。なにせ、映像ソフトがない。ＬＤが出るようになるまでは、ヴァーグナーを見るためなら、大阪あたりへ行くのは、なんでもなかった。公演回数も少なく、コストも高かったから、ヴァーグナーの舞台を見たことは、結構、ステイタスになっていた。

公演する側としても、金に糸目を付けないワグネリアンは、結構おいしいターゲットであったのだろう。映像ソフトがない時分は、それなりに客の入りが良かったのか、関西以西へも、ヴァーグナーをひっさげて、外国の歌劇場が引っ越し公演しに来ていた。私の記憶では、昭和５９年に西ドイツのハンブルク州立歌劇場が『ローエングリン』を出し物に、大阪フェスティバルホール、そして福岡まで足を伸ばしたことがある。

しかし、その後は、ＬＤによる映像攻勢、おまけにバブル時代に突入とあって、外国の名門歌劇場が、わざわざドサ回りまでしなくとも、東京に居座っていれば、客の方から金に糸目を付けずに飛んで来てくれる時代となり、外国の歌劇場が関西以西でヴァーグナーを上演したのは、昭和６２年、大阪フェスティバルホールでのバイエルン州立歌劇場の『ニュルンベルクのマイスタージンガー』が最後となった。

その代わり、国内での歌劇の上演施設は目を見張るばかりに増え、名古屋の愛知県芸術劇場、滋賀の琵琶湖ホール、そして第２国立劇場と、４面舞台の備わったホールが続々誕生。いい時代になったものだ。

しかし、ヴァーグナーの、動きが少ない長丁場の出し物（と言えば、やはり、『トリスタンとイゾルデ』や『指輪４部作』に尽きるが)、これだけは、東京の独壇場だ。

で、ここで忠告。あなたが、純粋にヴァーグナーの作品を極めたいなら、なるべく、最新の設備の整った、新しい劇場で催される、それを見ること。

逆の立場から考えよう。西欧の歴史ある歌劇場に行く。ロビーのシャンデリアに迎えられ、ひとたび場内に入れば、ロココ風の金細工。音楽マニアなら何としても出かけたい観光名所だが、これは、冗談でなく、観光名所であって、中で公演を見るなら、観光に来たと割り切って見ないと、特に、ヴァーグナーの作品のような、長時間を要し、ストーリーのややこしい作品を、気を入れて見ようとするなら、えらい目に遭う。

まず、空調。昔の建物など、そんな事などろくろく考えず、ひたすら、飾り付けにのみ金をかけた劇場が多い。長時間、締め切った状態でヴァーグナーなど上演されようものなら、酸欠状態となり、頭は朦朧、汗はたらたらの状態となる。特に、昔の寒冷気候を前提に建てられた建物が、地球温暖化の影響で、最近の夏の欧州では、４０度を超えることなど珍しくなく、天下のバイロイトでも、音楽祭中、卒倒者が続出という状態とか。

その上、字幕はない。日本での外国オペラ公演に字幕は当たり前だが、さすがに、日本語の字幕を出してくれる外国の歌劇場は未だ無いはずだ。（ウィーン国立歌劇場では、前の座席の後ろの部分に、英・独２カ国語の字幕が出る。）昔は、そのため、外国でオペラを見るともなれば、日本で対訳を買ったりして、万全の態勢を整えて、現地に飛んだものだったが、今では、国内での字幕の慣れで、油断して、手ぶらで行ったりすると、字幕なしのヴァーグナーに挑戦することになる。さて、あなたは、耐えられるかな？

さらに、最新の設備を備えた新しい劇場は、座る椅子も、人間工学的に考えられたものを使っており、長時間座っても疲れない。用心のため、幕間で、多少そこらをうろついて、運動でもすれば、何とか体は持つ。

しかし、ギンギラの装飾に彩られた名門歌劇場の椅子の正体は、人間工学などかけらも考えられていない、木の椅子だ。長時間座っていると、おしりの血の巡りが悪くなり、壊死寸前になる。バイロイトなど、慣れた人は、空気座布団や空気椅子を持って行くというが、これは決して誇張ではない。バイロイトではないにせよ、筆者も木造椅子で長時間座ると、どのような地獄が待っているか、ウィーンやブダペストの歌劇場で体験している。「指輪４部作」を見る最終日など、肉体的には拷問だ、という人もいるに違いない。

ということで、外国のオペラ劇場での観劇は、最高に楽しいことは認めるが、要領よく見ないと、一転、このような地獄が待ち受けている。

本当に、作品だけを楽しみ、理解しようとするならば、国内の最新設備の歌劇場で、人間工学的に考えられた椅子に座って、整った空調設備の新鮮な空気で、脳みそに酸素を充満させて、字幕付きで、じっくりとご覧になることを、切にお勧めする。

・黄昏のワグネリアンから、黄昏のワグネリアン仲間へ、言上奉る。

ワグネリアンは物持ちだ。レコード時代であれば、１作に数枚のレコードがセットというのは、当たり前。「指輪４部作」全曲版のレコード全集など、十数枚のレコードを相手にして、３０分ごとに裏返す。そして、対訳とにらめっこ。おそらく、ヴァーグナーだけで、何百枚のレコードをお持ちというワグネリアンも結構おいでであろう。

ＬＤが世に出て、両面で１時間余の動画・音声を、全自動で見られて、日本語字幕付きになった。

天国が来たように思われた。おそらく、この時代、１９８０年代後半のワグネリアンは、ＬＤが１タイトル出るごとに、飛びつくように、買い込んだに違いない。

ＤＶＤの時代になって、日本語字幕はもちろん、ボタンひとつで原語字幕との選択、さらに、日本語字幕を下面に、上面には、要所要所のポイントを解説した字幕まで出せるという、もう、ほとんど行き着くところまで行ってしまったというような、芸の細かい全集が出たりして、かつては、バイロイトで演ぜられている全１０演目を、場所こそ違えど、すべてナマで見た、という筆者のプライドなど、微塵に砕かれてしまった。こんなものが、高松でも手に入るようになり、旅行が億劫になる年齢も手伝って、金に糸目をつけず、ヴァーグナーと名が付けば、東京へ、外国へと飛んでいった時代が、なつかしくなりつつある。

しかし、ここで、黄昏のワグネリアン諸氏に申し上げたい。あなたの集めたコレクションは、あなた及びワグネリアンにあっては、宝の山であろうが、さて、ご家族に、これを理解してくれる方が何人いようか。このご時勢、ただでさえ核家族化が進み、奥方と二人暮らしのところ、奥方からは、お荷物扱いされる、あなたのヴァーグナー・コレクション。あなたが亡くなって、運よく、中古レコード市場にでも流してくれるような奇特な人でも居れば、まだ、救いようがある。周辺に、その価値を理解できる人が一人もいなければ、あなたの宝の山は、一夜にして不燃ゴミの山と化すことであろう。

本稿をお読みのワグネリアン諸氏よ、今こそ一致団結し、この貴重な人類の遺産の散逸を防ぐ手当てをしておこうではないか。例えば、本誌の編者、香川県では数少ないヴァーグナー研究家・最上英明氏を事務局に、おのおのが所持するコレクションを申告し、もしものときは、学術研究のために遺贈する手はずを整えておく、なんぞ、いかがか。

因みに、筆者は、バイロイトで上演される１０演目（さまよえるオランダ人、タンホイザー、ローエングリン、トリスタンとイゾルデ、ニュルンベルクのマイスタージンガー、ニーベルングの指輪全４部作（ラインの黄金、ワルキューレ、ジークフリート、神々の黄昏）及びパルジファル）すべてのスコア（総譜）を持っている。レコードや映像を全演目持っているというワグネリアンは、このご時勢、結構いると思うが、スコアとなると、そうはいくまい。果たして、香川県にいるだろうか？これだけのスコアを持っている人が？実際、筆者は収集に、半端でない時間と金をかけた。

えっ？なぜ、また、そんな酔狂なものを集めたのかって？理由は簡単です。再度言います。ヴァーグナーの作品は、すごい。深い。和音が厚い。他の音楽とは全く違う。これを実証するには、レコード、ＣＤ、ＬＤ、ＤＶＤと、メディアは増えたが、やはり原点（又は原典）に返れ、だ。ヴァーグナーの作品のスコアは、とにかく分厚い。そりゃ、１作３時間などざらなのだから、当然と言えば当然だ。そして、ページをめくれば、和音の厚さ、深さが眼前に広がる。なんと多数の楽器が多重構造で演奏していることか。

かつて、ドイツ語に不慣れな頃は、対訳を相手に、今どこを歌っているか、必死で追いかけていたが、原語と日本語対訳が、ボタンひとつで自由に画面に出せるようになったＤＶＤ時代においては、スコアを追いかけることが、最後にワグネリアンに残された、マニアックな楽しみとなった。

さて、この、貴重な文化資源、必要とあらば、いつでもお貸しする。そして、ヴァーグナーの作品のすごさ、深さ、和音の厚さを、ご堪能いただきたい。これも、文化ペテン師の面目躍如、黄昏のワグネリアンの生きる道だ。

父称についての考察

－アラビア語圏、ロシア語圏にまたがる氏名の法則性－

近藤　昌紀

以下に述べるのは、香川大学経済学部最上英明教授がこの程翻訳された、ペティ・ド・ラ・クロワの「ルスヴァンシャド王とシェーリスタニ王女の物語」（香川大学経済論叢第81巻2号抜刷　2008年9月）を読んでいて、閃いた言語の法則性のことである。

同物語に、おそらくは架空の国家であろうナイマン国の大臣「アリ・ビン・ハイタム」という人物が登場する。典型的なアラビア語圏の名前で、誰もがこの名前を見て連想するのが「オサマ・ビン・ラディン」であろう。

この名前が最初に出たのは、2001年9月11日、アメリカ同時多発テロのときであったと思うが、アラブの名前の法則性を知らなかった日本を含む西欧各国のマスコミは、当初「オサマビン・ラディン」と報道していた。が、1週間も経たない内に、新聞各紙に囲み記事で訂正記事が出て、「ビン」というのは、アラビア語で「息子」という意味であり（筆者が後に知ったところでは、イビンがその原形で、ビンはその形容形であったように思う。）、オサマ・ビン・ラディンとは、日本風に言えば「ラディンの息子オサマ」という風に読むのが正解で、以後は、名をオサマ、姓をビン・ラディンとして、「オサマ・ビン・ラディン」で統一するということになった。

これを見て思い出した、というより連想したのがロシア（語）の「父称（オーチェストバ）」だ。

筆者が初めてこの父称のことを知ったのは、高校時代の国語の授業で、チェーホフの作品が教科書に教材として載っていたときに、作者紹介欄で、本名「アントン・パーヴェロヴィッチ・チェーホフ」とフルネームで載っていたのを、たまたま、そのときの国語の教師が、真ん中の「何とかヴィッチ」というのは、「何とか」の部分は父の名で、「ヴィッチ」とは子の形容形であること。従って、この場合の父の名はパーヴェルで、日本流に言えば、「アントン・パーヴェルの息子・チェーホフ」となることを教えてくれた。

その後、興味本位でかじったロシア語で、これが真実であることを知るとともに、父称のロシア語「オーチェストバ」のもとは、父の意味の「アチェーツ」から来ていて、そのロシア文字（キリル文字）表現をそのまま読むと、「オチェーツ」と読めるのだが、語中での「O」は、ロシア語圏では、ほとんど「ア」に近い読み方をすること。だから、「ボリショイサーカス」や「ボリショイ劇場」のボリショイは「大きい」という意味だが、現地では「バリショイ」と発音する。ユーリ・ガガーリンの乗った人類初の有人宇宙船「ボストーク（東方）号」は、「バストーク号」で、ウクライナあたりでよくある女性の名前「オクサーナ」は「アクサーナ」という具合に使うことを知った。

ただ、この原則にも例外がたまにあって、詳しい法則は失念したが、父称＝「オーチェストバ」も、キリル文字表示を発音原則どおりに読めば「アーチェストバ」となるところ、このOにはアクセントが付いているとかで、例外的に「オーチェストバ」と文字どおり読む、とのことである。

さらに、その後に知ったことだが、ロシア語圏での会話での、個人の最高の敬称は、「アントン・パーヴェロヴィッチ・チェーホフ」であれば、「アントン・パーヴェロヴィッチ」と、父称までで止める

ことだそうな。このことを知って、積年の疑問が解けたことがある。

時は、ブレジネフ・ソ連書記長存命中のことだから30年近くも前のことになるが、「ビッグコミック」誌に今も連載中で、麻生総理も愛読している『ゴルゴ１３』の一シーンに、クレムリンに向かう高級車の中で、首から上をわざと描いていない最高幹部らしき人物が、同乗しているこれも閣僚級らしい人物に何かを命じ、その閣僚らしき人物は、

「分かりました。レオニード・イリイッチ」

と返答する。その最高幹部らしき人物は、周辺の雰囲気や体形から見て、ブレジネフ書記長に違いないと分かるように設定してあるのに、どうして、この閣僚にブレジネフ本人の氏名を言わせないのだろうと、不思議に思っていたのだが、この父称で止める名前の呼び方が最高の敬称であることが分かって、なるほど、よくできたマンガだわい、と感心したものだった。

さて、話は随分横道にそれたが、ロシア語圏及びアラビア語圏での共通事項として、名前に父親の名前を織り込むことは共通している。アラビア語あたりをかじっていると、このようなロシア語との共通性が、時たま目に付くことがある。(例えば、茶は、ロシア語では「チャイ」、アラビア語では「シャイ」とか。)

ユーラシア大陸が、それすなわち、ユーロ・アジア大陸であり、その両方にまたがるロシアという国は、まさにその両方の文化が融合した、摩訶不思議な文化を持つ国である。小泉政権発足当初の2002年頃、鈴木宗男代議士、佐藤真紀子外相との政治的確執に端を発した鈴木宗男逮捕、それに連座した外務省（ロシアンスクール）職員、佐藤優の逮捕以後、日本の対露外交は随分後退した。2006年8月16日、北方海域での、ロシア警備艇の日本漁船銃撃、乗組員1名死亡事件など、その結果の最たるものであろう。

名前に父親の名前を取り込む国家、すなわち、アラビア語圏とロシア語圏、この圏域の闇は深い。今後も研究の余地は十分にある、と、筆者は、ふんどしを締めてかかっている。

ベルリン・フィル創立１２５周年によせて

1882 年に創立したドイツを代表するオーケストラであるベルリン・フィルは，2007 年に創立 125 周年を迎えた。それを機に出版された訳書についてご紹介する。

2時間でわかる　世界最高のオーケストラ
ベルリン・フィル

アイネマリー・クライネルト【著】　最上英明【訳】

世界で日本にしかない決定版、刊行

創立一二五周年の今年、ベルリン・フィルについての本が、小社より刊行された。この本の原書は、ベルリンについてのガイドブック・シリーズの一冊。ビギナー向きの本ではあったが、著者が用意した原稿はかなりマニアックな専門書といっていい内容だった。そのため、シリーズとして頁数が決まっているなどの理由で、大幅にカットされてしまう。だが、著者は諦めなかった。そのカットされた原稿を、ウェブ上で公開したのである。今回の日本語版は、そのカットされた部分を「原書にない原注」として復活した。本という形態としては、世界で日本にしかない決定版といえる。本文については、基本的にガイドブックであるが、このこだわりの強い著者は単なるガイドにしていない。多くの楽団員に取材し、彼らが客演指揮者をどう評価しているかとか、世界各地のツアーでのエピソードなど、人間集団としてのベルリン・フィルについて、ユーモアを交えながら、かなり詳細に伝えている。日本でのエピソードなどは、その時楽団員がどんな表情だったかを想像すると、たいへん愉しく読める。

また、掲載されている四十点近い写真は、楽団のヴァイオリン奏者だったグスタフ・ツィンマーマンが撮ったもので、オーケストラの内部の人にしか撮れないものが多数ある。楽団員や様々な客演指揮者の素顔の写真も良いが、楽器輸送用の飛行機の内部などもかなりユニークだ。

詳しくは、本をお読みいただきたいのだが、いくつか、さわりだけ紹介しておこう。

ベルリンに来た人が「どうしたらフィルハーモニーに行けますか?」と通行人に尋ねると、返ってきた答えは「練習！　練習！　練習！」だった。

という有名なエピソードから本文は始まる。言うまでもなく、オーケストラとしての「ベルリンのフィルハーモニー」とホールとしての「フィルハーモニー」が混同されているのを示す逸話である。そこから、楽団の成り立ちや、組織、きまりといった運営面についての解説があり、簡単な歴史も語られる。その中で、今号の特集であるチェリビダッケについては、

彼（フルトヴェングラー）の後を継いだのが、三十三歳のルーマニア人セルジュ・チェリビダッケだった。フルトヴェングラーは当時まだ未知だったこの人物を高く評価していた（チェリビダッケはそれまでにパリとベルリンの大学で勉強していた）。クラウス・ラングは彼をフルトヴェングラーの「代理指揮者」と呼んでいる。その専門的な成熟ぶりには楽員たちも感激した（彼はすべての曲を暗譜で指揮した）。しかし彼が手際よく処理できない日常的な事柄に関しては激しい対立も生じた。とくに、オーケストラの年齢構成も問題だった。この個性的な指揮者は、平均年齢が他のオーケストラよりも高かった点を非難した。これは、ベルリン・フィルの楽員が戦時中、招集されなかったことによる。

と記され、カラヤン時代の後、三十七年ぶりにベルリン・フィルを指揮したときの写真が掲載され、そのキャプションには、「空白期に首席指揮者を務めた」となっている。

その他登場人物は多彩だが、あまり日本では知られていない「関係者」としては、コメディアンの「ロリオ」が紹介される。ドイツではかなり有名らしいが、本名をヴィッコ・フォン・ビューローといい、そこから分かるように、あのハンス・フォン・ビューローの一族である。

第二章はカラヤン、第三章はアバドにあてられている。カラヤンとフルトヴェングラーの関係については、こんなふうだ。

二人が同僚として会話する機会は一度もなかった。フルトヴェングラーの死後、カラヤンはその後任になると、フルトヴェングラーとは違うことを示そうとした。オーケストラの伝統的習慣がカラヤンの出す指示の邪魔になると、「古いしきたりはもう止めよう」と彼が言ったと、何人かの楽員は伝えている。曲の冒頭のアインザッツでは、フルトヴェングラーは本来のアインザッツの前にほんのわずか腕を落ち着きなく震わせ、いつも一番遅く音が出るコントラバスの奏者が、明確なアインザッツなしに弾き始めることによって、緊張を解いて演奏を開始していた。この習慣は容易にはなくならず、カラヤンは気に入らなかった（何人かの客演指揮者、ラファエル・クーベリックな

チェリビダッケ、
1992 年の公演のリハーサル。

B6 判・256 頁（注 48 頁）
定価 1785 円
発売中

著者と、カラヤンの像。

マーラーを指揮した後の、アバド。

ベルリン・フィルの楽器輸送機。

どもそうだった）。カラヤンはアインザッツを与えるのは特定の奏者たちではなく自分だけだと、何度も繰り返し理解させようとした。実際、曲の重要な個所でのカラヤンの指揮ぶりは、フルトヴェングラーよりも明瞭だった。「古いしきたり」をやめるために、何人かの楽員は過剰反応して、十分の一秒遅く弾き始めたりした。

アバドはベルリン・フィルの歴史上初めての現役で活躍する「前首席指揮者」である。退任直前、胃がんを克服してのコンサート成功の後、著者がインタビューしたときのこと。

私が二〇〇二年二月、フィルハーモニーでのリハーサルに彼を訪ねたとき、自分を回復させてくれたのはまさに音楽だったと語ってくれた。「音楽を通して、オーケストラのいい雰囲気も個人的な健康も何でも手に入ります。音楽は最良の息抜きなのです。音楽があるから、人生の喜びも嵐も乗り越えられるのです」。彼はプログラムを辛抱強く遂行することで、コミュニケーションを求めた。リハーサルの休憩中でさえ――退出はせずに――楽員と話をしたりして、ほんのわずかしか休憩しない様子も見受けられた。彼は以前よりも心が澄み切ったような笑顔を見せるようになった。

さて、ベルリン・フィルの歴史はツアーの歴史でもある。最初期から、楽団はヨーロッパ各地を旅していた。そしていまは、世界各地を旅している。第四章はこのツアーについての章。日本についての頁もけっこう割かれているし、カラヤン時代にはイスラエルに行けなかった事情についても、書かれている。そこで楽団員が最も印象に残っていると語るのが一九六五年のギリシア。アテネから約七十キロ離れたエピダウロスの円形劇場でのコンサートだ。

空は黒いビロードのようで、風のまったくない無風状態。公演の終わり頃に、空に月が現れると、この晩の厳粛な雰囲気にみんな魅了された。西洋文明の根幹がこの地域にあるのを感じたと、今日でも当時の感激を夢中になって語る楽員がいる。

バーンスタインには、禁煙のきまりも関係ない。

ラトル、1987年。

第五章は客演指揮者についての章で、バーンスタインが禁煙のはずのリハーサルでタバコを吸っている写真（上のもの）が掲載されている。共演はたった一回しかなかったが、印象は強烈なようだ。

バーンスタインは、難しいパッセージ、たとえば、苦悩に満ちた動揺した気持ちを表現するようなときなど、内面的な気持ちの昂まりと演奏に集中しようとする気持とのあいだに生じる緊張をうまく切り抜けさせた。ドラマティックに大音量となる個所のあとで、ヴァイオリンの長いボウイングによる面倒なピアニッシモが続くようなときでも、彼は神経質にならないようにと配慮した。「すべては喜びだけです」と繰り返し言った（彼の本に『音楽の喜び』がある）。彼は絶大な魅力でホールに活気をもたらした。

ベルリン・フィルの歴史は世界のクラシック音楽界の歴史。ベーム、ヨッフム、ジュリーニ、ショルティ、小澤などが重要な客演指揮者として位置づけられ、カラヤン、アバドそれぞれの後継者候補だった人たちについても、語られている。なかには、なぜその人物が「選ばれなかった」のか、その理由も。

ここではとても紹介しきれないほど、バラエティに富む活動が紹介されるが、第二の本拠地ともいうべきザルツブルクについては、その音楽祭を中心としたエピソードが、特別に第六章として、詳しく書かれている。ザルツブルグに行きたくなる人も出てくるはず。

最後はラトルとの「現在と将来」についての章だが、ドイツの構造改革はここにも及び、公的援助に頼っていたベルリン・フィルの時代は終わった。新しい時代にむけて、伝統と革新の歴史を、ベルリン・フィルは、どう展開していくのだろうか。

全体にさらっとした記述なので、二時間で読もうと思えば読める。しかし、その後で、原書にはない原注もお読みいただけば、さらに満足感が膨らむ。

編集部

写真はすべて「2時間でわかる世界最高のオーケストラ　ベルリン・フィル」より。

日本語版(訳者)とドイツ語版(原著者)

[2008年3月，ベルリンの著者の自宅で]

続々と刊行されるベルリン・フィル関連書

最上英明

このたび拙訳でアルファベータから『2時間でわかる世界最高のオーケストラ ベルリン・フィル』が刊行された。原書のアンネマリー・クライネルト著『Berliner Philharmoniker』(二〇〇五年)は、ドイツでは『ベルリン・コンパクト』というベルリンを紹介する新書シリーズの一冊として出版されたもので、頁を少なくしたいという出版社の意向で、著者の原稿にあった膨大な注は掲載されなかった。そこで、読者がその注をネットで見れるように、原書にそのアドレスが記されている。ベルリン・フィルを紹介する単行本が日本で刊行されるのは久しぶりなので、日本語版を出すなら、この注も収録した方が有意義だろうと思い、幸い、著者も編集長も同意見だったので、注も完全収録した形で出版することができた。

クラシックジャーナルの読者の方々にとっては、本文に書かれていることはすでにご存知の内容が多いと思うが、ぜひ注を読んでいただきたい。

注については、訳者の価値判断が入り込まないよう、取捨選択せずにささいなものも含め、すべて訳出した。この注で一番役に立ったのは、紹介されている数多くの参考文献である。ベルリン・フィルを研究したい方にとっては、貴重な情報源となるであろう。もちろんカラヤンの登場などの注では、他のカラヤン文献から引用されていることも多く、カラヤンの文献に精通している方には周知の内容も多いかもしれない。

この注を訳出するにあたり、ドイツの新刊・古書サイトを通してかなりの数の文献を購入した。アバドとベルリン・フィルの写真集が、アルファベータから出版されているもの以外にもあることや、一九四五～二〇〇〇年のベルリン・フィルの全プログラムをベルリン・フィルのデータベースを利用して詳細に分析した、アンネマリー・フォークトの研究書があることも知った。その分析の一部は、注で紹介されている通りである。一番引用が多いのは、ティム・ラウテルトの膨大な写真をもとに十三名が寄稿して一九八七年に出版された『ベルリン・フィル』という本だが、ベルリン・フィルの演奏活動の様子が、楽員のプライベートな姿などとともに紹介され、一九八〇年代に出版されたもっとも優れた文献と思われる。刊行後にベルリン・フィルが大きく変革することになり、日本では出版される機会がなかったのが残念である。訳注で紹介したツィンマーマンが日本で捕獲した新種のカブト虫の話の詳細も、この本での情報による。

二〇〇七年のベルリン・フィル創立百二十五周年を記念するヨーロッパ・コンサートはベルリン郊外のケーブル工場で開催された。ここで開催されたのは、一八九五～九七年にかけて建設されたこの工場が、ベルリン・フィル創立期の雰囲気を残しているからだという（AEG社の創業は一八八七年）。工場内にあったターピンなどはすっかり取り払われ、きれいに改修されたとはいえ、本来の演奏会場ではないので、演奏は大変だったのではないかと推測される。当日の生中継の映像では、休憩後のブラームスの交響曲第四番、ラトルが登場して答礼したあと、工場内の聴衆が完全に整うまで、一分半も指揮台で待機してから演奏を始めている。第三楽章の二四〇～二四二小節のクラリネットとホルンが揃って落ちたのも驚いたが、第四楽章での緩徐部が終わった直後、二三九小節目でステージ後方から何かが倒れたような盛大なノイズ。数名の楽員が後方を振り向く姿も映っている（これらは日本での放送時には修正されるのだろうか）。

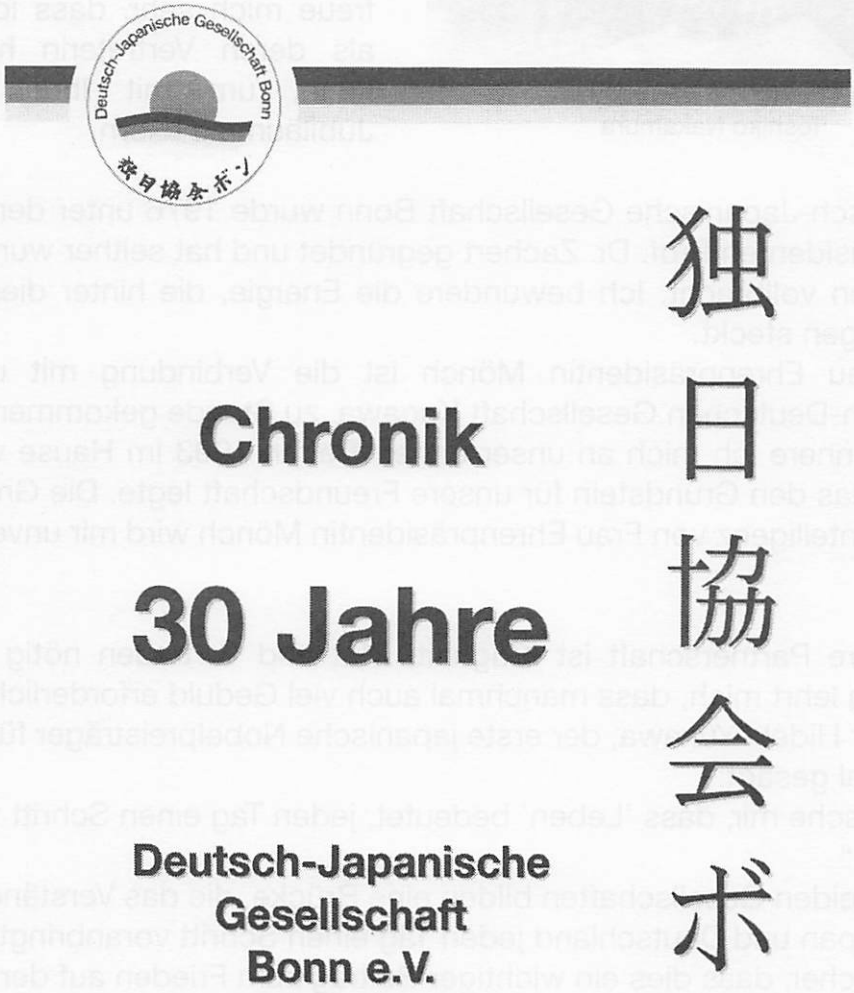
今年、ドイツでは、ベルリン・フィル関係の本の出版が続いている。ヘルベルト・ハフナーの『ベルリン・フィル』は創立期から現代までの標準的な通史。ユルゲン・ドルマンとヴォルフガング・ベーンケンの編集による『ベルリン・フィル』は、ディーター・ブルームの膨大な分量の写真で近年のベルリン・フィルを紹介する。ブルームは二十四年前にもベルリン・フィルの写真を発表し、日本でも『ザ・オーケストラ―帝王カラヤンとベルリン・フィルの全貌』として出版されたが、その本の現代版といえるかもしれない。これから刊行が予定されている文献は、さらに注目される。ミシャ・アスターの『帝国オーケストラ―ベルリン・フィルとナチズム』、そして本命と思われるのが、ベルリン・フィル自身の編集による『オーケストラのヴァリエーション―ベルリン・フィル百二十五周年』（全二巻）。どちらも八月の刊行が楽しみである。

最上英明（もがみ ひであき）1959年、仙台市生まれ。北海道大学大学院文学研究科修了。専門はドイツ語学。現在、香川大学大学教育開発センター教授。ベルリン・フィルの情報やデータを、ウェブサイトで収集している（http://homepage1.nifty.com/bpc/）。

最近、編集部に届いた、ベルリン・フィルとその指揮者たちの本。左上が、文中で最上氏が紹介している、ヘルベルト・ハフナーの『ベルリン・フィル』。左下が、今回の本の原書。

独日協会ボン創立３０周年によせて

1976年に設立された独日協会ボンは，2006年に創立30周年を迎えた。その30年間の歴史をまとめた記念誌が，今年になって刊行された。当協会の中村会長の祝辞も掲載され，また当協会との姉妹協定についても詳しく紹介されている。



Präsidentin derJDG Kagawa,
Toshiko Nakamura

Grußwort

Ich möchte der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Bonn die herzlichsten Glückwünsche zum 30-jährigen Bestehen von der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa überbringen und freue mich sehr, dass ich heute als deren Vertreterin hier sein kann, um mit Ihnen dieses Jubiläum zu feiern.

Die Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn wurde 1976 unter dem legendären Präsidenten Prof. Dr. Zachert gegründet und hat seither wundervolle Leistungen vollbracht. Ich bewundere die Energie, die hinter diesen Veranstaltungen steckt.
Dank Frau Ehrenpräsidentin Mönch ist die Verbindung mit uns, der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa, zu Stande gekommen.
Gerne erinnere ich mich an unser erstes Treffen 1993 im Hause von Frau Mönch, das den Grundstein für unsere Freundschaft legte. Die Großzügigkeit und Intelligenz von Frau Ehrenpräsidentin Mönch wird mir unvergessen bleiben.

Für unsere Partnerschaft ist Klugheit, Mut und Vertrauen nötig und die Erfahrung lehrt mich, dass manchmal auch viel Geduld erforderlich ist.
Professor Hideki Yukawa, der erste japanische Nobelpreisträger für Physik, hat einmal gesagt:
„Ich wünsche mir, dass 'Leben' bedeutet, jeden Tag einen Schritt voranzukommen."
Unsere beiden Gesellschaften bilden eine Brücke, die das Verständnis zwischen Japan und Deutschland jeden Tag einen Schritt voranbringt, und ich bin mir sicher, dass dies ein wichtiger Beitrag zum Frieden auf der Welt ist.

Ich wünsche der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Bonn von Herzen alles Gute, damit sie auch ein 50-jähriges und ein 100-jähriges Bestehen feiern wird.

Toshiko Nakamura
Präsidentin der JDG Kagawa

Partnerschaft mit der JDG Kagawa:

Die Delegation der DJG Bonn e.V. in Takamatsu/Kagawa beim Besuch des Bürgermeisters von Takamatsu

Es gehört inzwischen zum allgemeinen Erfahrungsschatz, dass die in der Satzung genannte „Förderung der gegenseitigen Völkerverständigung zwischen Deutschen und Japanern" am besten durch die Förderung gegenseitiger persönlicher Begegnungen möglich ist.

Ein Zufall brachte den persönlichen Kontakt zu der Vizepräsidentin der **Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa** (Sitz in Takamatsu auf Shikoku), aus dem eine freundschaftliche Beziehung zwischen der DJG Bonn und der JDG Kagawa erwuchs.

Am 17. Oktober 1994 wurde in Takamatsu ein **Partnerschaftsvertrag** unterzeichnet, dem der Gedanke zugrunde liegt, durch gegenseitige Besuche von Mitgliedern jeglichen Alters das Verständnis für die Unterschiede des jeweils anderen Landes zu verbessern und Freundschaften wachsen zu lassen.

Vorgeschichte:

Erster Besuch von Frau Nakamura im Hause Mönch, zusammen mit Frau Becker-Blonigen und Frau Ueda-Schmidt

Von 1974 – 1976 hielt sich Herr **Prof. Nakamura** als Abgesandter des japanischen Kultusministeriums zu Forschungszwecken an der Universität München auf. Seine Frau Toshiko besuchte ihn dort mit den beiden noch kleinen Töchtern für längere Zeit. Die Erlebnisse in Deutschland waren für die Kinder so prägend, dass sie nach ihrer Rückkehr immer wieder ihre Sehnsucht nach Deutschland äußerten. Auch **Frau Nakamura** hatte die Liebe zu Deutschland entdeckt. Sie suchte deshalb für ihre Familie Gelegenheiten, Kontakte nach Deutschland aufrecht zu erhalten oder neu zu knüpfen. Deshalb bot sie sofort die Aufnahme von deutschen Gästen an, als die Verbände der Japanisch-Deutschen und der Deutsch-Japanischen Gesellschaften Ende der 80er Jahre ein gegenseitiges Homestay-Programm ins Leben riefen. Sie äußerte später, dass der Austausch mit vielen deutschen Jugendlichen auch die eigene Familie prägte und aufgeschlossen machte für die Kultur und Tradition des Landes, aus dem die jungen Gäste kamen.

In einem Aufsatz über die **JDG Kagawa** schrieb Frau Nakamura: „Wenn man in Japan Dinge erst einmal in Gang gebracht hat, ergibt sich alles weitere fast von selbst. ‚Ten no taki, chi no ri, hito no wa – zur rechten Zeit, am geeigneten Ort, mit den richtigen Menschen'". Unter diesem Vorzeichen wurde am 13.10.1991 die JDG Kagawa gegründet. Frau Nakamura wurde als Hauptinitiatorin zur Vizepräsidentin ernannt.

Im Januar 1993 flog Frau Nakamura nach Deutschland, um ihre Tochter zu besuchen. Ihr Wunsch war es, mit einer im Rheinland angesiedelten DJG Kontakt aufzunehmen. Leider gelang ihr das weder in Düsseldorf noch in Köln.

Als Frau Mönch von Frau Nakamura einen Anruf erhielt, lud sie sie zusammen mit den Vorstandsmitgliedern Frau Becker-Blonigen und Frau Ueda-Schmidt zu einem Mittagessen in ihr Haus ein. Sie hatten nur relativ kurz Zeit für eine Unterhaltung, doch der Funke der Sympathie entzündete die Idee einer gegenseitigen Partnerschaft.

Die offizielle Unterzeichnung des Kooperationsverstrages

Am 17. Oktober 1994 war es soweit. In einem feierlichen Akt und unter Anwesenheit von ca. 100 Mitgliedern und Gästen unterzeichneten im Kawaroku-Hotel in Takamatsu die damaligen Präsidenten **Kiyoshi Hosokawa** und **Wolfgang Dietz** sowie die Geschäftsführer **Hiroshi Hajiro** und **Marianne Mönch** den **Kooperationsvertrag**. Er drückte die Absicht aus, künftig zusammenzuarbeiten und unter den Mitgliedern beider Gesellschaften das Verständnis für das jeweils andere Land zu fördern, um so einen besonderen Beitrag zur Völkerverbindung und für den Frieden in der Welt zu leisten. Es war die erste Verbindung zweier DJGen/JDGen, die ohne kommunale Mithilfe zustande kam und bis heute angehalten hat.

Kooperationsvertrag

zwischen

der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa

und

der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Bonn e.V.

Die Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa und die Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e.V. beurkunden hiermit ihre Absicht, künftig zusammenzuarbeiten und unter den Mitgliedern beider Gesellschaften das Verständnis für das jeweils andere Land sowie die Entwicklung freundschaftlicher Beziehungen zu fördern. Damit wollen sie einen besonderen Beitrag zur Völkerverständigung und den Frieden in der Welt leisten.

Takamatsu, 17. Oktober 1994

Kiyoshi HOSOKAWA, Präsident — Wolfgang DIETZ, Präsident

Hiroshi HAJIRO, Geschäftsführer — Marianne MÖNCH, Geschäftsführerin

ボン独日協会 香川日独協会
姉妹協会宣言

ボン独日協会及び香川日独協会は
姉妹協会として提携し
両協会の関係及び両協会会員の相互理解を
一層発展させることをここに宣言します
この友好関係がドイツ日本両国間の協調に貢献し
更には世界平和に寄与することを希望します

1994年10月17日 高松

ボン独日協会
会長 Wolfgang Dietz
事務局長 Marianne Mönch

香川日独協会
会長 細川清
事務局長 羽白洋

Oberbachem (Wachtberg) mit japanischen Augen gesehen

Die beiden Hobbymalerinnen Akiko Matsushima und Reiko Uchida

In den ersten beiden Jahren nach der Gründung kam uns bei der Vertiefung des Kontaktes sehr die Tatsache zugute, dass ein Mitglied unserer Gesellschaft, Herr **Peter Himmelstein**, als Teilnehmer des von der japanischen Regierung organisierten JET-Programms in der Präfekturverwaltung von Kagawa in Takamatsu tätig war. Über ihn liefen die vorsichtigen Annäherungen und die Organisation der ersten gegenseitigen Homestay-Besuche. Danach übernahm Professor **Shin Takagi**, Germanist, auf japanischer Seite die Koordination für den Austausch.

Zwischen 1994 und 2002 gab es regen **Homestay-Austausch**. In der Mehrzahl nahmen Studenten daran teil. Doch auch ältere Menschen nahmen dieses Angebot wahr. Zuletzt kamen 2006 zwei Hobbymalerinnen nach Bonn, um eine Woche in einem kleinen Hotel in Bonn auf eigene Kosten zu wohnen, Ausflüge in die Umgebung zu unternehmen, Landschaft und Ortschaften zu skizzieren (siehe Bild oben) und täglich mit DJG-Mitgliedern zusammen zu kommen.

Frau **Ai Nagasawa**, Mitglied der JDG Kagawa, war als Studentin Homestaygast in Bonn, studierte ein Jahr in Wiesbaden und kehrte nach einigen Jahren Berufstätigkeit nach Deutschland zurück, um ein halbes Jahr als Volontärin Erfahrungen zu sammeln. Seit ihrem ersten Aufenthalt ist sie mit einigen Mitgliedern der DJG Bonn in ständigem Kontakt und seit kurzem unsere reguläre Ansprechpartnerin in Takamatsu geworden.

Unsere Ansprechpartnerin in Takamatsu: Frau Nagasawa

Kagawa Takamatsu

Mitglieder der JDG Kagawa mit der deutschen Delegation nach dem Pflanzen einer Tanne im Chuō-kōen in Takamatsu

Mitglieder der JDG Kagawa werden weiterhin von der DJG Bonn herzlich willkommen geheißen und unterstützt – sei es durch Homestay-Angebote oder durch Hilfe bei der Suche nach einer preiswerten Unterkunft und zeitweiliger Betreuung durch unsere Mitglieder. Das gleiche Angebot besteht auch von Seiten der JDG Kagawa.

Der weiteren Zusammenarbeit wird daher hoffnungsvoll entgegengesehen. Beide Gesellschaften tauschen sich gegenseitig über ihre Veranstaltungen aus. Zur Zeit arbeitet man an einer direkten Verbindung der beiden **Internet-Auftritte**.

旧友の涙

中村敏子

５月のカールスルーエは爽やかで青空が澄み切っていた。全国独日協会連合会総会が３日間この地で執り行われ、会合に参加を目的とした日独協会連合会のドイツ旅行団総勢４７名のグループはベルリンをかわきりに２０日間の旅を堪能しつつ現地に到着した。人と人との交流を主とし、なるだけ多くのユネスコ世界文化遺産を見学するなど、盛りたくさんの旅が計画され、その総合案内役をボン独日協会名誉会長メンヒェ夫人と独日協会連合会ノィエルト副会長のお二人がなさっていた。旅行行程は綿密に練られ、訪れる先々の関係機関、見学箇所、各地方の長などへの配慮などそれは行き届いたスケジュールであったと聞いた。
ことにメンヒェさんは昨夏、大きな手術を受けられその回復が私たちの切なる願いであり有志で千羽鶴を折ってとどけたものである。その彼女が旅のコーディネーターとして２週間にわたり一行と同道し車中では資料を一人一人に手渡し訪問地についての詳しい説明までされたという。驚くべき責任感と客人をもてなす奉仕のこの姿はなんだろうか　と心から頭が下がった。私はドイツの娘宅に滞在していたが、彼女に会いたいという一念でこの旅程のうち、ボンでの交流会とカールスルーエでの全国独日協会総会参加を申し出ていた。

ボン駅前の宿泊予定のホテルで待っているとかなり遅れてグループが到着。旅なれた一行はそれぞれに部屋へと消えていった。案じていた彼女の体調はかなり疲れがたまり、ことに気管支が疲労して声がかすれ聞きづらかった。無理をされておいでるのではと思いそっと握手の手をはなし部屋へあがって休まれるように促した。

夕刻、二人は子供のように手をつないで歓迎会会場まであるいていった。
ボン独日協会主催の夕食会は、話題がつきず盛り上がり懐かしい方たちの顔がならんだ。この時彼女からカールスルーエのホテルへ、孫を連れて家族で来て欲しいと伝えられ、十数年前から何かとお世話になっている娘夫婦は２歳の男孫を連れて出かけて来ることになった。
そういえばご子息が昨年結婚され、まもなく出産予定でお孫さんを心待ちなさっておいでると仄聞していた。しかも男のお子さんらしいとも。
お孫さんの誕生を待ち望んでいらっしゃる方のお招きとあらば万難をはいし　やんちゃ坊主は食事に使う子供用のスプーンとホークがお気に入りでいつも持ち歩いており、その日も同じスタイルでホテルへやってきた。彼 Hikari はホテルロビーのろうそくの明かりを次々と吹き消してはドアーマンと遊んでいた。「Hikari kom!」 と彼女が声をかけるととんでいき膝の側で目をじっと見あげてじゃれた。「まさかりかついだ金太郎」の絵が織り込まれているファイラーのハンカチをプレゼントされ、くだんのスプーンとフオークをナフキンがわりに包み込み彼は悦にいっている。今度は彼女のデジカメを見つけ押し続ける Hikari にはらはらする私をこれでいい！自由にさせて！と強くなだめ優しい目つきでしぐさを追っていた。娘たちはドイツの Oma と心をこめて呼ばして頂いている。家族の様子など細かく気にかけていただきこの日もいつものように近況報告で時間が過ぎた。

別れ際に思いもかけない言葉が彼女の口から出た。私たちはエッと息をのんだ。しばらく何をしたか　何をいったか覚えていない。悲報はこの旅の途中のことだったのか、それとも　と思う間もなく涙ぐんだ彼女は「早くお帰り！」という仕草でご自分も椅子をたった。
Hikari を連れてくるようにとせがまれたのは、喪われた幼い命と重ね合わせてのことだったのかと今ご縁を深く刻みながら振り返っている。あの眼鏡の奥の涙とともに。

Ein kurzer Rückblick auf die Deutschlandreise des Verbandes der Japanisch-Deutschen Gesellschaften

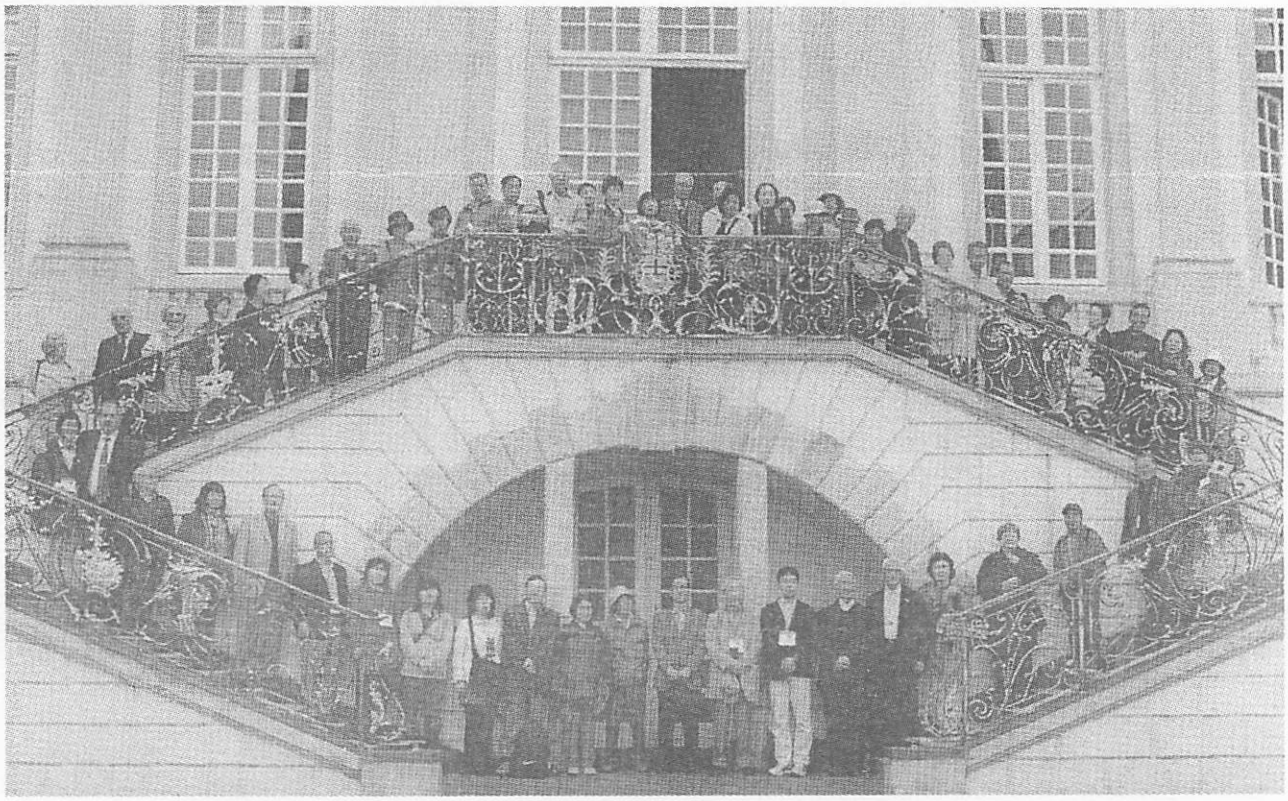
Bericht unserer Ehrenvorsitzenden Frau Marianne Mönch.

Sie fand vom 19. April bis 7. Mai 2008 unter der Leitung von Gesa Neuert (Verbandsvizepräsidentin, DJG Bielefeld) und Marianne Mönch (DJG Bonn) statt. 47 Teilnehmer aus den JDGen von Ibaraki, Tochigi, Gunma, Tokyo, Chiba, Shonan, Inuyama und Ishikawa bekamen auf ihrer langen Reise nicht nur bedeutende Städte, Landschaften und Kulturdenkmäler zu sehen, sie wurden vielerorts auchvon Vorständen und Mitgliedern der ansässigen DJGen herzlich willkommen geheißen. Es beteiligten sich die DJGen aus Berlin, Halle/Saalekreis, Braunweig/Peine/Wolfsburg, Bielefeld, Lemgo, Düsseldorf, Köln, Bonn, Aachen, Karlsruhe, Saarbrücken, Trier, Linden-Warabi und Frankfurt. Die vielen Empfänge in den Rathäusern, die Freundschaftsabende bei den DJGen mit Musik- und Tanzvorführungen, das gemeinsame Singen und nicht zuletzt die verschiedenen kulinarischen Genüsse der einzelnen Regionen ließen diese Reise weit abrücken von jeder Sightseeingtour. Die Teilnahme an der Verbandstagung in Karlsruhe vom 1.-3. Mai mit Empfängen und einem Sonderprogramm war natürlich ein besonderer Höhepunkt der Reise.

Ein herzlicher Dank geht an alle unsere Mitglieder, die sich am Freundschaftsabend in der Gaststätte „Bönnsch", beim Stadtrundgang, im Beethovenhaus und beim Rathausempfang so freundlich um unserer japanischen Gäste angenommen haben. Alle Reisenden sind inzwischen wohlbehalten und voll von guten Eindrücken nach Japan zurückgekehrt und es mangelt nicht an warmherzigen Dankesbriefen. Hier ein kurzer Ausschnitt aus einem Schreiben des Delegationsleiters:

„ ... Die Reise war einmalig fuer uns alle... Wir konnten alle Deutschland besser kennen und schätzen lernen, wir konnten unsere Freundschaft mit unseren deutschen Freunden vertiefen und wir konnten viele japanfreundliche prominente Leute treffen. Dies alles wird in unseren Herzen unvergesslich bleiben."

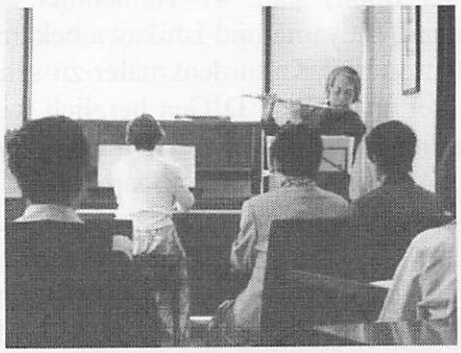
Es wurde von japanischer Seite der Wunsch nach einer weiteren Verbandsreise ausgesprochen, die anlässlich von „150 Jahre er erstes japanisch-deutsches Handelsabkommen" im Jahr 2011 wieder nach Japan führen soll.

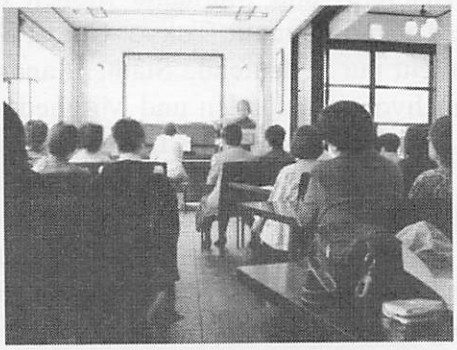


平成18年度 香川日独協会 事業報告

平成１８年（2006年）

4月2日　「フルートの午後」協会員関口浩一、俊子によるコンサート　La Speranza





4月8日～10日　Berlin独日協会会員１６名来高（ホームステイ２泊）

屋島、栗林公園観光、さくら交流会（ベルリン独日協会員を囲んで夕食会）

4月12日　全国日独協会総会（東京）

5月25日～27日　全国独日協会総会（ブレーメン）

6月4日　香川日独協会総会（全日空ホテルクレメント高松）

ドイツ子供の絵本２００冊を香川県立図書館へ寄贈・目録を手渡す

ドイツに親しんで

県立図書館へ絵本寄贈

香川日独協会

東山館長（右）に目録を手渡す中村会長＝高松市内

香川日独協会（中村敏子会長）は四日、ドイツの絵本二百冊を高松市林町の県立図書館（東山敏昭館長）に寄贈した。

同協会が贈ったのは、二〇〇四年に姉妹協会提携締結十周年を記念してボン独日協会（ドイツ）から贈られた絵本。百八十年以上も読み継がれていたり、手で触れて動物の形や質感が分かるなどユニークな絵本が多く、年齢を問わず楽しめる。

この日、高松市内のホテルで寄贈式があり、中村会長が「本を通してドイツに親しんでもらえれば」と目録を贈呈。東山館長は「楽しくて美しい本を贈っていただき、大変ありがたい」と感謝の言葉を述べた。

同館は、寄贈を受けた絵本を二十日から貸し出す予定。

四国新聞2006年6月5日掲載記事

8月7～10日　丸亀俘虜収容所に見る日独交流展（ヨンデンプラザ・サンポート）

ドイツ兵俘虜が撮った写真、バルトの楽園スチール写真など約200点展示

鳴門ドイツ館、チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会後援

丸亀収容所での暮らしぶり紹介

日独協会が写真展

第一次世界大戦中、丸亀市の俘虜（ふりょ）収容所で生活したドイツ兵の暮らしぶりを紹介する写真展（香川日独協会主催）が高松市のヨンデンプラザ・サンポートで開かれている。十日まで。

丸亀市塩屋町の西本願寺塩屋別院には、一九一四年から三百二十四人のドイツ兵捕虜を収容、松山、徳島両収容所と統合され、映画「バルトの楽園（がくえん）」の舞台となった徳島県の板東俘虜収容所に移るまでの約二年半、丸亀の住民と交流を深めた。

会場には、当時の生活を如実に伝える写真や資料計約百五十点を展示。スポーツや散歩を楽しむなど捕虜の日常をとらえた写真が並んでいるほか、コンサートや木工品の展示即売会といった住民を楽しませるイベントを通して盛んに交流した様子も紹介している。

ドイツ兵の生活を伝える写真展＝高松市、ヨンデンプラザ・サンポート

8月20日　ビールの会（全日空ホテルクレメント高松4Fルーフガルテン）

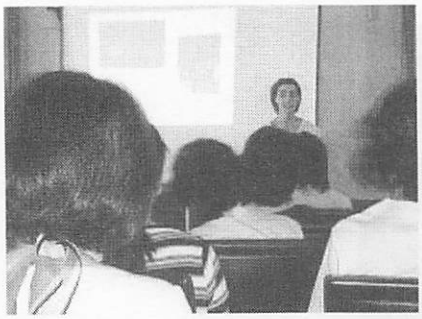
9月7日　菓子講習会～お菓子の古典を訪ねて～　　講師：藤生義治シェフ

めったに経験できないシェフによるボンボンの実演を見学

飴を使った古典洋菓子をつくる（ヨンデンプラザ・サンポート料理教室）

9月9日　ペトラの「ドイツを知ろう講座」　　La Speranza

香川県国際交流員による「ドイツの学校制度について」



10月14日　香川日独協会15周年記念内藤敏子チターコンサート　（香川県後援）

お庭の国宝 栗林公園 茶室 掬月亭でドイツ民族楽器チターの演奏会を催す

10月20日ドイツマスコミ関係者県内視察　6名

栗林公園掬月亭、小豆島など

10月21日　奈良日独協会とのミニ交流会　鳴門ドイツ館見学

鳴門市極楽寺で昼食など和気藹々の交流をする（会員は現地参加）

11月17日 Bonn 独日協会30周年記念会

Den Kulturaustausch immer im Blick

GEBURTSTAG Deutsch-Japanische Gesellschaft feiert 30-jähriges Bestehen

Bonner, die während der Weltmeisterschaft das Rheinische Landesmuseum besucht haben, werden sich noch gut erinnern: Das Museum verwandelte sich im Sommer nicht nur zum Fan-und Pressezentrum der japanischen Nationalmannschaft, sondern zugleich in eine japanische Kultur- und Begegnungsstätte. Dahinter stand die Deutsch-Japanische Gesellschaft (DJG) Bonn, die ein umfangreiches Kulturprogramm auf die Beine gestellt hatte. Die Veranstaltungen zur WM sind nur ein Beispiel für die vielfältige Arbeit der DJG, die sich unter anderem für Völkerverständigung und kulturellen Austausch einsetzt. Und das seit mittlerweile 30 Jahren: Die Mitglieder feierten am Freitagabend im Restaurant des Bundesrechnungshofes den Geburtstag der Kulturgesellschaft.

Feierten Geburtstag: *Mitglieder der Deutsch-Japanischen Gesellschaft mit dem Bonner Bürgermeister Horst Naaß (rechts).* FOTO: VOLKER LANNERT

Zum Geburtstag der DJG kamen weit mehr als 100 Gäste, unter ihnen Toshio Kunikata, japanischer Generalkonsul in Düsseldorf. Bürgermeister Horst Naaß überbrachte im Namen der Stadt Bonn Glückwünsche. Gegründet wurde die Gesellschaft 1976 auf Initiative von Dierk Stukkenschmidt, damaliger Lektor beim Deutschen Akademischen Austauschdienst (DAAD) und Herbert Zachert, Ordinarius für Japanologie an der Uni Bonn. „Die Gründung der Gesellschaft lag damals in der Luft", erinnerte sich Stuckenschmidt.

Etwa 60 Gründungsmitglieder kamen damals zusammen, unter ihnen Diplomaten und Vertreter von Stiftungen und Organisationen. Rund 30 von ihnen waren auch an diesem Abend anwesend und wurden für ihre langjährige Unterstützung geehrt. Die DJG Bonn hat rund 350 Mitglieder und bietet unter anderem Führungen durch den Japanischen Garten in der Rheinaue an. odb

12月16日　ペトラの「ドイツを知ろう講座」　ドイツのクリスマスについて

平成１９年（2007 年）

1 月 31 日　瀧川一幸会員（香川大学ドイツ語教授）退官にともなう最終講義を聴講
「ゲーテとファーストについて」於：香川大学

2 月 4 日新年会「春を呼ぶ会」　ラ・モンターニャ
四国旅行中の Trier 独日協会会長ら２名の参加があり抽選会でにぎわぐ

3 月 10 日　講演会「日独戦争と第九」講師：小阪清行氏（アイパル香川）

3 月 28～29 日　Braunschweig 独日協会会員来高１７名

28 日　さくら交流会（アイパル香川１F）うどん大使としてドイツへ出かける
横倉千枝さんの壮行会をかねる。　「二蝶」夕食会

29 日　一歩一景の栗林公園を散策、掬月亭で抹茶をいただく。正午京都へ出発。

さぬきうどん職人横倉千枝さん（協会員 26 歳）が Wolfsburg のアウトシュタットで 4 月 16 日に開店する「庵アン」で手打ちうどんを担当することとなり渡独。これは Braunschweig 独日協会 Balogh 輝子会長の紹介で成立したものであり、100 年つづくうどん屋の娘としてドイツでどんなうどんを披露できるか彼女のガッツに期待している。
麺類専門店はドイツではじめての試みで現地日本人のオアシスとなるよう見守っていきたい。

平成19年度 香川日独協会 事業報告

平成１９年（2007年）

4月24日（火），25日（水），26日（木）

群馬県草津において全国日独協会総会が行われた。会長出席

「若者の会」を大使館主導で行う。これからの日独を理解し牽引する上で若者に活躍してもらうには動きやすい環境が必要との意向による。長澤あい、中尾友紀２名参加

5月13日（日）　第１回理事会

5月22日（火）　ペトラのドイツを知ろう講座「春の祭りMaibaumと春の花ばな」

6月3日（日）　香川日独協会総会　全日空ホテル・クレメント高松３F飛天

第２回理事会　16：00　総会　17：00　終了後　懇親会

7月19日（木）　独・仏両大使来県　EUを代表する二カ国大使が同時に来県となる。

両大使ご夫妻が真鍋香川県知事（香川県庁）、大西高松市長を表敬訪問（高松市役所）

夕刻　日独協会、日仏協会による合同レセプションを開催

デア大使立合いのもと香川日独協会JG「若者の会」が発足

7月21日（土）　香川大学インターンシップ交流会（於：香川大学工学部）

7月22日（日）「ビールを楽しむ会」アサヒビール工場見学　タオル美術館見学など

8月4日（土）　JG第1回シュタムティッシュ　月例会として定着

8月31日（金）　メルケル首相講演会　於：京都国立国際会議場　会長出席

9月19日（水）　ペトラのドイツを知ろう講座「ドイツの環境問題」

10月2日（火）～16日（火）　於：ヨンデンプラザ・サンポート

「ドイツのUNESCO世界遺産」写真展を開催する。

AO版（１２０×４０）ポスターとパネル３６枚

10月7日（日）ジョイントコンサート　於：高松市立美術館講堂

關口晃市（協会員）、越野正信（北陸日独協会）によるフルートとピアノコンサート

10月28日（日）　香川県国際交流フェスタにJG「若者の会」が初参加　展示

会員全員の総力できめ細かい各地の写真展示は見る人を引きつけ、ドイツ製の買い物袋も好評であった。（アイパル香川１Ｆロビー）

11月9日（金）　関西圏５協会合同交流会と奈良正倉院展の鑑賞

奈良、神戸、大阪、京都、香川各日独協会（２７名）が参加。総勢　約６０名

奈良日独協会大安寺にて　昼食交流会と講話を聞く。

河野会長のご好意により寺内で各地の会員と交流がもたれ場所を移し西山厚氏（奈良国立博物館教育室長）の軽妙、丁寧な正倉院御物についての講話で予備知識をえて展示物を納得しながら鑑賞する。

平成２０年（2008年）

1月23日（水）ペトラのドイツを知ろう講座「ドイツパンを作ろう」

於：香川県社会福祉会館　料理教室

朝食によくでる丸パンBrötchenブローチェン４種類作りに挑戦する。

2月3日（日）　新年会「春を呼ぶ会」ボン独日協会・シュミット陽子さんと鳴門ドイツ館交流員 Patrick Wagner さんが特別参加。最上先生の伴奏で児玉律子さんの爽やかなソプラノで春を呼び寄せた。

3月12日（水）～30日（日）「ドイツ社会福祉史展」開催

ドイツ大使館クラウス・フィーツェ広報部長が来県され陣頭指揮をとり会場いっぱいの大型展示物が展開され圧巻であった。ビスマルク 1800 年代を主に展示し医療、労災、年金保険の成立から第2世界大戦の終結までを図と画像で見やすく展示。香川県の協力によりアイパル香川1F、2F のフロアーを使い大々的な展示となり添付した小冊子「図像と記録資料で綴るドイツ社会保障史」は高校の歴史副読本として重宝がられ、要望のあった県下高等学校にも配布した。

【表紙】

ボンのオペラハウス

香川大学がボン=ライン=ズィーク大学と提携して行っている現地でのドイツ語研修、6年目となった今年も3月4日～22日に実施された。学生が語学研修でボンに滞在したのは、3月8日～15日の一週間だけだが、ボンを離れる前夜の3月14日、ボンのオペラハウスで、モーツァルトの《フィガロの結婚》を鑑賞した。開場前にボン独日協会副会長のブルガスさんに来ていただいた。写真はそのときのものである。また私はベルリンにいたので参加できなかったが、その数日前には、ケーゲルバーン（ピンが9本のボウリング）で学生との交流会を開催していただいた。2年前、創立30周年を迎えたボン独日協会との交流が，今後も進むことを期待してやまない。

今年2008年は、ドイツ・オペラを代表する作曲家リヒャルト・ワーグナー（1813～1883）の没後125周年である。それに因んで、近藤昌紀氏にユニークな原稿を書いていただいた。ワーグナーのオペラは人気があり、日本でも毎年、国内・国外の団体によって頻繁に上演されているが、処女作の《妖精》だけは、まだ一度も上演されたことがなかった。今年の2月16日～17日、この《妖精》が東京オペラプロデュースにより新国立劇場中劇場で日本初演されたのは、快挙といえよう。実はこの公演、チケットは秋のうちに手配していたのだが、1月20日頃、プログラムの解説を書く依頼が急にきて、びっくり。東京の会場で自分の解説が載ったプログラムを読むのは何となく面映いような、不思議な気持ちがした。その後、この《妖精》のもとになったゴッツィの劇の、さらに原作となった物語（『千一日物語』の中の「ルスヴァンシャド王とシェーリスタニ王女の物語」）を、たぶん日本で始めて訳出したので、ご興味のある方は、ご連絡ください。またそのうちどこかで出版できたら，次号でご報告します。

香川日独協会会報 第14号
2008年11月発行

発　　行：香川日独協会事務局
Japanisch-Deutsche Gesellschaft KAGAWA
〒760-0017 香川県高松市番町 4-4-20
Tel: 087-861-6820
発行責任者：　中村 敏子（会長）
編　　集：　最上 英明
印　　刷：　（株）万成社